

飯田市上村の小字の由来・解釈

1. 「小字表」と「小字図」の双方に記載のある小字のみ

2. 参考資料は次の通り

- ①『日本国語大辞典』縮刷版（小学館）昭和 56 年
- ②新村出編『広辞苑』第 4 版（岩波書店）1993 年
- ③『日本方言大辞典』（小学館）2005 年
- ④福田アジオ他『日本民俗大辞典』（吉川弘文館）2000 年
- ⑤馬瀬良雄代表『長野県方言辞典』（信濃毎日新聞社）2010 年
- ⑥柳田國男監修『改訂総合日本民俗語彙』（平凡社）1985 年
- ⑦編纂委員会『上村史』（刊行委員会）平成 21 年
- ⑧楠原佑介ほか『地名用語語源辞典』（東京堂出版）昭和 58 年
- ⑨国語学会編『国語学大辞典』（東京堂出版）昭和 55 年
- ⑩柳田國男・倉田一郎『分類山村語彙』（国書刊行会）昭和 62 年
- ⑪谷川健一編『民俗地名語彙事典』（三一書房）1994 年
- ⑫上村民俗誌刊行会『南信州・上村 遠山谷の民俗』（刊行会）昭和 52 年
- ⑬『遠山谷北部の民俗』（飯田市美術博物館・柳田國男記念民俗学研究所）
2009 年
- ⑭『遠山霜月祭＜上村＞』（上村遠山霜月祭保存会）平成 20 年

【アヲナギ】

アオナギ。

程野の上村川左岸にある。

アオナギは素直に解釈すれば、「青緑色の崩崖」であろう。しかし、アオには、ほかに地名用語語源辞典によれば、①オホ（大）の転訛とみることできるし、②「湿地」を意味することもあり、さらに③アフグ（仰）から「傾斜地」と解することもできるという。このすべてにアオナギは相等すると考えることもできる。③であれば、重複させて強調していることになる。

しかし、ここは三波川帯となっており、緑色岩類が目立つはずだから、アヲナギの由来は「青緑色の崩崖のあるところ」ということになるものと思われる。

アオナギ地名は 2.5 万分の 1 全国地図には、大・中字としては記載されていない。

【アカマ久保】

アカマクボ。

上町の風折沢中流域にある。

アカマクボとは何を意味するのか。アカ（赤）は地層の色をいい、マ（間）は「場所」のことで接尾語的に用いられることが多いという（語源辞典）。クボ（窪）は凹地で風折川が削った谷をいうのであろう。従って、アカマクボとは「赤い色の地層が現れている窪地」を意味するものと思われる。秩父帯の赤色チャートによる命名であろうか。

なお、アカにはアカツ（散）から転じた語で、「崩崖」を意味することもある（語源辞典）。この場合は、アカマクボとは「崩崖のある凹地」をいうことになるが、どうであろうか。第二説として挙げておきたい。

アカマクボ地名は、国土地理院の 2.5 万分の 1 の地図には載っていない。

【新島】

アタラシマ。

中郷の上村川の河川敷と左右両岸にわたる広い小字になっている。

長野縣町村字地名大鑑によってアタラシマとしたが、あるいはニイジマであるかもしれない。

いずれにしても、「新たに出現した島のあるところ」をいうのであろう。それは大水によるものか地震崩れであるのか特定はできないが、突然の災害によって島ができたものと思われる。

【穴嵐】

アナアラシ。

程野の上村川に東側からそそぐ蛇洞沢の最下流部にある。

アナとは穴状の地形をいうのであろうか。「三方を山で囲まれた小さな盆地」と思われる。

アラシは「伐り出した材木をすべり落とす所」か、あるいは「傾斜地を利用した焼畑」か。

以上から、アナアラシとは何か。二説を挙げておきたい。

①「山で囲まれた場所で、伐り出した材木をすべり落として集めるところ」をいうか。

②「山で囲まれた傾斜地で、焼畑が行われていた場所」かもしれない。

アナアラシ地名も全国地図には記載が無い。

【アマガキボラ】

下栗から遠山川に下る急斜面にある。

アマガキボラとは何か。二説を挙げたい。

①アマガキボラといえば、「甘柿が自生していた小さな谷」と考えたい。しかし、小字発生時に甘柿の自生地があったのかどうか、という疑問もある。柿は中国の長江流域を原産地として、奈良時代に渡来したといわれている。日本の甘柿は渋柿の突然変異種で、寒い土地では渋柿に戻ってしまうことがあるといわれている。甘柿は日本特産の品種ということになる。甘柿は南北朝末の庭訓往来にも記載があるというから、もし甘柿が自生しているとすれば、栽培種が逸出したのであろう。ということで、甘柿の自生地説は成立がむずかしいかもしれない。

②アマは「高所」をいい、カキは動詞カク（搔）の連用形が名詞化した語で「崩崖」の意（語源辞典）。であれば、アマガキボラとは「高い所に崩崖のある土地」ということになる。遠山川近くのカキノシマ小字のあたりからの表現になる。

アマガキボラ地名も国土地理院の全国地図には無い。

【青美方浦】

アオミカタウラか。アオミカタと土地臺帳にはあるが、どうであろうか。

ここではアオミカアウラとしておきたい。

アオミカタウラとは何か。語源辞典によって二説を挙げる。

①アオ（青）は「青緑色」をいい、ミカタはミ（水）・カタ（方）で「水辺」を意味し、ウラはうら（末）で「川の上流」のこと。以上から、アオミカタウラとは「川の上流付近の青緑色の山地」をいうか。

②アオは動詞アフグ（仰）の転で、「傾斜地、崩崖」を意味する。すなわち、アオミカタウラとは「川の源流部で崩崖のある傾斜地」をいうのかもしれない。

アオミカタ地名も2.5万分の1地図には記載が無い。

【伊塚】

イイツカ。

上町の上村川の沿岸にあり左岸の山地も含む。木澤塚に近い。

ツカには自然に土が盛り上がって高くなった所も、また人の手で高く盛り上げられた所の意もある（国語大辞典）。従ってイイツカとは何か、二説を挙げておきたい。

①「川の自然堤防のあるところ」をいうのであろうか。もちろん上村川が形成

したものである。

②「人工的に土が盛り上げられたところ」があったかもしれない。墓地などであるが、はっきりしない。

全国地図には、イイツカ地名は34ヶ所も、中・大字として挙げられているが、「伊塚」の字が宛てられているところはない。

【家浦】

イエウラ。

程野に二ヶ所ある。一つは正八幡宮のある「八幡坂」小字の南側の谷にあり、もう一つは上村川の氾濫原にある。

イエウラとは何か。これも語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①イエウラを字面の通りとすれば、「屋敷の裏手の日陰地」ということになる。屋敷は有力者の住居であろう。八幡坂にあるイエウラがこれに当たるか。この小字の南側には「大黒川」小字があり、そこにその屋敷があったのではないだろうか。

②イエは井(井)・エ(江)で「流水」をいい、ウラ(浦)には「水際」の意がある。従って、イエウラとは「流水のほとり」を意味することも考えられる。上村川の氾濫原にあるイエウラ小字がこれに該当するのではないだろうか。地名の場合、イはほとんど「流水。川」と同様に使われているという。

全国地図には、イエウラ地名は載っていない。

【家ノカゲ】

イエノカゲ。

程野の上村川左岸で程野市営住宅の北側傾斜地にある。

カゲは日陰地の意味が強いが、この傾斜地は南東～南～南西向きの斜面で日当たりはいい。

イエノカゲとは何か。二説を挙げる。

①イエ(家)は「集落」をいい(語源辞典)、カゲ(陰)は「後方」のこと(国語大辞典)。以上から、イエノカゲとは「集落の後方の土地」をいう。

②イエは井(井)・エ(江)で「川」のこと、カゲはカケ(欠)の濁音化した語で「崖」をいう(語源辞典)。従って、イエノカゲとは「川岸の崖地」を意味することも考えられる。

国土地理院の2.5万分の1地図には、イエノカゲ地名は記載されていない。

【家ノ下・家の下】

イエノシタ。

中郷と程野に三ヶ所ある。

イエ(家)は前に触れたように「集落」の意であろう(語源辞典)。

従って、イエノシタとは「集落の下側の土地」を意味するか。

全国地図には、イエノシタ地名が4ヶ所に中・大字として挙げられている。

【家ノ軒】

イエノノキ。

程野の上村自治振興センター西側の山地に五ヶ所ほど散在している。かつては、これらが全て一つに繋がっていた可能性がある。

イエ（家）は繰り返しになるが「集落」の意で、ノキ（軒）は長野県伊那郡や水窪の方言で「家の裏手の土地」をいう（国語大辞典）。

従って、イエノノキとは「集落の裏手にある土地」を意味する。

全国地図には、イエノノキ地名は一件も記載が無い。

【池城】

イケシロ。

程野の東部山地に二ヶ所ほどある。

イケシロとは何を意味するのか。イケは「くぼんだ土地に水がたまったもので、いつも水をたてているところ」（時代別国語大辞典室町時代編）としか考えようがない。シロの解釈に従って、語源辞典によって三説を挙げる。

①シロには「茸の毎年よく生える場所」をいう。全国各地にある方言らしい。すなわち、イケシロとは「自然の池があり茸が毎年取れるところ」であろうか。

②シロは「赤石山地で緩やかな傾斜地」をいう。イケシロとは「自然の池がある傾斜地」ということになるか。ただ、ここが、必ずしも“緩やかな傾斜地”となっていないことが気になる。

③シロには「雁鳧の群居の所」の意もある。とすれば、イケシロとは「鴨類のいる自然の池」ということになるが、村史にはカモ類についての記載はない。

全国地図には、イケシロ地名は二ヶ所に記載されており、いずれも「池代」の字が宛てられている。

【池坪】

イケツボ。

程野に二ヶ所、やや傾斜の緩い山地にある。

イケにも「茸の決まって採れる所」の意があるが（語源辞典）、熊本地方の方言だというので採り上げにくい。

ツボは「深くくぼんだところ」（国語大辞典）を意味するのであろう。従って、イケツボとは「自然に水のたまった池のある窪地」としたい。

イケツボ地名は全国地図には記載されていない。

【一枚畑】

イチマイバタ。

下栗の津島牛頭天王社境内を含めたその南側の遠山川に下る傾斜地にある。

イチマイバタとは「一枚の畑であったところ」をいうものと思われる。一部に緩い傾斜地のところもあるが、ほとんどが急傾斜地である。こうしたところで焼畑が行われていたのであろう。

なお、イチマイバタは「市舞畑」であった可能性も全くないとはいえないような気がするので、挙げておきたい。すなわち、イチマイバタは「収穫物を神楽である市舞（巫女舞）の神事を行う費用に充てた畑のあったところ」かもしれない。飛躍しすぎだろうか。

全国地図には、イチマイバタ地名は見つからない。

【イッパイ水】

イッパイミズ。

下栗の中根の木澤堺にある大きな小字で、下栗簡易水道の中根配水池がある。

イッパイシミズ小字は竜丘にもある。長野県方言辞典には下伊那の方言として挙げられており、「山路の側などに湧き出ている小さな泉」とある。

ではイッパイミズとは何か。二説を挙げる。

①イッパイシミズと同じで、イッパイミズとは「道路脇に湧き出ている泉のあるところ」であろうか。

②イッパイには「たくさん」の意味があるから、イッパイミズとは「いたるところに泉が湧き出ている土地」かもしれない。山作業や焼畑耕作で、飲み水を用意しなくてもいい土地であったのだろうか。

イッパイミズ地名は、2.5万分の1地図には中・大字として1ヶ所にだけ挙げられており、「一杯水」の字が宛てられている。

【伊藤】

イトウ。

上村川右岸の山地にある広大な小字である。より広い「程野山」小字と上村川の間になる。

イトウとは何か。分かりにくい地名の一つ。

イトウとはイトの長音化した後で、キ（井）・ト（処）から転じた語としか考えられない。

すなわち、イトウとは「自然の湧水の多いところ」であろうか。飲料水であり、炊事・洗濯に利用できる流水があちこちに流れていたのもであろう。

全国地図には、イトウ地名が8ヶ所に中・大字として挙げられており、うち3ヶ所に「伊藤」の字が宛てられている。

【井戸久保】

イドクボ。

上町西部の一般県道上飯田線沿いにある。

イドクボとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①イドクボはキ（井）・ド（処）・クボ（凹）か。すなわち、イドクボとは「自然湧水のある窪地のあるところ」をいう。

②イドクボ←イトクボと濁音化した後で、イト（糸）・クボ（凹）は「糸のように細長い谷」を意味するか。

全国地図には、イドクボ地名が1ヶ所に中・大字として挙げられているが、イトクボ地名は記載がない。

【井戸端】

イドバタ。

下栗にあり、オオノ小字に接している。

イドバタとは、字面の通りのキ（井）・ド（処）・バタ（端）で「自然の湧水

のあるあたり」を意味するのであろう。

イドバタ地名は、全国地図でも1ヶ所だけであるが、中・大字として挙げられている。

【伊豆三】

イズミ。長野縣町村字地名大鑑ではイトミとなっているが、イズミではないだろうか。イズミは日葡辞書にもあるので、ここでも使われていても不思議ではない。

下栗にあり、二ヶ所の「水見沢」小字に挟まれている。

イズミとは文字通り「自然の湧水があるところ」をいうのであろう。ここから流れでた水は水見沢に注いでいるのであろう。

国土地理院の全国地図には、イトミ地名は載っていないが、イズミ地名は2ヶ所に中・大字として記載があり、いずれも「伊豆味」の字が宛てられている。

【稲沢】

イナザワ。

程野の上村川右岸にあり、西部の山地から流れでる支流が上村川に合流しているところにある。

イナは「砂。砂地」をいう（語源辞典）。古語ヨナの転じたものか、スナ→ウナ→イナと変化した語であるという。

従って、イナザワとは、「砂地になっていて谷川が流れているところ」か。本流へ合流する地点の谷川はほとんどが砂地となっていることを思えば、当然にすぎるような気もする。

イナザワ地名は、全国地図でも11ヶ所に中・大字として挙げられている。

【猪岩】

シシイワか。長野縣町村字地名大鑑ではイノシシイワとなっているが、地名としては長すぎる。地元ではなんと呼んでいるか。

上町と中郷に三ヶ所ほどある。

シシイワとは何か。民俗地名語彙事典には「獅子、鹿、猪のつく獅子ヶ岩、獅子ヶ倉山、獅子ヶ鼻などのシシは断崖を表す」とあり、語源辞典は「断崖と関連する語。奇岩怪石の突兀する地形に”獅子”と名づけたもの」という。

以上から、シシイワとは、「シシに似た奇岩もあって断崖のあるところ」をいうのであろう。

全国地図には、シシイワ地名は5ヶ所にあり、うち4ヶ所で「獅子岩」となっている。なお、イノシシイワ地名もイノイワ地名も無い。

【猪沢】

シシザワ。これも長野縣町村字地名大鑑ではイノシシザワになっている。

下栗にある。

シシイワの解釈に従えば、シシザワとは「奇岩断崖のある谷川が流れているところ」を意味する。

全国地図には、イノシシザワ地名はもちろんのこと、シシザワ地名も記載さ

れていない。

【今島・今ヶ島】

イマシマ・イマガシマ。

上町にあり、一つながりになっている小字である。

民俗地名語彙事典には「下伊那の遠山川流域地方では、田地の連なった所をシマといい…」とあるが、この大きな小字内に、現在田んぼはない。

イマ（ガ）シマとは何を意味するのであろうか。イマシマといえば「新しく生まれた島」を意味するものと思われるが、その成因は上村川の大水で水が引いた後に顕れた島をいうのか、それとも大雨による土石流か地震による崖崩れのなかで島のように残った高みをいうのか、そのどちらかであろう。この小字の繋がる土地は、上村川とも一部は接しているが、大部分は山地であることから、後者を採りたい。

すなわち、イマ（ガ）シマとは「土石流か地震崩れで、硬い部分が取り残されて島のような丘のあるところ」と解したいがどうであらうか。

全国地図には、イマシマ地名もイマガシマ地名もイマノシマ地名も見あたらない。

【岩小野】

イワオノ。

程野の東部山地にある。側稜の尾根筋から上村川支流の小野沢左岸に至る北向きの傾斜地にある。

オノのオ（峯）は「山のみねつづきの所」で、ノ（野）は「山すその傾斜地」というのであろう（広辞苑）。

従って、イワオノとは「ごつごつした岩が顕れている尾根とその斜面」を意味するものと思われる。

また、その場所には神が祀ってあったかもしれないし、占有が許されない草場であった可能性がある（民俗地名語彙事典）。

全国地図には、イワオノ地名が2ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「岩尾野」の字が宛てられている。

【上ノ平】

ウエノダイラ。長野縣町村字地名大鑑にはカミノタイラとなっているが、地元ではどうか。

下栗の高原ロッジ下栗のある所。

ウエノダイラとは、文字通り「高い場所にある山間の平地」であろう。尾根の比較的広い緩傾斜地にある。

ウエノダイラ地名は、全国地図に5ヶ所、中・大字として挙げられている。

【ウケジリ】

ウケジリかもしれない。

下栗の遠山川に下る急傾斜地にあり、ボッタ沢が流れている。

ウゲは下二段活用する動詞ウグ（穿）の連用形が名詞化した語で「削られたり掘られたりなどして、物の表面がくぼんだり穴があいたりする」ことをいう（時代別国語大辞典室町時代編）。日葡辞書にも「岸が穿げた」の例が挙げられている。「高い土地や崖などが崩れた、または落ちた」の意。

従って、ウゲジリとは「崖が崩れ落ちたところの末端部」を意味しているのであろう。ポッタ沢の浸食による崩落があったと思われる。

2.5万分の1全国地図には、ウゲジリ地名もウケジリ地名もウゲシリ地名も記載は無い。

【内ノ瀬】

ウチノセ。

下栗の遠山川とその沿岸にかかっている。

ウチは「ある場所より上流、山奥などをいう」（民俗地名語彙事典）。セ（瀬）は「川などの浅くて徒歩で渡れるところ。あさせ」（広辞苑）のこと。

以上から、ウチノセとは「遠山川の上流部にある浅くて徒歩でも渡れる場所があるところ」をいうのであろう。

国土地理院の全国地図には、ウチノセ地名は載っていない。

【ウトウトヲ】

ウトウトウ。

程野の漆平沢が上村川に合流する付近に二ヶ所ある。

ウトウトヲとは何か、語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ウトウ＝ウトで「川岸のえぐれてくぼんでいる所」をいい、トヲは川音による音響地名でドウドウから転じた語。以上から、ウトウトヲとは「川音が響くえぐられた川岸になっているところ」を意味するか。

②ウトウ＝ウトには「崖」の意もある。トヲは「川の合流点」か。従って、ウトウトヲとは「崖になっている川の合流点のあるところ」をいうのかもしれない。

全国地図には、ウトウトウ地名は無い。

【漆取場】

ウルシトリバ。

下栗の遠山川へ注ぐハライ沢の左岸にある。

ウルシトリバとは「漆掻きをする漆の木がある所」をいうのであろう。

ウルシは中国から渡来したものといわれていたが、漆器が縄文遺跡から発見されており、2011年になって12,600年前の漆器が福井県の鳥浜遺跡出土の木片で確認されている。ということは、日本国内でウルシが自生した可能性もあるという（Wikipedia）。

下栗のウルシトリバ小字は遠山川へ下る急傾斜地にあり、栽培種が植えられたということが考えにくいので、もともと、ここに漆の木が自生していたのではないかと思われる。

なお、全国地図には、ウルシトリバ地名は記載が無い。

【エボシ岩】

エボシイワ。

下栗の遠山川に近い傾斜地にある。

エボシイワとは「烏帽子に似た岩が見えているところ」であろう。岩の形を烏帽子に見立てたもの。

国土地理院の2.5万分の1地図には、エボシイワ地名が31ヶ所も中・大字として挙げられており、うち30ヶ所は「烏帽子岩」になっており、1ヶ所にだけ「エボシ岩」がある。

【王崎】

オウザキ。

程野の東部、オオダイラ小字の中に三ヶ所ある、小さな小字である。

オウザキとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①オウはオ（峯）の長音化した語で「尾根」をいい、ザキはサキ（先）で「先端」のこと。以上から、オウザキとは「尾根の先端部にある土地」をいうのであろうか。

②オウ←オク（奥）と転じた語で「沢の上流」をいう。すなわち、オウザキとは「沢の上流部にある尾根の先端部」を意味するのかもしれない。

オウザキ地名もオウサキ地名も全国地図には載っていない。

【大嵐】

オオアラシ。

程野北部の上村川右岸にあり、矢筈トンネルの上村川出入口がここにある。

オオアラシとは何か。アラシはアラシ（荒シ）で「山の急斜面で、材木などを投げ下ろす場所」（広辞苑）をいう。オオには「主要な」の意味とオオ←アフと転じた語で「崖」の意がある（語源辞典）。従って、次の二説が考えられる。

①オオアラシとは、「（程野の）主要な伐採した材木を下ろす場所があるところ」か。

②あるいはオオアラシとは「伐木を下ろす崖のあるところ」かもしれない。

全国地図には、オオアラシ地名は、3ヶ所が中・大字として挙げられており、いずれも「大嵐」の字が宛てられている。

【ヲカメ畑】

オカメバタ。長野縣町村字地名大鑑はオオカメバタとしている。

下栗の赤崩沢の上流にある。栃の巨木のあるすぐ北側になる。

オカメバタは何を意味しているのか、分かりにくい小字である。

オカメ←オカミと転じたのであろうか。イ段→エ段の母韻交替はきわめて多く、とくに中世には目立つという（国語学大辞典）。オカミはオカミ（霧）で「山中や水中にすんでいて、水、雨、雪などをつかさどると信じられている神」（国語大辞典）である。オカミは蛇の類か、サンショウウオやイモリの形になってあらわれていたらしい（風土記の注記）。下栗の赤崩沢上流だから、上記の動物のどれがいても不思議ではない。

以上から、オカミバタとは「オカミが住んでいた焼畑」か「オカミの住んでいたあたりの土地」のどちらかであろうか。ハタをハタ（畑）とすれば前者で、ハタ（端）とすれば後者になる。

なお、ヲカミ小字は竜丘にもある。

ヲカミバタを下栗の十五社大明神にかかわる地名ではないかとさぐってみたこともあった。赤崩大明神と関連させて、その面の制作か霜月祭の費用に充てられた畑ではないかというのである。しかし、それらしい裏付けを得ることはできなかった。

全国地図には、オカミバタ地名もオカミハタ地名も記載されていない。

【扇平】

オウギダイラか。長野縣町村字地名大鑑ではオオギヒラとなっているが、その地形からオウギダイラではないかと思われるがどうであろうか。

上町の上村川が曲流する左岸の氾濫原にある。

タイラは「高低・凹凸のないさま。傾斜や起伏のないさま」をいう（国語大辞典）。オウギ（扇）は地形を扇の形に見立てたもの。

従って、オウギダイラとは「扇の形をした平地」を意味する。

全国地図には、オウギダイラ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられている。

【大くち】

オオクチ。

中郷東部の山地に二ヶ所ある。

オオクチとは何をいうのであろうか。クチ（口）は「物や人の出入りする所」で、おそらくは「山への入口」をいうのであろう。そうなると、オオ（大）は「主要な」の意か。

以上から、オオクチとは「山へ入る入口」を意味するものと思われる。すなわち、オオクチとは山口的ことで、新年にはじめて山へ入るときに行われたという神事の場合であった可能性がある。

全国地図には、ヤマクチ地名が15ヶ所と予想以上の数の中・大字として挙げられており、いずれも「大口」の字が宛てられている。

【大ウナ】

オオウナ。長野縣町村字地名大鑑はオオグナになっている。

中郷の東部山地に二ヶ所あり、いずれもオオクチ小字の近くにある。オオクチ小字とオオウナ小字の関連についてはよくわからない。

オオウナとは何か。三説を挙げておきたい。

①ウナには「尾根筋の高み」の意がある（語源辞典）。すなわち、オオウナとは「主要な尾根筋の高みがあるところ」であろうか。“主要な”としたのは、山口祭が執り行われた場所をいうのであろうか。はっきりはしない。

②伊那谷南部でウナは「牡鹿」をいう。分類山村語彙や長野県方言辞典では「牡鹿」になっているが、国語大辞典は「牝鹿」になっている。恐らくは後者が写し間違いをしていると思われる。原本の下伊那方言集はどうなっているのか未

確認。ここでは「牡鹿」としておきたい。すなわち、オオウナとは「大きな牡鹿がいたところ」をいうのかもしれない。

③クナは焼畑三年目をいう（焼畑民俗文化論）。従って、オオグナとは「主要な焼畑耕作地」を意味することになる。

全国地図には、オオウナ地名は記載がない。

【大久保】

オオクボ。

中郷の東部に広大なオオクボ小字があり、西部には小さなものがある。どこにでもある地名で、2.5万分の1の全国地図には、中・大字として337ヶ所に挙げられている。

①オオクボとは「大きな窪地のある土地」を意味するが、

②オオを単に語調を整える接頭語であれば「窪地のあるところ」となるし、あるいは

③オオ←アフ（アブ）と転じたものとみて、「崩崖のある窪地」であったかもしれない。

【大久保尻】

オオクボジリ。

中郷の上村川の川辺にある。そこは大きな面積を有するオオクボ小字の麓になっている。

オオクボジリとは「オオクボ小字の末端の土地」をいうのであろう。

全国地図には多くのオオクボ地名はあるが、オオクボジリ地名となると全く記載が無い。

【大黒川】

オオクロカワ。

程野と中郷の上村川左岸に二ヶ所ある。

オオクロカワとは何か。これも難解な地名です。語源辞典によって三説を挙げる。

①オオ←アヲ（青）と転訛した語で、オオクロカワとは「青黒く見える川のあるところ」か。樹木が茂っていて深い谷になっていて、樹木の緑と日蔭で青黒くみえるのではないかと想像したがどうであろうか。

②オオ←アフ（アブ）と転じた語で「崖」をいう。クロは「傍ら。そば」の意。以上から、オオクロカワとは「崖の傍で川が流れている所」となる。

③オオは接頭語で美称。クロはクラ（暗）に通じ「日蔭地」をさす。以上から、オオクロカワとは「日蔭地を流れる川のある土地」となるが、地名にはなりにくい。

全国地図には、オオクロカワ地名はない。

【大黒坂】

オオクロザカ。

中郷の上村川右岸の急傾斜地にある。

オオクロザカとは何か。二説を挙げる。

①オオは美称の接頭語、クロはクリ（溼）に通じ「湿地」をいい、サカは「傾斜」のこと（以上は語源辞典）。従って、オオクロザカとは「湿気っぽい傾斜地」を意味するか。近くを谷川が流れており、自然の湧水もあったことが考えられるがどうであろうか。

②クロはクル（剝）から「崩崖」をいうか。とすれば、オオクロザカとは「大きな崩崖のある斜面」となるが、成立の可能性は薄い。

全国地図には、オオクロザカ地名もオオクロサカ地名も載っていない。

【大古屋】

オオゴヤ。

程野に大小三ヶ所のオオゴヤ小字がある。いずれも東部山地の傾斜地にある。

オオゴヤとは何か。二説を挙げる。

①オオは接頭語で美称、ゴヤはコヤ（小屋）の濁音化した語で、オオゴヤとは「野小屋のあったところ」をいうのであろうか。焼畑や狩猟などに使われた小屋と思われる（焼畑民俗文化論）。

②コヤ←コイ←クエ（崩）と転じた語で、「崖地」をいう（語源辞典）。すなわち、オオゴヤとは「大きな崖地のあったところ」を意味するのであろうか。

全国地図には、オオゴヤ地名は10ヶ所、オオコヤ地名は3ヶ所に中・大字として挙げられている。

【大古屋尻】

オオコヤジリ。

大渡沢の中流部にあり、比較的小さな小字である。

オオコヤジリとは何か。オオは美称の接頭語、コヤは「仮小屋」、ジリは「麓」の意か。

以上から、オオコヤジリとは「仮小屋のあるところから下った土地」であろうか。仮小屋で使う水を汲み上げていたのかもしれない。

全国地図には、オオコヤジリ地名は記載が無い。

【大坂】

オオサカ。

上町東部の山地で、女沢に沿う小さな小字である。

オオサカとは何か。国語大辞典には「大きな坂」となっているが、ここでは当てはまらない。そこで、語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①オオはオ（小）かもしれないが、いずれにしても語調を整える接頭語であろう。とすれば、オオサカとは「傾斜している土地」となるが、曖昧にすぎるか。

②オオ←アヲ（湿地）と転じたもの（語源辞典）。すなわち、オオサカとは「湿地になっている傾斜地」をいうか。この場合も仮小屋で使う水を汲み上げたところであろうか。

全国地図には、オオサカ地名は30ヶ所が中・大字として挙げられており、うち21ヶ所が「大坂」となっている。

【押沢】

オシザワ。

程野の上村川右岸の急傾斜地にある。

オシザワは何を意味しているのか。二説を挙げる。

①オシは動詞オス（押）の連用形が名詞化した語で、「押し出された地形」（語源辞典）をいう。すなわち、オシザワとは「谷川が押し出した土石が堆積した場所」をいうか。大雨か地震により崩落したものであろうか。

②オシには「鳥獣を捕る仕掛け。わな」（方言大辞典）の意がある。遠州北部・北設楽郡・長野県の方言であるという。これも動詞オス（押）の連用形であろう。オシザワとは「鳥獣を捕らえる罟が目立った場所」をいう可能性もある。

全国地図には、オアイザワ地名が2ヶ所に中・大字として挙げられており、「押沢」「雄子沢」となっている。

【大ズイ】

オオズイ。

中郷東部の山地にあり、上村川支流である神燈沢に沿った長い小字になっている。

オオズイとは何か。これが意外に難しい。二説を挙げておく。

①ズイ（髓）は草の茎などのしんとなっている空洞の部分という（国語大辞典）。従って、オオズイとは「大きな草の髓のように空洞のようになっている谷」をいうのであろうか。神燈沢が削った深い谷とその上を覆う樹木が作り上げたまっすぐな地形を大きな髓にみたてたものであろうか。

②ズイには山口県の方言で「いつも乾かない所」という意味がある（民俗地名語彙事典）。この方言が上村にも繋がっていたとすれば、オオズイとは「いつも乾かない湿地帯」にもなるが、成立の可能性は少ないか。

全国地図にはオオズイ地名は載っていない。

【大杉】

オオスギ。

程野左岸の急傾斜地にある。

オオスギとは何か。二説を挙げる。

①オオスギとは字面の通りで「大きな杉の木があったところ」か。目印になるような大きな杉だったのであろう。

②オオは語調を整える接頭語か。スギはスキが濁音化した語で、動詞スク（剥）の連用形が名詞化した語で「物を、そぐように薄く切る」の意（時代別国語大辞典室町時代編）。以上から、オオスギとは「削ぐように滑り落ちた崩落崖のあるところ」をいうか。上村川に崖が迫っている場所である。

国土地理院の全国地図には、オオスギ地名は23ヶ所に中・大字として挙げられており、うち22ヶ所で「大杉」の字が宛てられている。

【大平】

オオダイラ。上町の「大平」はオオヒラではなかったか、と思われる。

程野と上町にある。程野の山地にあるオオダイラ小字には緩傾斜地もあるが、上町のオオダイラは急傾斜地になっている。

オオダイラとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①タイラは山間部の平台地をいい、ときにダイラともいう。平地といっても周囲と比較してのことであるから、かなりの傾斜地も含まれるし、大小・高低は問わない、山上にわずかの平地があってもタイラはタイラであるという（民俗地名語彙事典）。オオは語調を整えるか、美称の接頭語であろう。以上から、オオダイラとは「山間に平地があるところ」を意味するのであろう。程野のオオダイラはこれに該当する。

②ヒラは「信州では傾斜面のこと」（民俗地名語彙事典）である。すなわち、オオビラとは「傾斜面になっているところ」をいう。上町の上村川左岸の崖地に当てはまる。

オオダイラ地名は103ヶ所、オオヒラ地名は137ヶ所が2.5万分の1地図に中・大字として挙げられている。

【大ダテ】

オオダテ。

程野の上村川右岸の急傾斜地にある。

ダテはタテが濁音化した語で、「急傾斜地」をいい、佐久や静岡県磐田郡の方言であるという（国語大辞典）。

従って、オオダテとは「峻しい崖地のあるところ」を意味するのであろう。

オオ（大）は程度の激しさを表しているものと思われる。

全国地図には、オオダテ地名は9ヶ所に挙げられており、うち6ヶ所が「大館」となっている。

【大中】

オオナカ。

下栗の遠山川の沿岸にあると思われる。この付近の小字図の位置には不確かなどころがある。

オオナカとは何か。これも難しい地名か。二説を挙げておく。

①オオ←ヲ（尾）と転じた語で（語源辞典）、オ（尾）は「山の裾の延びた所」をいう（広辞苑）。以上から、オオナカとは「尾根の裾部にある土地」をいうのであろうか。

②オオナカには「共有の草刈場」かもしれない（改訂総合日本民俗語彙）。群馬県の万場町にあった語だというので、下栗にあてはめるのは難しいか。

全国地図には、オオナカ地名が8ヶ所で中・大字として挙げられており、うち7ヶ所は「大中」となっている。

【大西】

オオニシ。

上町の上村川右岸にあり、支流の西の沢がその中を流れている。

オオニシとは何をいうのか。二説を挙げる。

①オオは語調を整える接頭語で、ニシ（西）は「中心地の西の方」をいうか。すなわち、オオニシとは「(上町の) 中心地から西の方にある土地」であろうか。
②オオはアヲの転じた語で「湿地」をいい、ニシは動詞ニジル（躪）の語幹の清音化で「浸食地形」をいうか（以上は語源辞典）。従って、オオニシとは「湿地にもなっている谷川の浸食を受けたところ」をいうのかもしれない。

全国地図には、オオニシ地名は57ヶ所も中・大字として挙げられており、うち56ヶ所に「大西」の字が宛てられている。

【大野】

オオノ。

下栗に小さなものも含めて七ヶ所ほどある。それらはいずれも山地の斜面にある。

オオノもはっきりしない地名であるが、原義は「未開のままの荒々しく草深い野」であり、「丘陵の続く淋しい人の入らない原野であるが、一方、春に焼畑をする葛の生い茂る自然のままの原野」（以上は民俗地名語彙事典）としておきたい。

大野部落については、山梨県から赤石山脈を越えてきた平家の落人であったという各地にある落人伝説と、静岡県の子狩人が赤石山脈に入り山伝いにここまで来て住み着いたという話もある（遠山谷の民俗）。いずれも赤石を越えてきたことには変わりはない。下栗よりも日照時間が長いし日当たりもいい上に積雪もないので作物がよくとれるという。この大野部落から西の下栗に移って住むようになったので、下栗部落ができたのだという。

国土地理院の全国地図には、オオノ地名が198ヶ所にも中・大字として挙げられており、うち109ヶ所は「大野」の字を宛てている。

【大野峯】

オオノミネ。

下栗に一ヶ所だけある。

ミネ（峯）には「物の高くなっている部分」（国語大辞典）の意があるので、オオノミネとは「原野であつたり焼畑になることもあるオオノで、高い所にある土地」をいうのであろうか。

全国地図には、オオノミネ地名は載っていない。

【大ハツ】

オオハツ。

下栗の山地にある。

オオハツとは何を意味するのであろうか。

オオは上村の小字名には多い接頭語で、語調を整えるか美称のオオであろう。ハツは動詞ハツル（剝）の語幹で「織目などが端からばらばらにとけてくる。ほつれる」の意（時代別国語大辞典室町時代編）。

以上から、オオハツとは「ばらばらに崩れた崖があつたところ」をいうのであろうか。

全国地図には、オオハツ地名は記載が無い。

【大葉淵】

オオハブチ。

程野の上村川左岸に、大小二つのオオハブチ小字があるが、近いところにあるので、かつては繋がっていたのであろう。

オオは接頭語、ハブチは飯田付近の方言で、「傾斜地の上縁」であるという（国語大辞典）が、千代の方言では「傾斜畑の下端部分」（長野県方言辞典）とある。いずれにしても、傾斜地の縁のあたりを指しているのであろう。

以上から、オオハブチとは「傾斜地の上縁か麓の土地」としておきたい。程野のオオハブチは、上村川の氾濫原と山地の境界付近のことをいうのであろうか。

全国地図には、オオハブチ地名は記載がないが、ハブチ地名は3ヶ所に中・大字として挙げられており、うち2ヶ所が「羽淵」、1ヶ所が「飯淵」となっている。

【大日影・大日カゲ】

オオヒカゲ。

上町と中郷にあり、いずれも北向きの傾斜地がある。

オオヒカゲとは字面の通りで「日蔭地になっているところ」を意味するものと思われる。

ヒカゲ地名には「日影」で「日当たりのいい場所」をいう場合もあるので、注意を要する。

オオヒカゲ地名は、全国地図に3ヶ所が中・大字として挙げられており、ヒカゲ地名は78ヶ所にもなる。この中には「日影」が57ヶ所もあるが、その全てが「日当たりのいい場所」を意味するわけではないので、現地で確認しないと判断は難しい。

【大ボツ】

オオボツ。

下栗の山地にある。

オオボツとは何か。オオは接頭語、ボツは「小さな峠」をいう（長野県方言辞典）。

従って、オオボツとは、「側稜などにある山地の尾根の窪みのあるところ」をいうのであろうか。

全国地図には、オオボツ地名は一ヶ所、中・大字として挙げられているが、なぜか国土地理院の数値地図（地名）には読みはオオボツであるが、文字は「大ツボ」とある。

【大渡り】

オオワタリ。

中郷の天神峡公園にあり、上村川と大渡沢に接している。

オオは「主要な」の意か。ワタリは動詞ワタル（渡）の連用形が名詞化した

もので「徒渉点」をいう（語源辞典）。

以上から、オオワタリとは字面の通りで「（上村川の）主要な徒渉点」を意味する。

全国地図にはオオワタリ地名は中・大字として21ヶ所に記載があり、いずれも「大渡」の字が宛てられている。なお、ワタリ地名も全国地図には載っているが、20ヶ所と意外に少ない。

【荻ノ平】

オギノタイラ、あるいはオギノヒラ。

中郷の東部山中にあり、傾斜がやや緩んだ斜面にある小さな小字である。

オギノタイラは何をいうのであろうか。

植物のオギはカヤの仲間とみれば、この地で使われた可能性はあるが、本来は湿地の植物だから、オギそのものがここに自生していたとは考えにくい。このオギはヲ（峯）・ギ（接尾語）で「高所」をいうのであろう（語源辞典）。タイラは平地のこと。急な傾斜地を登ってきて、ここで傾斜が緩むのでタイラとしたのかもしれない。以上から、オギノタイラとは「高い所にある緩傾斜地」をいのであろうか。

オギノヒラだとすれば、「高い所にある山地の小平地」であろう。

全国地図には、オギノタイラ地名は1ヶ所に中・大字として挙げられており、「荻之平」となっている。

【老ノ林】

オイノハヤシ。長野縣町村字地名大鑑ではオキノハヤシとなっている。上村川に沿った大きな小字である。

オイノハヤシとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①オイ←オシ（押）と転じた語で、オイは「押し出された地形」をいう。すなわち、オイノハヤシとは「押し出された土石のある樹木の茂った土地」をいうか。

②オイはオホ（大）・キ（井）で「大きな流水」をいうか。従って、オイノハヤシとは「大きな川のある樹木の茂った土地」をいうのかもしれない。

なお、ハヤシには「傾斜地」の意もあるが、京都の方言であるというので、少し遠く思えて採り上げることを躊躇した。

全国地図には、オイノハヤシ地名は記載が無い。

【ヲクノ島】

オクノシマ。

中郷の上村川右岸にある。

オクノシマとは何か。これがよくわからない。前にも触れたが、民俗地名語彙事典には「長野県下伊那の遠山川流域地方では、田地の連なった所をシマといい」とあるが、崖が上村川に迫っており、田んぼが連なっている状態を想像することもできない。同書は続いて「他の多くの地方では川の岸に臨み、…かつ田畑を合わせてそう呼んでいる」とあるが、むしろこの方が中郷の現地では成

立しそうだ。それも畑は常畑ではなくて、焼畑である。これにしてもすんなりと納得することはできない。

では、改めてオクノシマとは何か。二説を挙げておきたい。

①オクノシマとは、字面の通りで、「(上村川の) 上流に島があるところ」をいうのか。下流側にある「新島」にたいする小字であるかもしれない。今でも、ここには川の中に比較的にな大きな島がある。

②オクには沼津の方言だというのが、「湿地」の意味がある(民俗地名語彙事典)。ノシマはノセ(野瀬)・マ(「場所」接尾語)で、「傾斜地」の意で下伊那の方言だという(語源辞典)。以上から、やや回りくどいが、オクノシマとは「湿地にある傾斜地」を意味するのかもしれない。

全国地図には、オクノシマ地名は載っていない。

【奥ノ空】

オクノソラ。

程野の西部山地にある。

オクノソラとは何をいうのであろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①オクは「深く入り込んだ所」で、ソラは動詞ソラス(反)の語幹で「荒れ畑」のこと。以上から、オクノソラとは「山に入り込んだところにある放置された焼畑」をいうのであろうか。

②ソラはソリ(急傾斜地)が転訛した語でもあるという。すなわちオクノソラとは「奥地にある急傾斜地になっているところ」をいうのであろうか。ただ、イ段→ア段の母音変化は一般的ではないようだ。

全国地図にもオクノソラ地名は記載されていない。

【桶ノ上】

オケノウエ。

程野の柳沢左岸にあり、側稜の尾根の末端部になる。

オケノウエとは何か。二説を挙げる。

①オケは側稜の尾根の末端部にある峯をオケ(桶)に見立てた語であらうか。すなわち、オケノウエとは「尾根末端部の峯より上の方の山地」を意味するか。

②オケは動詞オゲルの語幹オゲの清音化した語で「崖なその崩壊地形」をいうらしい(語源辞典)。であれば、オケノウエとは「崩崖の上の方にある土地」ということになる。しかしオゲルが使われたのは主に四国地方であることが気になる(国語大辞典)。

オケノウエ地名は全国地図には無い。

【押田】

オスノタ。

上町の西部山地にあり、近くを一般県道上飯田線が通っている。

オスノタはオス・ノタであらう。オスは「鳥や小動物を捕獲する箱(仕掛け)」で遠山地方の方言であるという(長野県方言辞典)。ノタ(野田)は「山間の湿地」のことで下伊那の方言(語源辞典)である。

以上から、オスノタとは「鳥や小動物を捕獲する仕掛けのある山間の湿地があるところ」を意味していると思われる。

全国地図には、オスノタ地名は記載されていない。

【落井】

オチイ。

下栗の遠山川に下る急傾斜地にある。

オチイとは何か。二説を挙げておく。

①オチ（落）は「勢いよく下へ動くこと」（国語大辞典）で、オチイは字面の通りで、「勢いよく流れ下る川のあるところ」をいうか。

②オチには「傾斜地。崖」の意もある（語源辞典）。とすれば、オチイは「傾斜地に流水のある土地」を意味するか。

結局、①と②は同じことを意味していることになる。

オチイ地名は、全国地図には4ヶ所に中・大字として挙げられているが、宛てられている文字は「落居」が3ヶ所、「おちい」が1ヶ所となっている。

【小野】

コノ。

下栗のほぼ道路に沿った小さな小字で、コノウ（小ノフ）小字に囲まれている。

コノはコ（接頭語）・ノ（野）で「広くはない小さな野原」であろうか。近くにあるオオノとは広さの違いをいうのかもしれない。

コノ（小野）＝オノ（小野）であろうか。オノ（小野）は、「人里の近くにあり、生活の場となり、しばしば立ち入る野。薪場（ナラシバ）、草場など村落の共有地があり、占有が許されなかった場」であったという（民俗地名語彙事典）。ここのコノも下栗の入会地の一つであったと思われる。

国土地理院の全国地図にはコノ地名は42ヶ所に中・大字として挙げられており、うち27ヶ所が「小野」となっている。

【小畑】

オバタ。

程野と下栗に三ヶ所あり、いずれも道路のある傾斜地になっている。

オバタとは何をいうのであろうか。語源辞典に依りながら三説を挙げておきたい。

①オバタとは文字通りで、単に「小さな焼畑」をいうのかもしれない。

②オバタ←コ（古）・バタ（焼畑）で、「地力の尽きた焼畑」か。伊豆や鹿児島に残っている語という。

③オバタ←コバ（木場）・タ（処）と転じた語で、コバには「山中で木材を一時積み重ねておく所」の意があり水窪の方言であるとう。すなわち、オバタとは「伐りだした材木を積み重ねておく所」であろうか。三ヶ所とも道路沿いにあることが、この説の強みか。

全国地図には、オバタ地名が39ヶ所にあり、うち24ヶ所に「小畑」の文

字を宛てている。

【帯山・ヲビ山】

オビヤマ。

下栗に三ヶ所あり、いずれも道路に接している。

オビヤマとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①オビは動詞オブ（帯）の連用形で「細長くめぐった状態」をいう。すなわち、オビヤマとは、「細長くめぐった山地」をいうのであろうか。この場合、“山地”とは「谷川の流れて沿った山地」である。三ヶ所のオビヤマ小字を結ぶとオビヤマであることが頷ける。

②オビ←ヲ（接頭語）・ヒ（樋）と転じたもので、「細い流水」を意味する。従って、オビヤマとは「細い川の流れている山地」を意味するか。

オビヤマ地名は、全国地図に2ヶ所が中・大字として挙げられており、「帯山」「大日山」の字が宛てられている。

【女沢】

オンナザワ。

上町に二ヶ所あり、いずれも谷川に接している。

アンナザワとは何をいうのであろうか。二説を挙げる。

①オンナ←ウナ（畝）と転じたもので、「小高くつらなつた所」をいう（語源辞典）。ウ段からオ段への母音交替は各時代にわたっており、きわめて例が多いという（国語学大辞典）。以上から、オンナザワとは「側稜の尾根の間を流れている谷川」を意味するのであろうか。

②オンナ←オミ（谷奥）・ナ（「場所」接尾語）と撥音便化した語であらうか。オミはオク（奥）・ミ（廻）で「谷奥」の意（語源辞典）。以上から、オンナザワとは「谷奥にある谷川」を意味する。この方がより現地の状況に近い。

オンナザワ地名は全国地図には無い。

【カガラ】

カガラ。

下栗の遠山川へ下る急傾斜地にある。

カガラは中国地方では「山の緑樹の間に天然に露出した石の崖」（改訂総合日本民俗語彙）とか「出雲でイワカガラ、石カガラといい、岩ばかり重畳した場所、礫や巖の吃（ママ）立した山地など砂を混えず岩石ばかり累積した所」（民俗地名語彙事典）とある。

従って、下栗でも、カガラは「岩ばかりの崖のあるところ」と解したい。

全国地図には、カガラ地名は記載がない。

【カカラブ】

カカラブ。

下栗にあり、カガラ小字に接している。

お互いに接しているので、カカラ＝カガラとみて、ほぼ間違いのないであろう。

ブはフ（生）の濁音化した語で「～のある所」（語源辞典）をいうのであろう。

従って、カカラブとは、カガラと同じで「岩ばかりの崖のあるところ」であると思われる。

カガラ←ガガ(峨々)・ラ(場所をいう接尾語)と転じた語ではないだろうか。全国地図には、カガラ地名もカカラ地名も載ってはいない。

【柿ノ島】

カキノシマ。

下栗の遠山川の沿岸にある。

カキとは、動詞カク(欠)の連用形が名詞化した語で「浸食地形」をいう(語源辞典)。

従って、カキノシマとは「川によって削られた島」をいうのであろう。

全国地図には、カキノシマ地名は1ヶ所だけであるが、中・大字として記載されており、「柿島」の字が宛てられている。

【柿平】

カキノタイラ。

程野の上村川左岸にある。

先にも触れたように、カキは動詞カク(欠)の連用形で「崩崖」をいい、タイラは「山中にある平らな所」をいう(国語大辞典)。

以上から、カキノタイラとは「崩崖もあり、山中に平らな所がある土地」をいう。繰り返しになるが、「平地といっても周囲と比較してのことであるから、かなりの傾斜地も含まれるし、もちろん大小、高所、低所を問わない。山上にわずかの平地があっても、タイラはタイラである」(民俗地名語彙事典)という”平らな所”である。

全国地図にはカキノタイラ地名は2ヶ所に中・大字として載っており、いずれも「柿」の字が用いられている。

【カゲ(影)久保】

カゲクボ。

程野の上村川左岸の傾斜地にある大きな小字である。

カゲ(影)には「物にさえぎられ、またはおおわれた、背面・後方の場所」という意味もある(広辞苑)。

カゲクボとは「日の当たらない窪地のある土地」をいうのであろう。

どこにでもありそうな地名であるが、全国地図にはカゲクボ地名は記載が無い。

【カゲ下】

カゲシタ。

程野の上村川右岸の日当たりのいい南東向きの斜面にある。

カゲシタとは何をいうのであろうか。二説を挙げたい。

①カゲ(影)を「日の光」(広辞苑)とすれば、カゲシタとは「日当たりのいい斜面の下の方にある土地」をいうのであろう。

②カゲ(陰)であれば、カゲシタとは「日蔭地の下流側にある土地」をいうも

のと思われる。この日当たりのいい土地の上流側は山陰になっていて日当たりはよくない。

カゲシタ地名は全国地図には載っていない。

【風折】

カザオレ。

程野の東部の山中と上村川左岸の二ヶ所にある。

先に出版した『伊那谷南部の局地気象と気候地名』のなかで、カザオレとは「風による倒木や枝折れなどの多い土地」とした。今でもその他の解釈は出ていない。

全国地図にはカザオレ地名は1ヶ所だけ中・大字として記載があるが、それはこのカザオレである。

【カシツクリ】

カシツクリ。長野縣町村字地名大鑑ではカシヅクリになっている。

中郷の上村川右岸にあり、川岸から山地の奥にまで達する細長い小字になっている。

カシツクリとは何を意味するのか。主に語源辞典に依りながら三説を挙げる。

①カシツクリはカシ（川岸）・ツク（漬）・リ（接尾語）で、「川岸で水の漬く土地」をいうか。ツクは動詞ツク（漬）の連用形が名詞化した語で、リは「場所」をいう接尾語。

②カシは動詞カシグ（傾）の語幹で「傾斜地」をいい、ツクリはツ（津）・クリ（割）で「水辺の崩崖」をいう。クリは動詞クル（割）の連用形が名詞化した語で、「崩崖」のこと。以上から、カシツクリとは「傾斜地になっていて水辺に崩崖があるところ」を意味するか。

③カシツクリはカシ（傾斜地）・ツ（助詞でノの古語）・クリ（崩崖）で、「傾斜地で崩崖のあるところ」をいうのであろうか。

全国地図には、カシツクリ地名は記載されていない。

【カズオレ向】

カズオレムコウ。

上町の下流側にあるカザオレ小字の上にある。

カズオレはカザオレのこと。従って、カズオレムコウとは「カザオレ小字の向こう側にある土地」をいうのであろうか。

ただし、カザオレ小字は二ヶ所にあるので、上流側の大きなカザオレ（風折）小字であれば、カズオレムコウは「風折」小字からみて「一つ尾根を越えたここカザオレの向こう側の土地」になるし、下流側の小さな「風折」小字の下の道路からみれば、カズオレムコウは「カザオレの上側にある土地」ということになる。

【桂坂】

カツラザカ。

程野の上村川左岸の川端にある。

カツラザカとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①カツラはカハ（川）・ツラ（面）の約で「川に面した所」をいう。すなわち、カツラザカとは「川のほとりにある坂道」をいうのであろうか。

②カツはカツミの略で「低湿地」をいい、ラは「場所」をいう接尾語。従って、カツラザカとは「低湿地にある坂道」を意味するか。

全国地図にはカツラザカ地名は3ヶ所、カツラサカ地名は1ヶ所が中・大字として記載されており、その全てに「桂坂」の字が宛てられている。

【ガド石坂】

カドイシザカ。長野縣町村字地名大鑑ではカトイシザカになっている。

下栗の高原ロッジ下栗の北東側にある。

カドイシザカとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げておきたい。

①カドはカハ（川）・ド（処）で「自然湧水のあるところ」のこと。すなわち、カドイシザカとは「脇に湧水のある石の多い坂道」をいうのであろうか。すぐ上には、下栗浄水場がある。

②カドはカド（門）で「家の前の空き地」をいう。従って、カドイシザカは「屋敷の前の石の多い坂道」かもしれない。現在の下栗浄水場のところにはかつて有力者の屋敷があったのだろうか。

全国地図には、カドイシザカ地名は無い。

【カナトコ岩】

カナトコイワ。

下栗大野の遠山川に下る坂道にある。

カナトコイワとは、文字通り「金床のような岩のあるところ」を意味するのであろう。露出している岩を金床に見立てたもの。なお、金床は日葡辞書にも載っているので中世末には使われていた語である。

全国地図には、カナトコイワ地名が2ヶ所に中・大字として載っており、「カナトコ岩」「金床岩」となっている。

【蟹久保】

カニクボ。

程野の東部山地にあり、谷川も流れている。

カニクボとは何か。二説を挙げる。

①カニはカネ（矩。曲）で「曲がった地形」をいい、クボは「山中の小平地」のこと（語源辞典）。従ってカニクボとは「等高線や道路が曲がりくねっている山地の小平地」を意味するものと思われる。傾斜地の中の緩傾斜地で、居住地もある。

②カニクボとは字面の通りで「沢蟹のいる山中の小平地」をいうのかもしれない。

全国地図にも、カニクボ地名は1ヶ所、中・大字として挙げられており、「蟹窪」の字が宛てられている。

24

【カニトフ】

カニトウ。

程野のナラシロ沢が上村川に合流する地点にある。

カニトウとは何を意味するか。二説を挙げる。

①カニトウはカニ（蟹）・タフ（撓）から転じた語で（方言大辞典）、「沢蟹の多い尾根先端部の小平地」をいうのであろうか。川の合流点にある小平地である。

②カニ←カナ（搔薙）と転訛した語で、トフは動詞タフス（倒）の語幹のタフの転じた語で「傾斜地をいう（以上は語源辞典）。従って、カニトフとは「川で削られた傾斜地」をいうか。

全国地図には、カニトウ地名は記載されていない。

【カニヤ久保】

カニヤクボ。

程野の東部山地にあり、カニクボ小字に接している。

ヤにはヤツ（菴）の略で「水。流水」を意味する場合と、愛知県などの地名にあるように「岩」にヤと訓ませる場合があるという（民俗地名語彙事典）。そこで、カニヤクボとは何か。二説を挙げたい。

①カニヤクボはカニ（蟹）・ヤ（菴）・クボ（窪）で、「沢蟹のいる谷川があり小平地もある土地」をいうか。

②カニ←カナ（搔薙）と転じた語でヤを「岩」とみると、カニヤクボは「崩崖もあり岩も現れている山中の小平地」となるが、どうであろうか。

全国地図には、カニヤクボ地名は載っていない。

【上井戸】

カミイド。

下栗のミヤノタイラ小字とマトバ小字に囲まれた小さな小字である。

カミイドとは何か。二説を挙げる。

①カミイド（上井戸）で字面の通り、「上の方にある自然の湧水地」をいうか。やや下手にはイドバタ（井戸端）小字があるので、このイドバタに対応させた命名か。

②カミイドはカミ（神）・イ（井）・ド（処）で、「神聖な泉」を意味するか。今はないが、かつてあったお宮の神事に使われた神水だったのであろうか。

全国地図には、カミイド地名は2ヶ所で中・大字として記載があり、いずれも「上井戸」となっている。

【上島】

カミジマ。

程野の上村川右岸、新程橋のたもとにある。

カミジマとは何か。二説をあげておく。

①カミジマ（上島）は、字面の通りであれば、「川の上流にある島」であろうか。上村川の島があたか、あるいは単に「川辺の土地」を島といったのかもしれない。

②カミジマ（神島）だったかもしれない。近くの下流側に上八幡社があるので、このお宮の神事に関わる島であった可能性もある。カミジマとは「神の宿る島」とも考えられる。

全国地図には、カミジマ地名は20ヶ所に中・大字として記載があり、うち16ヶ所が「上島」で、3ヶ所が「神島」となっている。

【上島前・上島向】

カミジママエ・カミジマムコウ。

いずれも程野のカミジマ小字の上村川対岸にある。

カミジママエは、「カミジマ（小字）の前方にある土地」であり、カミジマムコウは「カミジマ（小字）の向こう側にある土地」をいうのであろう。

これだけカミジマを冠にした小字があるということは、カミジマが重要な土地であったことを意味するのであろう。

カミジママエ地名もカミジマムコウ地名も全国地図には載っていない。

【神石】

カミノイシ。

程野の東部奥の山地にある。神燈沢の北側になる。この小字とは別に、「神の石」中字が2.5万分の1の『大沢岳』の地図にぽつんとある。”ハイランドしらびそ”の東方で北又沢の左岸、亀五郎沢の上流側である。高さが35mほどもある巨岩で、山の神が祀られており、鳥居もあり、山仕事で入山する人たちはここでオタカラ（幣）をささげ神酒を進めて安全祈願をしたという（遠山谷北部の民俗）。

それでは、この小字のカミノイシとは何をいうのであろうか。三説を挙げたい。

①カミノイシとは、中字の神石と同じように「大きな石があつて、山の神が祀られていたところ」か。山口祭が行われていた可能性もある。

②カミは動詞カム（噛）の連用形で「水などが岩や砂を激しくえぐる」状態をいい、イシとは「石の多い地」をいう（語源辞典）。従って、カミノイシとは「崩崖のある石の多いところ」をいうのかもしれない。

③或いは、カミノイシとは「噛まれたような痕のある石のあるところ」とも考えられる。

カミノイシ地名は全国地図に1ヶ所、中字として挙げられているのは、上村の北又川のカミノイシである。

【平畑】

タイラバタ。

程野と中郷の二ヶ所にある。一つは中郷の上村川左岸で、ヒツイワ小字の上流側の側稜の尾根部分にあり、もう一つは程野の上村川左岸の川端にある。

タイラバタとは「尾根の緩傾斜地にあり、焼畑耕作が行われていたところ」をいうのであろうか。タイラには「山中にある平らなところ」（国語大辞典）である。

タイラバタ地名は全国地図には1ヶ所だけ中宇として挙げられているが、それは、このヒラバタ小宇が中宇となっているタイラバタである。

【上ノ平畑】

カミノタイラバタ。

中郷の東部山地にある。下流側にはタイラバタ小宇が接している。

カミノタイラバタとは「タイラバタの上流側にある焼畑」を意味するのであろう。

カミノタイラバタ地名は、全国地図には無い。

【上村】

カミムラ。

上村川右岸の上村自治振興センターの付近の大きな小宇と、下流側左岸の山麓に近い傾斜地に小さな小宇が二ヶ所ある。

この小宇は現在、大字のカミムラの元になっている地名である。大字カミムラはカドムラ（角村）→カドムラ（上村）→カミムラ（上村）と変わってきている（伊那谷の地名1）。

カミムラの原点に戻って、カドムラは何を意味していたのか、考えてみたい。三説を挙げる。

①カドはカハ（川）・ド（処）の約で「川辺」をいい、ムラは「集落」をいう（語源辞典）。従って、カミムラとは「川辺で家の集まっているところ」をいうのであろうか。下流側のカミムラ小宇は、現在は民家も一戸しかないが、小宇成立当時は二つの小宇を含むもう少し広い地域になっていて、家々もあったと思われる。

②カド←カンド（神戸）←カンベ（神戸）と転訛したもので（語源辞典）、カドムラとは「何らかの形で神社に関わる民家があるところ」を意味するのかもしれない。

③カドにはカド（角）で「曲がり角」の意もある（国語大辞典）。カドムラとは「川の曲流点にある土地」をいうのかもしれない。ここで上村川は大きく曲流している。

全国地図には、カドムラ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「門村」の字が宛てられている。なお、カミムラ地名は、全国には当地も含めて62ヶ所もあり、うち61ヶ所が「上村」となっている。

【上村川通り】

カミムラカワドオリ。

大字上村の東部山地の大部分を占める広大な小宇になっている。

カミムラカワドオリとは何を意味しているのでしょうか。いまひとつはっきりしない小宇名であるが、二説を挙げておきたい。

①カミムラカワ・トオリで、カミムラカワドオリとは「上村川の川筋に沿った土地」であろうか。

②あるいは、トオリ←タ（接頭語）・オリ（下）と転訛した語で、タは語調を整

える接頭語で、オリは「傾斜地」をいう（語源辞典）。従って、カミムラカワドオリとは「上村川の川筋にある傾斜地」をいうのかもしれない。

いずれにしても、全国地図にはカミムラカワドオリ地名は記載されていない。

【神燈沢】

カミヤキザワ。地元でもこう呼んでいる。

中郷東部の奥地で神燈沢の上流部にある小字。

カミヤキザワとは何か。語源辞典に依りながら、三説を挙げたい。

①カミは動詞カム（噛）の連用形の名詞化した語で「水などが岩や砂を激しくえぐる」状態をいい、ヤキは「焼畑」をいう。以上から、カミヤキザワとは「焼畑を流れる急流のある土地」をいうか。

②カミ（神）は「神聖な土地」をいい、ヤキはヤギの清音化した語で「山間の狭い小谷」を意味する。従って、カミヤキザワとは、「神聖な土地で山間の小さな谷になっているところ」をいうか。

③カミはカミ（上）で「川の上流部」をいう。すなわち、カミヤキザワとは川の上流部で焼畑が行われている土地」かもしれない。

なお、私説の付会地名であるが、選択肢の中には入れることはできないが、面白いので挙げておく。

「神燈沢」をカミアカリザワという。カミは池大明神のこと、アカリは動詞アガル（上）の連用形の名詞化した語。以上から、カミアカリザワは「池大明神が遡行していった谷川のある土地」としたかった。下流側にある新島の池大明神を祀った池が干上がって、大明神は神燈沢最上流部の御池の移ったという歴史がある。

全国地図には、カミヤキザワ地名は載っていない。

【柄ノ多】

カラノタ。

上町東部の山地にある。

カラノタはカラ（涸）・ノタ（ヌタ）で、カラ←カレと転じた語で「水が乏しい」の意で、ノタは下伊那の方言で「山間の湿地」をいう（語源辞典）。

従って、カラノタとは「水が涸れやすい山間の湿地」を意味するのであろうか。

全国地図にはカラノタ地名は見当たらない。

【川口】

カワグチ。

下栗の北西部山地にある。

カワグチとは「川の支流が本流に流れ込む所」をいう（語源辞典）。祓沢の支流が祓沢に流れ込むところをいうのであろうか。

カワグチ地名は、全国地図に95ヶ所も中・大字として記載されうち91ヶ所に「川口」の字が宛てられている。またカワグチ地名は3ヶ所にある。

【川竹平】

カワタケダイラ。

程野の東部山地にあり、なかを上村川の支流が流れている。

カワダケダイラとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①カワタケは「川のそばにはえている竹」をいう（国語大辞典）。ダイラは「山地にある小平地」であろう。以上から、カワタケダイラとは「川岸に竹藪のある山地の小さな平地」をいうのであろうか。

②カワタケとは「川岸の土地」をいう（方言大辞典）。山梨県や神奈川県にある方言だという。従って、カワタケダイラとは「川岸にある山地の小さな平地」を意味するか。

全国地図には、カワタケダイラ地名は記載されていない。

【勘左エ門嵐】

カンザエモンアラシ。

程野の上村川右岸の急傾斜地にある。

カンザエモンアラシとは何か。

アラシはこの地方の方言であるが、「転がす」を意味するアラスの連用形が名詞化した語であろう。「山の急斜面の上から木材などを投げ下ろす場所、又はそうするために出来た溝。信州や相州などで」と分類山村語彙にもある。

以上から、カンザエモンアラシとは「勘左エ門さんの所有する、伐採した材木を下ろす場所」を意味するのであろう。

【キクナギ・キク崩】

キクナギ。

下栗の遠山川に下る道が通っている広い小字。

キクナギとは何か。二説を挙げたい。

①キクはキク（崎嶇）で「山路などがけわしいこと」をいう（国語大辞典）。すなわち、キクナギとは「峻しい山道が通っている崩崖のある傾斜地」をいうのであろうか。

②キクはクキ（岫）が転じた語で「洞穴」の意か（語源辞典）。従って、キクナギとは「岩の洞穴がある崩崖のある傾斜地」をいうのかもしれない。

全国地図には、キクナギ地名は載っていない。

【喜助ヶ崩】

キスケガナギ。

下栗の東部山地にあり、小平地もある。

キスケガナギとは「喜助さんがかかわっていた崩崖のある傾斜地」にしておきたい。どうかかわっていたかは不明であるが、喜助が住んでいたのか、喜助が管理していた材木集積所でおもあったのかどうか。

【北沢】

キタザワ。

程野の上村川左岸の山地にあり、支流の北沢が流れている。

キタザワとは「(程野の) 中心部からみて、北の方にある谷川が流れていると

ころ」をいうのであろう。

全国地図には、キタザワ地名は48ヶ所の中・大字として挙げられており、うち47ヶ所が「北沢」になっている。

【キタジロ】

下栗の北西部で、「上ノ平」小字の北側にある小さな小字である。現在も高原ロッジ下栗付近からキタジロ小字まで徒歩道がついている。

キタジロとは何か。二説を挙げる。

①ジロ＝シロで、語源辞典でいう「赤石山地で緩やかな傾斜地」に該当するか。すなわち、キタジロとは「(下栗半場からみて)北の方にある台地中腹の緩傾斜地」をいうのであろうか。

②もしかしたら、キタジロ(北城)では「北の方にあった小さな砦跡」をいうのかもしれないが、未確認。

全国地図にはキタジロ地名は載っていない。

【狐石】

キツネイシ。

中郷の上村川左岸の崩壊地にある。

キツネイシとは何か。これもはっきりしない小字名。二説を挙げたい。

①キツネイシとは、「狐がその下に住んでいたという大きな岩」か。上村川沿岸に多いといわれている磐座の一つであろうか。

②イツネとはキツネ←キツレ←クヅレ(崩)と転じた語で「崩壊地形」を示すという(語源辞典)。すなわち、キツネイシとは「崩壊地にある大きな岩」をいうか。

全国地図には、キツネイシ地名が5ヶ所の中・大字として載っていて、その全てが「狐石」になっている。

【狐塚】

キツネヅカ。

中郷の東部山地の栗山口の北方にある。

キウネヅカとは「狐が住んでいた古山」であるが、狐を神としてまつっていたと思われる(民俗大辞典)。

【君ヶ屋敷】

キミガヤシキ。

下栗の本村にあり、拾五社大明神の近くに二ヶ所になっている小さな小字である。かつては繋がっていたものと思われる。

キミガヤシキとは、字面の通りで「貴人の屋敷があったところ」であろうか。上村史にある伝文明年間(1469～87)の墓に関係があるのかもしれない。キミは京から下ってきて下栗に落ち着いた貴人であったと思われる。

キミガヤシキ地名は全国地図には記載がない。

【木取場】

キトリバ。

下栗東部にある大野の奥になる。キスケガナギ小字の北側にある。

キドリとは「山で木材をほぼ各用途に便なように切ってくる。箸木取り・串木取り・杓子取り等の名目がある。粗材採取と訳してもよい」という（分類山村語彙）。

すなわち、キトリバとは「山から伐り出した材木を用途別に切りそろえたところ」であろうか。

全国地図には、キトリバ地名が1ヶ所だけ中・大字として挙げられており、「木取場」となっている。

【キラ坂】

キラサカ。

程野東部の小沢の北方にある傾斜地に道路が通っているところにある。

キラサカとは何か。二説を挙げる。

①キラサカは文字通り「崖がきらきらと光る坂道のある所」か。蛇紋岩かホルンフェルスの露頭があるのだろうか。

②キラはキリ（切）・ラ（「場所」の接尾語）で「切り取られたような地」をいう（語源辞典）。従って、キラサカとは「崩崖のある坂道」だろうか。

なお、キラサカには、昔、遠山土佐守が参勤交代で江戸へいく時に和田から程野までは行列を連れてきて、程野からは綺羅を脱いで山伏の装束に着替えた所だという伝説がある（遠山谷の民俗）。

全国地図には、キラサカ地名もキラザカ地名も載っていない。

【金平作り】

キンペイツクリ。

程野城址の麓、上村川左岸の川縁にある。

キンペイは固有名詞と思われるが、キンペイツクリとは何か。これも二説を挙げておきたい。

①ツクリ動詞ツク（突）の連用形ツキが転訛した語、リは「場所」を示す接尾語で「突き出たところ」をいう（語源辞典）。ツキ→ツクの変化はイ段からウ段への母韻交替でこの例はかなり多いという（国語学大辞典）。以上から、キンペイツクリとは「金平さんの所有地で川に突き出たところ」をいうのかもしれない。

②ツキには動詞ツク（築）の連用形が名詞化した語で、「埋め立て地」の意もある。キンペイツクリは「金平さんが埋め立てた土地」をいうか。

全国地図には、キンペイツクリ地名は記載が無い。

【草木平】

クサキダイラ。

下栗の本村と半場に三ヶ所ほどある。

クサキダイラとは、「草木のある山間の小平地」を指すのであろうか。灰焼きをしたり、家畜の飼料や燃料を集める場だったのだろうか。

全国地図には、クサキダイラ地名はない。

【草山】

クサヤマ。

下栗半場の南部傾斜地に二ヶ所ある。

クサヤマとは「江戸時代、まぐさや肥料にするための草を刈る山で、多く一村または数村の入会地であった」（国語大辞典）という。

従って、下栗のクサヤマも「入会地であった草刈場」を意味するものと思われる。

全国地図には、クサヤマ地名は3ヶ所に中・大字として挙げられており、すべてに「草山」の字が宛てられている。

【熊ノ川】

クマノカワ。

中郷の上村川右岸の山地で、西部の山地の奥から流れでる支流沿いにある。

クマノカワとは何を意味するのか。三説を挙げる。

①クマはクマ（隈）で「奥まった所」をいう（語源辞典）。すなわち、クマノカワとは「奥まった山地から流れてくる谷川のあるところ」か。

②クマは遠山地方の方言であるクマスの語幹で「崩す」の意（長野県方言辞典）。従って、クマノカワとは「崖を崩す谷川が流れているところ」かもしれない。

③あるいは、クマノカワとは字面の通りで、「熊が棲息しているところ」といえないこともない。

全国地図には、クマノカワ地名は4ヶ所に中・大字として挙げられており、それらのすべてに「熊」の字が入っている。

【クラガリ】

程野の上村川左岸にある。

クラガリとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①クラガリとは「日当たりの良くない日蔭地」をいうか。北西向きの傾斜地にあるので、日当たりのよくない土地である。

②クラガリはクラ（剝）・カリ（刈）が濁音化した語で、「崩壊地形」をいう語を重ねた地形だという。従って、クラガリとは「崩壊の激しい崖のあるところ」であろうか。

全国地図には、クラガチ地名は1ヶ所だけ中・大字として記載されており、「暮明」となっている。

【クラ平】

クラノタイラ。

中郷の南東部の山地奥にある。

これも語源辞典に依りながら二説。

①クラは動詞クル（剝）の連用形クリが転訛した語で、「断崖」をいう。従って、クラノタイラとは「断崖もある山間の小さな平地」をいうか。

②クラ（倉）は「倉庫」のこと。すなわち、クラノタイラとは「倉庫のあった山間の小平地」かもしれない。現在でも地図には倉庫跡があるように見える。

焼畑耕作の道具や収穫物を一時的に保管した建物であったのだろうか。

クラノタイラ地名は、全国地図に3ヶ所が中・大字として挙げられている。それらのいずれにも「倉」の字が宛てられている。

【栗下】

クリシタ。

上町の上村川左岸の氾濫原から山地にまで広がる大きな小字になっている。

クリシタとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①クリは動詞クル（剥）の連用形が名詞化した語で「崩崖」をいう。従って、クリシタとは「崩崖のある山地の下の方の土地」を意味するか。

②あるいは、クリシタとは字面の通りで「栗の木が自生せいている山地の麓の方の土地」をいうのかもしれない。

国土地理院の全国地図には、クリシタ地名は8ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「栗下」の字が宛てられている。

【栗城】

クリシロ。

程野の小沢左岸にある小さな小字で、程野浄水場がある。

クリシロとは何か。語源辞典に依りながら二説。

①クリは動詞クル（剥）の連用形が名詞化した語で「崩壊地形」を示し、シロは「山腹の平坦地」をいう。従って、クリシロとは「縁には崩崖もある山腹の小さな平地」か。

②シロはシロ（城）で砦があったところかもしれない。クリシロとは「崩崖のある砦跡」だった可能性もあるか。

全国地図には、クリシロ地名は載っていない。

【黒川】

クロカワ。

中郷の上村川右岸の氾濫原から西側の山地を含む広い小字になっており、東は上村川、西は一般県道上飯田線で限られている。現在は田んぼの多いところ。

クロカワとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①クロは遠山の方言で「まわり。その辺。周囲」のこと（長野県方言辞典）で、クロカワとは「川の周辺の土地」をいうのであろうか。

②クロはクリ（渥）に通じ「湿地」をいう（語源辞典）。クロカワとは「川のある湿地帯」をいうのであろうか。しかし、イ段→オ段の母音変化はあまり明瞭ではないのが気になる。

全国地図には、クロカワ地名は中・大字として111ヶ所も挙げられており、うち106ヶ所が「黒川」となっている。

【黒川向】

クロカワムカイ。

中郷の上村川左岸にあり、クロカワ小字の対岸になる。

クロカワムカイは字面の通りで、「クロカワ小字から川を渡った向こう側の土

地」をいう。

全国地図にはクロカワムカイ地名はない。

【桑原】

クワバラ。

上町の東部、風折沢左岸の急傾斜地にある。

クワバラの由来についても二説を挙げる。

①クワは「崖」をいう場合が多いという。クエ（崩）・ハ（端）の約かといい、ハラはハラ（腹）で「中腹」をいう（語源辞典）。従って、クワバラとは「崩壊地のある山地の中腹部分」を意味するか。

②クワバラとは「桑畑」のことという（民俗地名語彙）。この急傾斜地に桑畑があったのかどうか、という疑問はあるが、焼畑のことを思うとあり得ないことではないか。

全国地図には中・大字としてクワバラ地名は39ヶ所に記載があり、その全てが「桑原」になっている。

【今朝ハネバ】

ケサハネバ。

中郷の上村川左岸にあり、氾濫原に接する傾斜地になっている。

ケサハネバとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①ケサハネバとは、字面の通り、ケサ（袈裟）・ハネ（芻）・バ（場）で、「袈裟状に斜めに芻ねだした水制のある場所」をいうか。上村川の水制であるが、すぐ上流部が欠けており、水制があった可能性はあるのではないだろうか。

②ケサは動詞キサグ（削）の語幹キサが転じた語で「崩崖」をいう（語源辞典）。イ段→エ段の母音変化はきわめて多く、中世ごろには目立って多いという（国語学大辞典）。ハネは動詞ハヌ（芻）の連用形が名詞化した語で「とび散らす」の意（国語大辞典）。以上から、ケサハネバとは「崩れ落ちた崖地のあるところ」を意味することも考えられる。

ケサハネバ地名は、全国地図には記載されていない。

【ケンマツ】

下栗軒松の平地にある。「軒松」は中字でもある。

ケンマツとは何か。二説を挙げたい。

①ケンマツ←ケムマツと転じたか。ケム（煙）は「けわしい状態」をいう。キブ→ケブ→ケムと転訛してきたのではないかという（語源辞典）。従って、ケンマツとは「嶮しい地形のところにあり、目立つアカマツがあるところ」をいうのであろうか。

②ケン（軒）の音で、「家の裏手の土地」をいう。下栗では、母屋の後ろの畑をノキバタという（遠山谷北部の民俗）。すなわち、ケンマツとは「屋敷の裏手にアカマツがある土地」を意味するのであろうか。

国土地理院の全国地図には、ケンマツ地名が1ヶ所にだけある。この下栗の中字である。

【小嵐】

コオロシ。

程野の柳沢の北岸にある。

コオロシとは何か。二説を挙げる。

①コ（小）は単に語調を整えるための接頭語で、オロシはアラシと同じで「伐採した材木を下ろす急傾斜地のあるところ」であろうか。コオロシ小字の近くには、オオアラシ（大嵐）小字があるが、コオロシ小字より、現在は面積が小さい。

②とはいっても、「大嵐」小字は地名発生時にはもっと大きかったかもしれない。コオロシとは「小さな材木下ろしの傾斜地」だった可能性もある。

全国地図には、コオロシ地名は1ヶ所に中・大字として記載があり、「小嵐」となっているが、それは『伊那和田』の2.5万分の1地図である。

【コヒタビ沢】

コイタビサワ。長野県町村字地名大鑑はコイクビサワとなっている。

下栗の赤薙沢に開口する谷にある。

コイタビサワとは何か。これも語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①コイはコ（小）・ヒ（樋）から転じた語で、「水路」をいい、タビはタフル（倒）の語幹タフの転で「崩壊地形」をいう。以上から、コイタビサワとは「崩崖の間を流れる谷川のあるところ」をいうのであろうか。

②コイはコユ（臥）の連用形で「転ぶ」意から「崩崖」をいい、タビは動詞タム（廻）の連用形タミの転で「曲がった形」を指す。以上から、コイタビサワとは、「崩崖の間を曲がりくねって下る谷川のあるところ」をいうか。

全国地図には、コイタビサワ地名もカイタビザワ地名も記載が無い。

【香臺】

コウダイ。

中郷の馬老沢中流域の右岸の山地にある。

コウダイ（香台）は「香炉をのせる台」のこと（広辞苑）。すなわち、コウダイとは「香炉を載せる台のような高地になっているところ」を意味するのであろうか。

西の方に下ったところには、愛宕地藏堂があったという。その跡地から見て、この高地を香台に見立てたものと思われる。

全国地図には、コウダイ地名は5ヶ所に中・大字として挙げられているが、「香台」の文字はない。

【香テツ】

コウテツ。

程野の蟹久保にある小さな小字である。

コウテツとは何か。これも分かりにくい。語源辞典に依りながら三説を挙げておきたい。

①コウ←カハ（川）と転訛した語で、テ←タエ（絶）と、これも転じて「崩崖」

を意味する。ツは「場所」を示す接尾語。以上から、コウテツとは「谷川の源流部で崩崖のあるところ」をいうのかもしれない。

②コウ←カクと転じた語で動詞カクス（隠）の語幹から「隠れ地」のこと。テは語調を整えるための接頭語で、ツ（津）は「水のあるところ」をいう。従って、コウテツとは「水のある隠れ地」というか。

③コウは意味を持たない接頭語コ（小）の長音化した語で、テはタエ（絶）の転じた語で「崩壊地形」をいい、ツ（津）は「水のある所」の意。以上から、コウテツとは「崩壊地で湧水のある所」をいうのであろうか。

全国地図には、コウテツ地名は無い。

【コエダ・小枝】

コエダ。

中郷の東部山地に二ヶ所あり、一つは土室沢が流れている比較的広い小字になっており、もう一つは更に奥地にある小さな小字である。

コエダとは何か。これも三説を挙げる。

①コエは動詞コユ（蹴）の連用形が名詞化した語で、「崩崖」をいうか。ダ（処）は「場所」であろう。従って、コエダとは「崩崖のある所」か。

②コエは動詞コユ（肥）の連用形で「肥沃地」だったかもしれない（語源辞典）。であれば、コエダとは「畑を休める期間の比較的短い焼畑」もあつたのであろうか。

③コエダはコ（小）・エ（江）・ダ（処）で（語源辞典）、コエダとは「谷川が流れている土地」をいうか。

全国地図には、コエダ地名は16ヶ所に中・大字として挙げられており、うち11ヶ所は「越田」になっている。

【コクゾ】

中郷東部の山地で栗山口の北方尾根の北向き傾斜地にある小さな小字で、キツネヅカ小字に接している。

コクゾとは何だろうか。語源辞典により二説。

①動詞コクルの語幹で「こすり取られたような地形」をいう。コクルは遠山地方でも使われている方言である（長野県方言辞典）。ゾは「場所」をいう接尾語。以上から、コクゾとは「ナギになっているところ」をいうか。

②ゴク＝ゴクウ（御供）で「神仏へお供えする行事にちなむ地名」ではないかという。すなわち、コクゾとは「神仏にお供えする行事に関わる土地」としておきたい。具体的には、近くにあるキツネヅカ小字に関連して、キツネを祀った場で神事が行われた場所とか、もう少し下方にあつた諏訪社に関わる費用に充てるための焼畑があつたところであろうか。

全国地図には、コクゾ地名は載っていない。

【小沢】

コザワ。

程野の谷川である小沢が上村川に合流する地点付近に二ヶ所ある。

コザワとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①コはコ（古）で「従来から」の意。すなわち、コザワとは「従来からある谷川が注ぐところ」をいうか。程野では最も大きな谷川で、サワといえどコザワを指していたのであろうか。

②コはコチラのコ（此）で「近く」の意。従って、コザワとは「(程野の) 中心地にもっとも近い谷川」を指すか。

全国地図には、コザワ地名は34ヶ所に中・大字として記載があり、うち33ヶ所が「小沢」になっている。

【コタマ岩】

コタマイワ。

上町の東部山地にある。

コトマイワとは何か。日本国語大辞典に依りながら二説を挙げておく。

①コタマは日葡辞書にもあるように古い語で、「木の霊」の意。その当時はコダマではなかった。「山の神」をいうこともあったという。従って、コタマイワとは「山の神を祀った岩のあったところ」を意味するものと思われる。これも磐座であったかもしれない。

②可能性は薄いですが、コタマ←コダマと清音化した語で、「蚕玉様を祀った所」も考えられる。もしそうであれば、この小字は養蚕が盛んになり始めたころに発生したものであろう。

全国地図には、コタマイワ地名もコダマイワ地名も載っていない。

【コタレ畑】

コタレバタ。

中郷東部の奥の山地で側稜の尾根筋にあり、北西向きの傾斜地が多い。

コダル（木垂る）は下二段活用の動詞で「①樹林が年を経て、枝が重みで垂れ下がる。②緊張がゆるんで勢いが弱る」という意味があるという（時代別国語辞典室町時代編）。例文はコタルとあるので、その時代にはコタルであったと思われる。

従って、コタレは動詞コタルの連用形が名詞化した語であると考えられることができる。

コタレバタとは何か。以上によって二説を挙げたい。

①コタレバタとは「樹木が茂って日蔭地の多い土地」であろうか。九州であるが、コダレが同じ意味に使われている。

②コタレバタとは「崩れ地のある土地」か。地表が緩んで崩れたことを示しているものと思われる。

国土地理院の全国地図にはコタレバタ地名は記載されていない。

【子ノウ】

コノウ。

程野の上村川左岸の尾根の末端部にあり、「子ノ尾（コノオ）」小字に挟まれているので、由来は同じである可能性は高い。

では、コノウとは何を意味するのであろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①コノウはコ（木）・ノウ（野）で、コ（木）は「樹林」のこと、ノウ（野）は「入会地の草刈場」の意。従って、コノウとは「樹林もある草刈場」をいうか。

②コノウはコ（カハ）・ノオ（直）で、コはカハ（川）の約で、ノオはナホ（直）が転じた語で「まっすぐな地形」をいう。すなわち、コノウとは「ほぼ真っ直ぐな谷川に沿った、真っ直ぐな尾根となっているところ」を意味することも考えられる。

全国地図には、コノウ地名は1ヶ所にだけ中・大字として採られており「小能」の字が宛てられている。

【子の尾】

コノオ。

程野のコノウ小字を挟んで二ヶ所にある。

先に述べたように、コノウ小字に接していることから、由来は同じである可能性が高い。

コノオとは何か。コ（木）は「樹林」のこと、オはヲ（山稜）で、「樹木のあ側稜」をいうのであろうか。あるいは、前述のコノウ小字の意味と重なるのであろうか。

【小ノフ】

コノフ。長野縣町村字地名大鑑はコノクとなっている。

下栗の小野にある。

コノフとは何をいうのであろうか。二説を挙げてきたい。

①コはほとんど意味をもたない接頭語で、ノ（野）は「入会地の草刈場」、フ（生）は「草木の茂っているところ」をいう（以上は語源辞典）。従って、コノフとは「草木の茂っている入会の草刈場」をいうのであろうか。

②フはフ（附）で「添える。つきしたがう」の意がある（国語大辞典）。コノフは「コノ（小野）の付近にある土地」を意味するか。

全国地図には、コノフ地名はないが、コノウ（小能）地名は1ヶ所にだけある。

【コノノフハル沢】

コノノフハルサワ。

下栗の” 桁の巨木 ”のあるところで、ほぼ等高線沿いになっている山地の道路や赤薙沢がある、大きな小字である。

コノノフハルサワとは何か。難しい小字名であるが、主に国語大辞典によって二説を挙げておきたい。

①コノはコ（木）・ノ（野）で「樹木の多い野原」をいい、フハルは動詞ブバル（武張）と関連して「いかめしくごつごつした様子」の意。以上から、コノノフハルサワとは「ごつごつした谷や山があり、谷川が流れている樹木の多い山地」と解したいがどうであらうか。

②コノはコノ（小野）で、小野地区をいうか。フハルは動詞ブワル（歩割）の連用形が名詞化した語で「分けて割りつけること」を意味することも考えられる。共有地を占有地に切り替えたのかもしれない。従って、コノノフハルサワとは「小野地区で山地を分割した土地」を意味するか。

全国地図には、コノノフハルサワ地名もコノノフハル地名も載っていない。

【薦立】

コモダテ。

程野の東部山地の奥にある。

コモダテとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①コモは動詞コモル（籠）で「(山丘などの陰に) 入り込んだ地」、ダテ＝タテで動詞タツ（断）と関係して「崩崖」をいう。以上から、コモダテとは「山の北西向きの日陰の傾斜地で崩崖のある土地」をいうのであろうか。

②コモはコボ（毀）の転じた語で「崩壊地形、浸食地形」をいい、ダテ＝タテで「急傾斜地」をいう。従って、コモダテとは「崩れ地もある急傾斜地になっているところ」の意であらうか。

2.5 万分の 1 全国地図には、コモダテ地名は 2 ヶ所にあり、いずれも「菰立」となっている。

【小屋場】

コヤバ。

下栗軒松の南側、遠山川に下る傾斜地にある。

コヤバとは何をいうのか。三説を挙げておきたい。

①コヤ（小屋）は「母屋に付属する別棟建物の総称」（民俗大辞典）だという。すなわち、コヤバとは「母屋とは別棟の建物があった所」をいうのであろうか。単なる物置小屋であったか、薪小屋か灰小屋か、それとも漬物小屋があったのか。

②コ（小）・ヤバ（矢場）かもしれない。ヤバは下伊那の方言で「網を張って渡り鳥をとる所」という（国語大辞典）。従って、コヤバとは「小さな鳥屋場があった所」か。

③コ（小）・ヤ（菴）で「小湿地があった所」も考えられる（語源辞典）。自然の湧水があって、漬物にする菜っ葉を洗ったところであらうか。

国土地理院の全国地図には、コヤバ地名は 1 2 ヶ所に中・大字として挙げられており、うち 6 ヶ所が「小屋場」となっている。

【五六】

ゴロク。

下栗の麓の方、遠山川に近い傾斜地にある。

ゴロクはゴロ・ク（接尾語）で、ゴロは「大きな石がごろごろしている所」で、クは「場所」をいう接尾語か（語源辞典）。以上から、ゴロクとは「大きな石や岩がごろごろしている土地」を意味するのだろうか。

全国地図にもゴロク地名は 2 ヶ所に挙げられており、全てに「五六」の字が

宛てられている。

【権三郎コウリ】

ゴンザブロウコウリ。

下栗の東部で遠山川に近い傾斜地にある。

ゴンザブロウコウリとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①コウリはコ（接頭語）・オリ（降）で、コはほとんど意味をもたない接頭語で、オリは「傾斜地」をいう。従って、ゴンザブロウコウリとは「権三郎が所有する傾斜地」をいうのであろうか。焼畑が行われた所か。

②コウリはコホ（毀）・リ（「場所」接尾語）で、ゴンザブロウコウリとは「ゴンザブロウが所有する崩崖のある土地」をいうか。

【コンデ（テ）ノ久保】

コンデ（テ）ノクボ。

程野東部の大渡沢右岸にある。

コンテとはコミ（澇）・テ（「場所」の接尾語）が撥音便化した語と思われる。コミは動詞コム（澇）の連用形が名詞化した語で「水びたしになる」とことをいう（大言海）。

以上から、コンテノクボとは「水浸しになり易い窪地のあるところ」を意味するのではないだろうか。

全国地図には、コンデノクボ地名もコンテノクボ地名も記載されていない。

【坂】

サカ。

中郷の上村川左岸の天神峡付近で氾濫原から登る傾斜地に二ヶ所ある。

サカとは「傾斜して勾配のある所」（語源辞典）をいうが、単にそれだけではなくて、上と下という相異なる空間をむすぶ境であり、その途中は危険な場所とみなされ神仏が祀られていることが多かったという（民俗大辞典）。中郷のサカにも同じような状況があったのではないかと思われる。

全国地図にもサカ地名は20ヶ所が中・大字として挙げられており、うち18ヶ所が「坂」になっている。

【堺明神】

サカイミョウジン。

程野の漆平沢が上村川に注ぐ合流点右岸にある。

サカイミョウジンとは「境之明神が祀られている神聖な場所」の意であろう。

現在は程野の正八幡宮の本殿内に祀られている23社の一つ。「ウトドチにあったものを再建時に合祀した」（遠山霜月祭＜上村＞）という。程野と上郷の村境に祀られていた神で、コトの神送りに立ち会った神であったか。

全国地図には、サカイミョウジン地名は載っていない。

【坂下】

サカシタ。

中郷の上村川左岸の低地とそれに続く傾斜地の裾部分にある二つの小さな小

字。中郷正八幡宮の麓になる。

サカシタとは「坂道の裾から麓にかけての土地」をいうのであろう。神聖な土地との境界にある、サカと同じような位置づけがなされていたのであろう。

サカシタはサカモトと同義で、サカシタはサカモト地名とは逆で、中国と四国に少なくその隣接地である九州と近畿中部に多いという（民俗地名語彙辞典）。

国土地理院の全国地図には、サカシタ地名が83ヶ所で中・大字として採られており、うち82ヶ所が「坂下」となっている。

【桜久保】

サクラクボ。

中郷の上村川左岸にあり林道2号線の下側となっている。

サクラクボとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げておく。

①サクラはサ（接頭語）・クラ（割）で、サ（狭）は「小さい」意の接頭語、クラは動詞クル（割）の連用形が名詞化した語で、「崩崖」をいう。従って、サクラボラとは「小さな崩れ地のある窪んだところ」を意味するか。クボはわずかな窪地をいうこともあるらしい。この場合はそれか。

②サクラはバラ科の植物の桜で、サクラクボとは「桜が自生していた窪地」をいうか。

全国地図には、サクラクボ地名は3ヶ所にだけ中・大字として挙げられている。うち2ヶ所が「桜久保」、もう1ヶ所は「桜窪」となっている。

【サクラボツ】

下栗の北西部の小字で二ヶ所にあり、一つには曲がりくねった道路がある。

サクラボツとは何か。ボツはホツが濁音化した語で、「山の支脈の峰。側稜」をいう（国語大辞典）。下伊那・水窪の方言だという。そこで二説を挙げる。

①サクラはサ（狭）・クラ（割）で「崩れ地」のこと。サクラボツとは「崩崖のある側稜」をいうか。

②それともサクラボツとは「自生した桜のある側稜」を意味するか。

全国地図にサクラボツ地名は無い。

【サクラボラ】

下栗の北西部にあり、サクラボツと接していて、下栗浄水場があり、緩傾斜地になっている。

サクラボラとは何か。これも二説になる。

ボラは谷をいうことが多いが、ここでは、茨城・栃木の方言だという「草木の茂った所」としたい（国語大辞典）。従って、ここでも二説を挙げておきたい。

①サクラボラは「崩れ地のある草木の茂った土地」をいうか。

②あるいは、サクラボラとは「崩れ地のあるサクラが自生している土地」かもしれない。

サクラボラ地名は1ヶ所にだけ中・大字になっている。字は「桜洞」。

【佐越】

サコシ。

下栗の遠山川に接する急傾斜地にある。

サコシとは何か。語源辞典に依りながら三説を挙げる。

①サは語調を整える接頭語で、コシは「急傾斜地」をいう。サコシは「急傾斜地になっているところ」をいうか。コシは伊豆地方の方言というのが、少し気になる。

②サは接頭語で動詞コス（漉）の連用形で「水が湧き出る地」をいう。従って、サコシとは「自然湧水のある所」か。山地を歩く時には清水のありかは欠かせない情報である。

③サコは「山の中段」をいい、シは「方向」を示す接尾語。サコシとは「山の中段の平地の方を向いているところ」か。下栗の集落の方向をいうのかもかもしれない。

全国地図には、サコシ地名が3ヶ所に中・大字として挙げられている。

【サソウ】

上町の上村川左岸に三ヶ所あり、大きなのはサソウ沢の上村川との合流点にある。

サソウとは何か。サソウ←ササ・フ（生）で「ササになっている所」を意味するという（語源辞典）。このことから、サソウとは何か。語源辞典に依りながら三説を挙げておきたい。

①ササはササ（細）で「キメ細かい土壌。砂地」をいう。サソウとは「砂地になっている所」か。

②ササは擬音語で「水が勢いよく、サラサラ流れるさま」をいう。とすれば、サソウとは「水が勢いよく流れているところ」を指すことになる。

③ササはササ（笹）でイネ科タケ属の植物か。すなわち、サソウとは「笹類が茂っているところ」であろうか。

全国地図には、サソウ地名は5ヶ所に中・大字として挙げられている。

【サツヲ】

サツオ。

上町の東部山地の奥にある。

サツオとは何か。これも語源辞典を見ていきたい。三説、あげておく。

①サは「語調を整える接頭語」で、ツオはツエ（潰）・ヲ（峰）の転じた語で「崩れやすい峰のあるところ」か。最下端は女沢になっている。

②サス→サツと転じたもので、サツは焼畑をいい、オはヲ（山稜）をいう。従って、サツオとは「焼畑が行われていた山稜」となるが、サス→サツと転ずる例がどれほどあるのか、やや疑問。

③サチはサワ（沢）・チ（「場所」接尾語）で、オは「山裾の末端」の意。以上から、サツオとは「山裾に谷川が流れている土地」をいうか。

サツオ地名は全国地図には無い。

【沢】

サワ。

上町の上村川右岸にある細い小字。小字図の位置が少しずれているかもしれない。

サワとは、むろん「谷川が流れているところ」をいうのであろう。

全国地図にも、60ヶ所が中・大字として挙げられている。

【沢カラ】

サワカラ。

上町の上村川右岸にあり、支流に沿った土地になっている。

サワカラとは何だろうか。分かりにくいのが二説を挙げる。

①カラはカラ（涸）で「水が涸れやすいこと」をいうか。すなわち「谷川のそばで、水が涸れやすい土地」だろうか。カラサワでないのが気になる。

②カラはガラが清音化した語で、「小石が多い土地」をいうか。サワカラとは「谷川に近い小石混じりの土地」か。

全国地図にはサワカラ地名は載っていない。

【沢口】

サワグチ。

中郷の馬老沢の中流部にある大きな小字である。

サワグチとは何か。意外と分かりにくい小字である。

グチ（口）には「ある地点に通じる道などの始まる所」の意がある（国語大辞典）。サワグチとは「道路が谷川に接している場所がある土地」をいうのかもしれない。ここに洗い物をしたり、動物が集まる水場があったのであろうか。

全国地図には、サワグチ地名は35ヶ所が中・大字として挙げられており、その全てが「沢口」となっている。

【三丁】

サンチョウ。

程野東部の奥の山地に、大小二ヶ所ある。

サンチョウは距離をいうのであろうか。ほぼ330mになる。従って、サンチョウとは「長辺が三丁ほどある土地」を意味しているものと思われるが、どうして、三丁なのかはわからない。

それにしても、全国地図には、サンチョウ地名が34ヶ所も中・大字として挙げられており、うち31ヶ所が「さんちょう」となっている。

【山王・三王】

サンノウ。

程野に二ヶ所ある。一つは小野沢の沿岸にあり、すぐ下方には山王神社がある。文化二年（1805）に埼玉県の所沢から勧請し、蚕玉様と稻荷・諏訪社を合祀しているという（遠山霜月祭<上村>）。もう一つは、南の方の大渡沢右岸にある。

サンノウとは「山王様を祀ったところ」を意味する。

山王は大津市坂本にある日吉（ひえ）大社のこと。比叡山神である山王権現（明神）が祭神であるが、この神は古事記によれば大山咋神であるという。上

村川対岸に祀る薬師如来や十一面観音と関わりがあるはずである。

全国地図には、サンノウ地名は55ヶ所で中・大字として記載がある。

【三味所】

サンマイショ。

程野の正八幡社麓の上村川左岸にある。

サンマイショには墓地と火葬場の意味がある。このサンマイショは上村川の河原にあるので「火葬場であったところ」としておきたい。

全国地図には、サンマイショ地名は無い。忌避した地名であろうか。

【ジシャ山】

ジシャヤマ。

中郷の西部山地、一般県道上飯田線や林道伊藤線が通っている。

ジシャヤマとは何か。とりあえず二説をあげておきたい。

①ジシャヤマを文字通り「寺社」とすれば、上村では正八幡宮が多いことから「八幡宮に関わる社領」ということになりそうだ。石清水八幡社・宇佐八幡社などの社領については、「伊勢神宮は別として、関東・中部地方に多くなり、東北・中国・九州に少なく一般的にしゃりょうの衰退がみられる」とある（国史大辞典）。しかし、内容についてはよくわからない。

②ジシャは「あぶらチャン（瀝青青）」のことで、長野・静岡・愛知などの方言であるという（国語大辞典）。本州から九州の山地のやや湿った所にはえる落葉低木で果実から油を採って燈油にしたらしい。荳胡麻や菜種油になる前の寺社の燈明に使われたのであろうか。以上から、ジシャヤマとは「燈明油の原料であったジシャが自生していた山地」を意味するのであろうか。

全国地図には、ジシャ地名はあるが、ジシャヤマ地名は載っていない。

【シズリ】

シズリ。

程野の東部にある大きな小字。

シズリとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①シズリはシトリと同じで、動詞シトル（湿）の連用形が名詞化した語、「湿った土地」をいう。広い山地なので、谷もあり、そこで発生した地名が山地に広がったのであろうか。

②シズはシトが濁音化したシドで動詞シドム（たわむ）の語幹。「傾斜地」の意がある。埼玉県の方言だという。

リは「場所」を示す接尾語。シドムが上村でも生きていたとすれば、シズリとは「傾斜地」と解することも可能になる。

全国地図には、シズリ地名は無い。

【地蔵ツル子・地蔵蔓根】

ジソウツルネ。

程野のほぼ中心部で、上村川左岸の氾濫原や沿岸の傾斜地にある。

ジソウツルネとは、字面の通りで「お地蔵様をお祀りしてある尾根の先端部

の土地」をいうのであろうか。ツルネ（蔓畝）は「蔓のように長く伸びてつらなった小高い所」をいう（国語大辞典）。

全国地図には、ジゾウツルネ地名は記載がない。

【シソヲツルネ】

シソウツルネ。

程野のジゾウツルネ小字に接する。

シソウツルネから転訛した語と思われるが、次のような解釈もありうるのではないだろうか。

すなわち、シソウはシソウ（死送）で「遺体を墓まで葬り送ること」（国語大辞典）をいう。このことから、シソウツルネとは「死者を送る送葬の尾根であったところ」となるが、可能性は少ないか。

シソウツルネも全国地図にはない。

【七久保・上七久保・下七久保】

シチクボ・カミシチクボ・シモシチクボ。

中郷の上村川左岸の氾濫原から傾斜地までを含む小字で、そこから高い方向に向かって「下七久保」「上七久保」小字が続いている。

シチクボとは何を意味するのか、二説を挙げておきたい。

①この地域では数字の七をヒチというので、危うい面もあるが、シチが「七」であれば、シチクボとは「いくつかの窪地が連なっている土地」をいうのであろう。七は具体的な数字を意味するものではないと思われる。

②シチ←ヒチ（漬）と転訛した。七の例のように、ここではヒ⇄シの交替が多いことからありうるとみることができる。すなわち、シチクボとは「湿地になっている窪地」かもしれない。

全国地図には、シチクボ地名は載っていないが、ナナクボ地名は12ヶ所に中・大字として挙げられている。

カミシチクボとは「シチクボ小字の上流の方にある土地」をいい、シモシチクボは「カミシチクボ小字の下流側の土地」をいう。

【シノ久保】

シノクボ。

中郷の西部山地にあり、上村川の支流の谷もある。

シノクボとは何か。二説を挙げる。

①シノ（篠）は「稈が細く、群がって生える竹の類。笹竹」をいう（国語大辞典）。シノクボとは「笹竹が群がっている窪地のあるところ」をいうのであろうか。

②シノは副詞シノニの語幹で「びっしょりと濡れた様子」から「湿地」をいう（語源辞典）。従って、シノクボとは「湿地になっている窪地」か。

全国地図では、シノクボ地名は3ヶ所に中・大字として挙げられており、うち2ヶ所に「篠窪」、1ヶ所に「篠久保」の字が宛てられている。

【西ノ沢】

ニシノサワ。

上町の上村川右岸の傾斜地にニヶ所ある。

ニシノサワとは何か。三説を挙げておく。

①ニヶ所にあるニシノサワが、同じ由来をもつのであれば、ニシノサワとは「西の方にある谷川」をいうのであろう。

②ニシは動詞ニジル（躡）の語幹が清音化した語で「崩壊地形」をいう（ご縁辞典）。従って、ニシノサワとは崩壊崖のある谷川」をいうか。南側のニシノサワ小字はこれかもしれない。

③ニシは動詞ニジム（滲）の語幹が清音化した語で「湿地」のこと。ニシノサワとは「湿地になっている谷が流れているところ」を意味するか。北側のニシノサワ小字の由来である可能性がある。

全国地図には39ヶ所にニシノサワ地名が、中・大字として挙げられており、その全てに「西」の字が用いられている。

【シヘ沢】

シベサワ。

程野の東部山地にあり、上村川支流の漆平沢右岸の傾斜地にある。

支流名と小字名とは相互に関連し合っていると思われるが、はっきりしたことは分からない。

シベサワとは何をいうのであろうか。二説を挙げたい。

①シベ←シツ（湿）・ヘイ（平）と転じた語で、ヘイ＝ヒラで「斜面」の意か。従って、シベサワとは「谷川が流れている湿気の多い傾斜地」をいうか。

②シベサワ←シツペイ（竹籠）・サワ（沢）で、竹籠とは「竹製の杖。ふつう禅宗で用いる法具」である（国語大辞典）。以上から、シベサワとは「竹籠のように曲がった谷川が流れているところ」と解することもできそうだ。

全国地図には、シベサワ地名もシヘサワ地名も記載は無い。

【清水・清水坂】

シミズ・シミズザカ。

下栗の清水にある。シミズ小字が沢の最上流部にあり、その下流側にシミズザカ小字がある。

清水はいうまでもなく「わき出る清い水」（広辞苑）である。

従って、シミズとは「泉がわき出ているところ」をいい、シミズザカは「泉がわき出ている坂道のあるところ」をいう。

全国地図にもシミズ地名は多く、中・大字として236ヶ所も記載されているが、なぜかシミズザカ地名は一つも載っていない。

【下栗】

シモグリ。

大字にもなっており、シモグリ小字は何カ所にもある。

シモグリとは何か。シモは動詞シモル（滲）の語幹で「水分がしみこむ」の意から「湿地」をいい、グリは動詞クル（剝）の連用形が名詞化した語で「え

ぐられたような状態」をいう（以上は語源辞典）。

以上から、シモグリとは「崩崖があり、自然湧水のある土地」をいうのであろうか。

全国地図には、シモグリ地名は3ヶ所に中・大字として挙げられており、うち2ヶ所は「下栗」の字が宛てられている。その一つが、当地の下栗である。

【下平】

シモダイラ。

下栗の大野から遠山川へ下る傾斜地にある。

タイラは「高低のないさま。傾斜のないさま。凹凸のないさま」（広辞苑）だが、この小字にはそうした場所はない。ダイラには新潟の方言だというのが「山の中腹から麓のあたり」の意がある（語源辞典）。

それでは、シモダイラとは何か。二説を挙げておきたい。

①シモ（下）は「下の方」だから、シモダイラとは「（下栗の）中心部から下流側の中腹から麓のあたりの土地」をいうか。

②シモには、前述のように「湿地」の意があるから、シモダイラとは「湧水のある中腹から麓のあたりの土地」かもしれない。

全国地図には、シモダイラ地名は42ヶ所に中・大字で記載があり、うち40ヶ所が「下平」になっている。

【下蔦岩】

シモツタイワ。

程野の樋久保の南東側に二ヶ所ある。

ツタには「崩崖」の意味がある（語源辞典）。動詞ツタキル（段）は「きれぎれにする。ずたずたにする」の意（広辞苑）で、このツタキルから由来しているのではないだろうか。

従って、シモツタイワとは何か、二説を挙げておきたい。

①シモツタイワとは「（樋久保の）下方にある岩が出ている崩壊地」か。

②シモは「湿地」で、シモツタイワとは「岩が露出している崩崖のある湿地」か。一つのシモツタイワ小字には谷川がある。

全国地図には、シモツタイワ地名は載っていない。

【下伏】

シモブセ。

下栗の津島牛頭天王神社の南側に広がる大きな小字である。

シモブセとは何か。

ブセ←フセ（伏）の濁音化した語で、フセは動詞フス（伏。臥）の連用形が名詞化した語で、「崩壊地形」を意味するという（語源辞典）。フス→フセの母音交替の例は「きわめて多く」しかも「中世ごろに目立って多い」という（国語学大辞典）。

以上から、シモブセとは何か。二説を挙げたい。

①シモブセとは「（神社の）下の方にある崩崖のある土地」か。

②あるいは、シモブセとは「自然湧水もある崩崖の土地」か。

全国地図には、シモブセ地名もシモフセ地名も載っていない。

【庄ノ口】

ショウノクチ。

程野の上村川に近い漆平沢下流の右岸にある。漆平沢砂防ダムのある所。

ショウノクチとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ショウノクチとは「荘園の境界地」をいうのであろうか。程野と中郷とが別の荘園であった時代があれば、成立しそうな由来である。

②ショウ←シホ←シボと転じたもので、シボは動詞シボル（搾）の語幹で「(徐々に)すぼまった地形」をいう。従って、ショウノクチとは「くさび形の谷の奥」を意味する。現地の谷は合流点から楔形になっている。

ショウノクチ地名は全国地図には無い。

【城ノ越】

ジョウノコシ。

程野城址のあるところで、峰から上村川に下る、その麓まで広がっている。家臣団の居住地のあったところかもしれない。

ジョウノコシとは「城とその麓までを含む土地」を意味するのであろう。

全国地図には、ジョウノコシ地名は10ヶ所に中・大字として挙げられている。

【正陣】

ショキ。長野縣町村字地名大鑑はこのようにルビを振っている。

下栗の中心地から東の大野に向かう途中の傾斜地にある。

ショキとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ショはショ←シホと転じた語で、動詞シホル（霑）の語幹から「濡れ湿った状態」から「湿地」をいい、キはキ（割）で「割れ目。断絶」をいう。以上から、ショキとは「自然の湧水がある人の住みにくい傾斜地」を意味するか。

②あるいは、ショは動詞シボル（搾）の語幹で「楔形の谷の奥」をいい、キは「場所」を示す接尾語か。すなわち、ショキとは「谷が狭まっている奥まった土地」をいうか。

また、①と②の前半と後半を入れ替えた地名もありうる。

全国地図にはショキ地名は載っていない。

正陣がショキになっているのは、どう考えても理解できない変化であるが、これが音読みになるがショウジンであれば、ジンには「山地の小平地」の意があるので、①「楔形の谷奥に小平地のあるところ」か②「集落が断絶していて小平地になっているところ」を意味するものと思われる。

【シヨノクキ】

程野の上村川左岸で漆平沢が合流する地点に接している。

漆平沢対岸の少し上流側にはショウノクチ（庄ノ口）小字がある。

シヨ＝シホで、先述のように「しぼり込んだような楔形の地形」であろうか。

クキはクキ（岫）で「山間のくぼんで入りこんだ所」をいうのであろう（語源辞典）。

以上から、シヨノクキとは「山間の谷で楔形にくぼんで入り込んだところ」をいうのであろうか。

むろん、シヨノクキ地名は全国地図には記載されていない。

【シラ石】

シライシ。

中郷の西部の山地にあり、一般県道上飯田線が通っている。

シライシとは「白っぽい石の多いところ」であらう。

領家帯の花崗岩類が出ているところだから、白っぽい石があるのであろう。

全国地図には、シライシ地名は63ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「白石」の字が宛てられている。

【ジンデン】

長野縣町村字地名大鑑にはシンデンとあるが、上村史に従いたい。

上町の上村川左岸にあり、風折沢が流れ込む合流点に近い。

ジンデンは湿地に多く、ジンデと同じ意で山腹や谷壁にも見られるが、その下にはたいてい低湿地があるという（語源辞典）。シミ（滲）・デ（出）が撥音便化→濁音化してジンデとなったのであろう。

以上から、ジンデンとは「山腹の傾斜地で麓には自然の湧水がある土地」をいうのであろう。

ジンデン（神田）とかシンデン（新田）にしたいところであるが、水田はできない場所である。

全国地図には、中・大字の中にジンデン地名は15ヶ所にあり、いずれも「神田」となっている。

【新道】

シンミチ。

中郷の上村川の左右両岸に二ヶ所ある。

シンミチとは字面の通りで「新しくつくった道」（広辞苑）であらう。二ヶ所の小字のうち左岸の一ヶ所には今も道路があるが、もう一ヶ所は今の地図にはない。小字発生時には新道があったのだろうか。

全国地図には、シンミチ地名は18ヶ所にあり、その全てが「新道」になっている。

【スナコ・砂駒】

スナコ。

これらの小字は程野の曲流する上村川左岸の川と川岸斜面にある。

スナコとは何か。二説を挙げる。

①スナコはスナコ（砂子）で「砂。まさご」をいう（広辞苑）。従って、スナコとは「砂地の河原があるところ」をいうのであろうか。

②元はスナコマであったことも捨てきれない。コマはコロ（転）・マ（間）で「川

の曲流点」を示す（語源辞典）。従って、スナコマとは「川の曲流点にある砂地の河原」を意味するか。

スナコ小字とスナコマ小字が混じっているが、どちらかが土地を分けて新しい地名をつけなければならなくなった時に発生した小字名であろうか。

全国地図には、スナコ地名が中・大字として2ヶ所にあり、「砂駒」と「砂子」の字が宛てられている。「砂駒」は2.5万分の1の”上久堅”地図にあり、ここ程野の「砂駒」が中字になっている。

【炭焼沢】

スミヤキザワ。

下栗の遠山川沿岸にあるが、正確な位置についてははっきりしない。

スミヤキサワとは、文字通りで「炭焼が行われていた谷川のあるところ」をいうのであろう。

全国地図には、1ヶ所だけ中・大字として挙げられており「炭焼沢」となっている。

【セバ石】

セバイシ。

程野の上村川右岸の大渡砂防ダムのあるところと上町の上村川右岸にもある。

セバイシとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①セバはセマ（狭）の古形で「狭くなった所」をいう。伊那谷南部の方言としても残っている。イシはイソ（磯）で「岩石の多い（川の）波打ち際」をいう。従ってセバイシとは「岩石の多い狭い川の波打ち際」を意味するか。

②セバはセ（瀬。急）・バ（場）で「早瀬」の意。セバイシとは「早瀬になっている岩石の多い波打ち際」であろうか。

全国地図には、セバイシ地名は記載されていない。

【千引】

センビキ。長野縣町村字地名大鑑ではセンガ（千加）になっている。

下栗の最東部、木澤境にある。

センビキとは何をいうのであろうか。分かりにくい地名であるが、これも語源辞典に依りながら二説。

①センはセ（瀬）の強意形で「急流」をいい、ビキは形容詞ヒクシ（低）の転で「低地」をいう。従って、センビキとは、「低地を早瀬が流れているところ」か。センは南佐久の方言。

②セン（千）は「多くの」の意。ビキは動詞ヒク（挽く。礪）の連用形で「刻まれた地形」をいう。以上から、センビキとは「多くの崩崖のあるところ」か。近くに崩沢があり、崩崖は多いと思われる。

センガ（千加）でも「崩れ地の多いところ」となるか。ガは動詞カク（欠）の語幹が濁音化した語で「崩崖」を意味する。

全国地図には、センガ地名はないが、センビキ地名は4ヶ所に中・大字として採られており、うち2ヶ所が「千引」の字を、4ヶ所が「千疋」の字を宛てら

れている。

【ソラザア】

ソウザア。

程野の上村川の沿岸と右岸の氾濫原に接する斜面にあるが、かつては繋がっていたものと思われる。

ソウザアとは何か。国語大辞典に依りながら、二説を挙げる。

①ソウはソウ（左右）で「左と右」のこと、ザアはサワ（沢）か。従って、ソウザアとは「左右から谷川が下ってくる土地」をいうのだろうか。この小字の地で、下流側からみて、左側の上村川に右から蛇洞沢が合流している。

②ソウ（左右）には「そば。かたわら」の意もある。この場合は、ソウザアとは「谷川に添った土地」を意味することになる。

全国地図には、ソウザア地名もソウザワ地名も載っていない。

【ソラ平】

ソラダイラ。

中郷に二ヶ所、一つは上村川右岸の沿岸に、もう一つは東部の山地の土室沢の上流部にある。

ソラダイラとは何を意味しているのか。難解地名である。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ソラは動詞ソラス（反。逸）の語幹で「傾斜地」をいう。ダイラ←タビラと転じた語で、タビラのタビは動詞タム（廻）の連用形タミの転で「曲がった形」をいい、ラは「場所」接尾語。以上から、ソラダイラとは「曲がった地形になっている傾斜地」を意味するか。上村川右岸のソラダイラ小字はこれに該当するのではないだろうか。等高線も曲がり、上村川も曲流している。

②ダイラ←タイ・ラ（接尾語）と濁音化したもので、タイは「大和大和の間の低湿地」をいう。佐賀県の方言だというので、遠い場所であるのが気になるが、これしか考えられない。すなわち、ソラダイラとは「傾斜地である谷間の低湿地」をいうか。土室沢が流れている東部奥地のソラダイラはこれであろうか。

ソラダイラ地名は全国地図には載っていない。

【大黒川】

オオクロカワ。

程野の東部山地の五ヶ所に分散している。中郷の東方の奥地になる。

オオクロカワとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①オオは接頭語で美称、クロは北設楽の方言で「傍」、カワは「泉」をいう。古い時代とかある地方では「水のある所」がカハであり井であったという。清水をもカハと表現したことがあったのであろう。以上から、オオクロカワとは「近くに清水の湧き出る所」をいうのであろうか。これらの小字にはどれも道路が通っている。

②オオクロカワはオオク（奥）・ロ（場所の接尾語）・カハ（泉）から転じた語で、「奥地で清水が出ている所」をいうのであろうか。

全国地図には、オオクロカワ地名は記載されていない。

【タイコボツ】

下栗の柿の島東部の遠山川沿岸にある。

タイコボツとは何か。これも語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①タイコは「太鼓の形をした地形」でボツは「側稜の谷に向かった下がった末端部」をいうのであろうか。従って、タイコボツとは「裾が太鼓のように曲がっている側稜の末端部」を意味するか。遠山川がここで曲流している。

②タイコ←ダイ（大）・ゴウ（川）と転訛したもので、タイコボツとは、「大きな川に向かって下る側稜の尾根」をいうのであろうか。

全国地図には、タイコボツ地名は記載が無い。

【大尺戸】

タイシャクド。

中郷の上村川右岸にある。タイシャクド（大尺渡）中字に重なり、下中郷第二配水池がある。

タイシャクドはタイシャク（帝釈）・ド（渡）で、タイシャクは帝釈天の略、ド（渡）は「沢の合流点」をいう（語源辞典）。帝釈天は古代インドの太陽神・雷神であるインドラが仏教に取り入れられて、仏教を守護する神となった。中郷正八幡社の霜月祭では本祭の湯召しで梵天とともに最初に読み上げられる神だという。

以上から、タイシャクドとは「帝釈天を祀ってある川の合流点のある土地」を意味するものと思われる。

ここへは上村川の対岸から神燈沢などが流れ込んでいる。

全国地図には、タイシャクド地名は記載されていない。

【高岩】

タカイワ。

上町の東部山地の奥にある。

タカイワとは何か。二説を挙げたい。

①タカイワとは、字面の通りで「高い岩があるところ」か。

②イワには傾斜地の意もあり、タカイワとは「側稜の尾根が続くところ」であろうか。

全国地図には、タカイワ地名は中・大字として17ヶ所に記載があり、うち14ヶ所に「高岩」の字が宛てられている。

【タカブロ】

上町の上村川右岸の浅間神社の南にある。

タカブロとは何か。語源辞典により三説を挙げる。

①タカには「限度。限界」の意があり「台地の端」をいい、ブロはフクロ（袋）が転じた語。以上から、タカブロとは「側稜の末端部で谷が深く袋状になっているところ」か。

②タカは「鷹」でブロは「森」のこと。すなわち、タカブロとは「鷹が棲息し

ている森があるところ」か。

③プロ＝フロには「神のいます所」の意もあるという。従って、タカプロとは「神を祀ったことのある側稜の末端部」ということもできる。現在は不明であるが、山の神などが祀られていたことも考えられる。

全国地図にはタカプロ地名もタカフロ地名も載っていない。

【瀧口】

タキグチ。

中郷の東部の下中郷第一配水池の上であり、神燈沢とその南の上村川支流の間にある。

瀧は「河の瀬の傾斜の急な所を勢いよく流れる水」（広辞苑）をいう。

従って、タキノグチとは「瀧に近い所で、瀧への出入口になっていたところ」をいうのであろうか。

なぜ瀧への入口が重要視されていたのか。民俗大辞典は次のように記している。「山は日常生活と密接な関係にあり、古くから信仰の対象とされ、全国各地にその地方独特の山岳信仰が生まれた。山岳信仰の中では瀧の周辺に神をまつり、穢れを清める行事の場として瀧行や水行といわれる荒行が行われ、瀧が神聖な場として崇められてきた」と。

それだけでなく、「代々の住民はタキ地名の土地には住まわない」（民俗地名語彙事典）とあるように、土石流のおそれのある土地でもある。

全国地図には、タキグチ地名は5ヶ所に中・大字として採られており、その全てが「瀧口」となっている。

【竹山】

タケヤマ。

下栗のほぼ中心部にある。

ここのヤマは高い山をいうのではないようだ。ヤマ（山）には平地林も含めた「林」の意味がある（語源辞典）。

従って、タケヤマとは「竹林」を意味するものと思われる。

全国地図には、タケヤマ地名が中・大字として22ヶ所に記されており、うち14ヶ所には「竹山」の字が宛てられている。

【田ノ半場】

タノハンバ。

程野の上村川の氾濫原から左岸の独立峰までを含めた広い小字になっている。現在、水田は見当たらない。

タノハンバとは何を意味しているのであろうか。

タノはタナ（棚）が転じた語で、「段丘など棚状の土地」で、ハンバはハバ（羽場）の撥音便化した語で「川べりの傾斜地」をいう（語源辞典ほか）。

以上から、タノハンバとは「川べりの傾斜地で棚状になっている土地」を意味するのであろうか。

全国地図には、タノハンバ地名は1ヶ所だけ載っているが、それはこの程野

の小字が中字になったもの。

【樽元】

タルモト。

中郷の上村川左岸の神燈沢沿いにあり、タキグチ小字に接している。

タルは「谷川のタキとなっている所」をいい、下伊那郡などの方言でもあるという。モトはモト（許）かモト（下）で「傍」か「山の麓」の意（以上は語源辞典）。

従って、タルモトとは何か、二説を挙げるが、大きな違いはない。

①タルモトとは「滝の傍の土地」をいうか。荒行の場であったか。

②タルモトとは「山の麓で滝があるところ」を意味する。

全国地図には、タルモト地名は2ヶ所に中・大字として採られており、「垂元」と「樽本」の字が宛てられている。

【タル口】

タルクチ。

中郷の上村川右岸にあり、そこに合流する小川沢の下流沿いにある細長い小字。

国語大辞典によれば、タルはタル（垂）で「滝」をいう。飯田付近の方言らしい。クチ（口）は「河の口」であろうか。

以上から、タルクチとは「滝のある谷川の河口付近の土地」を意味するのであろう。

【ツタ岩】

ツタイワ。

程野と下栗にある。程野は東部の山地にあり諏訪社の跡地もある。下栗は北西部に二ヶ所ある。いずれも広い小字になっている。

ツタイワとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げておく。

①ツタには「崩壊地形、浸食地形」の意があり、イワには「崖」をいうこともあるという。従って、ツタイワとは「崩崖のある土地」をいうのだろうか。

②ツタはブドウ科の蔓植物ツタ（蔦）で、ツタイワとは単に「蔦がはっている岩があるところ」か。

全国地図にはツタイワ地名は載っていない。

【土室・土諸】

ツチムロ。

中郷の東部山地にある細長い小字である。

ツチムロとは何か。二説を挙げる。

①ツチは「泥」から転じて「湿地」をいい、ムロは「山に囲まれた小盆地」をいう（語源辞典）。従って、ツチムロとは「湿地になっている山に囲まれた小盆地があるところ」を意味するか。土石流の跡とみられる崩壊した谷もある。

②肥料の青灰をつくる時に、径六尺深さ二尺ほどの穴を掘って切り枯らした木に青草を混ぜて焼くという（遠山谷北部の民俗）。それがムロかもしれない。

青灰は草刈場で焼くらしい。ツチムロとは「青灰をつくるムロのあるところ」も考えられるがどうであろうか。

全国地図にはツチムロ地名が4ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「土室」の字が宛てられている。

【ツムラ石】

ツヅライシ。

中郷の東部山地にある。

ツヅライシとは何をいうのだろうか。二説を挙げたい。

①ツヅラはツツ（包）・ラ（「場所」を示す接尾語）。ツツは動詞ツツム（包）の語幹で「山などに包まれた所」をいい、イシは「石の多い地」をいう（以上は語源辞典）。従って、ツヅライシとは「山に囲まれた石の多い土地」をいうのであろうか。山に囲まれた所は上村には多いが、それらを区別するために名づけに工夫をしていたのであろうか。

②ツヅライシとは「鍾乳石」のことをいう（国語大辞典）。外帯には石灰岩が分布しているが、鍾乳石があるのかどうか。

全国地図にはツヅライシ地名もツツライシ地名も記載されていない。

【ツベタ水】

ツベタミズ。

中郷の東部山地の奥にある。一部はツベタ沢の流域になっている。

ツベタミズとは「冷たい水が出ているところ」をいうのであろう。

ツベタイは長野県各地に分布する方言であるが、なぜか方言大辞典にはなく、長野県方言辞典にだけ記載されている。

全国地図には、ツベタミズ地名は無い。

【寺ノキ】

テラノキ。

上町の上村川右岸の山地に二ヶ所あるが、多宝院の裏手の傾斜地になる。

ノキは長野県伊那郡や水窪の方言であり「家の裏手の土地」をいう（国語大辞典）。

従って、テラノキとは「お寺の裏手にある土地」を意味する。

全国地図には、テラノキ地名は記載が無い。

【寺半場】

テラハンバ。

中郷の東部山地で、神燈沢右岸の傾斜地にある。

ハンバはハバと同じ語で、崖をいい、濃尾地方およびそれ以東に多いという（民俗地名語彙事典）。

テラハンバとは何をいうのか。二説を挙げる。

①テラ（寺）は「仏像を安置死、僧や尼が住んで、仏道の修行や仏事を行なう建物」（国語大辞典）であるが、ここには簡素な僧坊があったのかもしれない。修験道の行者がしばし休む所か、不動明王を祀ったか。テラハンバとは「修験

道の行者が関わる崖のあった土地」をいうか。神燈沢の下流には不動堂がある。
②テラのテはタエ（絶）の転で「崩壊地形」をいい、ラは「場所」を示す接尾語か（語源辞典）。すなわち、テラハンバとは単に「崩崖のある傾斜地」をいうか。信仰の地にあやかっただのかもしれない。

全国地図にはテラハンバ地名はない。

【寺屋敷】

テラヤシキ。

中郷の上村川左岸のツベタ沢の北側に二ヶ所ある。

テラヤシキとは何か。これもわかりにくい小字名である。二説を挙げる。

①テラは先に述べたように、「崩壊地形」をいい、ヤシキはヤ（菴）・シキ（急斜面）をいう（以上は語源辞典）。従って、テラヤシキは「崩崖もあり谷川のある急傾斜地」をいうのであろうか。

②テラヤシキについては「寺の屋敷地。また、寺跡の屋敷もいうか」（国語大辞典）とある。大きな僧坊があったであろうような平坦地は、これらの小字にはない。ただ行者に関わる小さな坊があったかもしれない。テラヤシキとは「行者が休む雨露をしのぐ草屋があった所」かもしれない。

全国地図には、テラヤシキ地名は中・大字として10ヶ所に挙げられており、うち9ヶ所が「寺屋敷」となっている。

【堂島】

ドウジマ。

程野の上村川右岸の河原から山地の傾斜地にある。

ドウジマとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ドウは川音による音響地名で擬音語ドウドウからきているという。従って、ドウジマとは「川音の響く島のある土地」をいうのであろうか。

②ドウはドブに通じ、「湿地」をいう。とすれば、ドウジマとは「湿地になっている島のあるところ」を意味する。

全国地図には、ドウジマ地名は10ヶ所に中・大字として挙げられており、うち5ヶ所に「堂島」の字が宛てられている。

【トオリボラ】

下栗の木澤境にある等高線に沿った細長い小字である。

トオリボラとは何か。二説を挙げる。

①トオリは動詞トオル（通）の連用形で「道路」をいう（語源辞典）。従って、トオリボラとは「道路に沿った土地で小さな谷のあるところ」をいうか。道路は等高線沿いで谷は道路と直交しているので、わかりにくくなっている。小字図では道路から離れているが、この付近の小字図は原本とずれている可能性があるが、あるいは小字発生時には道路があったところかもしれない。

②トオリとは「猪か鹿の通路」であろうか。伊豆半島の方言だというのが、上村でも使われていたかもしれない。トオリボラとは「獣道のある小さな谷」とな

る。この解釈の方が明瞭である。

全国地図にはトオリボラ地名は記載されていない。

【トクウツ】

中郷の西部山地にあり、ほぼミョウガ沢に沿っている。

トクウツとは何か。語源辞典などに依りながら三説を挙げておく。

①トク←トコと転じた語で「高くなった所」をいう。オ段→ウ段の母韻交替は「各時代にわたってきわめて多い。上代から中古にかけてと中世前後とに特に多く……」という（国語学大辞典）。また、ウツはウツ（空）で「地溝状の狭い谷」をいう。以上から、トクウツとは「高い尾根と地溝状の谷のあるところ」をいうのであろうか。

②トク←トキと転訛した語でトキは動詞トク（解）の連用形で「崩壊地形」を指す。イ段→エ段の母音変化は「かなり多い」という（国語学大辞典）。ウツは東京西多摩の方言で「獣道」をいう。従って、トクウツとは「崩崖があり獣道が通っているところ」かもしれない。

③トクは瑞祥地名デ、ウツは動詞ウツ（打）から「崩壊地形」をいう。すなわち、トクウツとは単に「崩崖のあるところ」をいうということも考えられる。

全国地図には、トクウツ地名は載っていない。

【栃洞】

トチボラ。

下栗の拾五社大明神の東方の山地にある。

トチボラとは何を意味するのであろうか。二説を挙げたい。

①トチボラとは字面の通りで「栃が自生している小さな谷」をいうか。栃は実を食用に用い、トチモチにしたりトチガユにしたと思われる。また材は良質で建築・器具・彫刻などに用いたという（国語大辞典）。霜月祭の面にもなったのであろうか。

②トチは動詞トヅ（閉）の連用形が清音化した語であろう。「山などが取り囲んだ所」（語源辞典）をいう。従って、トチボラとは「山に取り囲まれた谷」を意味するのであろうか。

全国地図には、トチボラ地名は中・大字として7ヶ所に採用されており、その全てが「栃洞」となっている。

【栃山】

トチヤマ。

上町の西部山地にあり、その中を一般県道上飯田線が通っている。

トチヤマとは何か。トチボラの由来解釈によりながら二説を挙げたい。

①トチヤマとは「トチノキが自生している山地」をいうか。

②あるいは、トチヤマとは「小高い山に囲まれた谷に近い斜面」を意味するか。

全国地図には、トチヤマ地名は6ヶ所に中・大字として挙げられており、その半分以上が「栃山」となっている。

【とちら】

トチラ。

下栗の途中沢の最上流部にある。

トチラとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①トチはトチノキで、栃が自生している共有林野をいうのであろうか。ラはラ(等)で「名詞について、それと限定されない意を表す」という(国語大辞典)。すなわち、トチラとは「栃などの樹木が自生している土地」をいうのであろうか。栃の他には栗の木なども自生していたのであろう。

②前にも述べたようにトチには「山などが取り囲んだ所」の意があり、ラは「場所」を示す接尾語(以上は語源辞典)。従って、トチラとは「山に囲まれた谷のある所」をいうか。

全国地図には、トチラ地名は記載が無い。

【トナギ】

下栗の拾五社大明神の北方にある。

トナギとは何を意味するのか。二説を挙げておく。

①トは特に意味の無い接頭語(語源辞典)で、ナギは動詞ナグ(糺)の連用形が名詞化した語で「山などの崩れた所。崖」をいう(国語大辞典)。下伊那郡・静岡県榛原郡・北設楽郡などの方言だという。以上から、トナギは「崩崖のある山地」をいうか。

②トは形容詞トシ(利)の語幹で「峻しい地形」をいう(語源辞典)。すなわち、トナギとは、「峻しい地形になっている崩崖のあるところ」であらうか。

全国地図にはトナギ地名は1ヶ所だけ中・大字として記載があり「鳥名木」の字が宛てられている。

【トビガス・トンビ楮】

トビガス・トンビガス。長野縣町村字地名大鑑には「トンビ楮」に「トンビガス」とルビを振っている。

これらの小字は下栗の屋敷中字付近に並んでいる。

トンビガスとは「鳶(トビ)の巣があるところ」を意味するのであろうか。

トンビはトビの撥音便化した語で、伊那谷南部の方言でもある。

トビはワシタカ科の留鳥で低地から低山帯にかけて、大きい川の流路や河原に集まるといふ。

全国地図には、トビガス地名は4ヶ所に挙げられており、いずれにも「鳶」と「巣」の字が宛てられている。

【トフラボラ】

下栗北西部の木澤境に二ヶ所ある。上平公園の南西側台地上にあり、そこからは谷川も流れでている。

トフラボラとは何をいうのであろうか。トフラはドブラの清音化した語でドブラは「溜池」をいう(語源辞典)。「池」を意味するドブに「場所」を示す接尾語がついたものであろう。

以上から、トフラボラとは「溜池のあった小さな谷」をいうのであろうか。

この小字が発生したときには、ここに溜池があったと思われる。

全国地図にはトフラボラ地名は載っていない。

【トヨウケ・豊受】

トヨウケ。

下栗の北西端にある。

トヨウケとは何か。二説を挙げる。

①トヨウケは、字面からみると「豊受大神を祀ったところ」となりそうだ。食物の神とされる。伊勢神宮の外宮である豊受大神宮の祭神である。しかし下栗には伊勢神宮に関わるお宮は見当たらない。そこで、同じ食物の神である宇迦之御魂神（うかのみたまのかみ）と入れ違ってしまったと考えることはできないだろうか。稲荷神社の祭神であり、狐神と付会している。この小字の隣に「中入」小字があって、そこには中入稲荷神社が祀られており、上村の霜月祭には狐神が登場する。以上から、トヨウケとは「食物の神を祀っていた土地」としておきたい。

②トヨ←トヒ（樋）と転じたもので「水路。川」をいい、ウケは動詞ウグ（穿）の連用形が清音化した語（語源辞典）。従って、トヨウケとは「谷川の浸食をうけて崩壊している崖のあるところ」をいうのかもしれない。ボッタ沢の最上流部になる。

全国地図には、トヨウケ地名は載っていない。

【トイロ】

トヨクチ。

程野の上村川右岸山地に「カゲ下」小字を挟んで二ヶ所あるが、かつては繋がっていたものと思われる。

トヨはトヒ（樋）が伊那谷南部らしく転訛した語で「川」をいう。クチ（口）は「出入口」であろう。

以上から、トヨクチとは「支流である川が本流に合流しているところ」を意味するものと思われる。小さな方のトヨクチ小字はこの由来に対応していないが、この小字発生時には大きな方の小字と一つながりになっていたのではないだろうか。

全国地図には、トヨクチ地名は記載が無い。

【トヨ久保・樋久保】

トヨクボ。

程野の上村川左岸の正八幡宮の南にあり、二つの小字は並んでいて、中字にもなっている。

トヨはトヒ（樋）の転訛した語で、トヨクボとは「水路のある傾斜地の小平地」を意味するものと思われる。大きな谷川は少し離れているが、その谷川に注ぐ流があるのであるだろうか。

全国地図には、トヨクボ地名は3ヶ所に挙げられていて、2ヶ所が「豊久保」で1ヶ所は「樋久保」でこれが程野の「樋久保」中字である。

【ドングリ】

下栗の遠山川に下る傾斜地の中腹にある。

ドングリとは「カシ・クヌギ・ナラなどの実を採集した共有林野」をいうのであろう。

ドングリについて、民俗大辞典は次のように書いている。

「これらの木の実は日本列島の各地の山村で採集され、アク抜きをし粉にひいて、ダンゴやドングリコンニャクともドングリトーフともよばれる食品に加工され、日常的に食用に供されてきた。その痕跡は1950年代末までは確実に存在した。食用に供するためのドングリの採集は共有林野で行われることが多かった」と。

下栗では、「どんぐりを干して車屋で搗き皮を取り、粉にして粉フルイにかけ、粉の細かいのを煮て潰した大豆と混ぜて味噌にすると、少し渋いがうまい」と明治40年生まれの野村まんよさんは母の話として伝えている(遠山谷の民俗)。

全国地図には、ドングリ地名は1ヶ所だけ中・中字として挙げられている。

【中入】

ナカイリ。

下栗の「屋敷」中字付近にあり、中入稲荷神社が祀られている。

ナカイリとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ナカ(中)は「山などの間」の意で、イリ(入)は「川上」をいう。従って、ナカイリとは「尾根の間で沢の上流になっているところ」をいうか。この小字はボッタ沢の最上流部にあたる。

②ナカ(中)には「神社の境内」を指すこともあるという。すなわち、ナカイリとは「神社の境内もある沢の奥地」を意味するか。

全国地図には、ナカイリ地名が8ヶ所に中・大字として記載があり、うち7ヶ所は「中入」となっている。

【中郷】

ナカゴウ。

中郷の上村川右岸の氾濫原と傾斜地を含む土地にある。中字は「行者」であろうか。

ナカゴウとは何か。これも語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ゴウ(郷)は「中世末～近世の地方区画単位としての郷村」をいうのであろうか。従って、ナカゴウとは「二つの郷村に挟まれた村」の意か。程野と上町に挟まれた郷村を意味すると思われるがどうであろうか。

②ゴウには「川の合流点」をいうこともある。ナカゴウとは「2ヶ所の合流点の間にある土地」ということも考えられるが、どうか。2ヶ所の合流点とは、東側からの漆平沢と西側から流れ込むショウガ沢との合流点をいう。

国土地理院の全国地図には、ナカゴウ地名は97ヶ所に中・大字として挙げられており、うち89ヶ所に「中郷」の字が宛てられている。

【中立】

ナカダチ。

上町の上村川左岸と遠山川右岸にある。上村川左岸のナカダチ小字は二ヶ所に分かれているが、近接しているのもともとは一つだったと思われる。赤沢山神を祀っている。

ナカダチとは何か。二説を挙げておきたい。

①ナカダチとは「真ん中が谷川によって断たれているような土地」を意味しているのであろうか。ナカ（中）は「中部。中央部」をいい、ダチは動詞タツ（断）の連用形が濁音化したもので「つながりを途中で切る」意（広辞苑）。

上村川付近のナカダチは赤沢川が、遠山川付近のナカダチは遠山川の支流が、それぞれの小字を断ち切っている。

②ナカには「内部」の意もあり（広辞苑）、ダチは動詞タツ（断）の連用形が濁音化した語で「浸食地形、崩壊地形」を意味する（語源辞典）。従って、ナカダチとは「内部に崩崖のある土地」をいうのかもしれない。

全国地図には、ナカダチ地名は 5 ヶ所に中・大字として記載されており、その全てが「中根」となっている。

【中根】

ナカネ。

下栗の最南西部の木澤境にあり、中字にもなっている。

ナカネとは何を意味するのか。

民俗地名語彙事典には「ネはもと山の頂上のことだったが、後に山全体を指すようになった。…（中略）…尾根、台地、土手などの高所にあたる部分をネ（根）、ヤマノネ（山根）、ネギシ（根岸）などと呼ぶ」とある。

従って、ナカネとは「中央部に台地から伸びる尾根がある土地」をいうか。

全国地図には、ナカネ地名は 4 4 ヶ所に中・大字として挙げられており、うち 4 0 ヶ所が「中根」になっている。もちろん、ここの「中根」中字はそのうちの一つ。

【中平】

ナカノダイラ。

中郷の天神峡公園の近くにある、小さな小字。

ナカノダイラとは何か。ナカ（中）は上村川からみて傾斜地の中段を意味するか。ダイラは「中腹の平らな場所」（語源辞典）であろう。従って、ナカノダイラとは「山腹の平らなところ」を意味するものと思われる。小字図では、位置がすこしずれているが、由来解釈には変わりはない。

全国地図にはナカノダイラ地名は 1 ヶ所にだけ中・大字として記録されている。

【長畑】

ナガバタ。

下栗の遠山川に下る崩沢に沿った広大な小字である。

ナガバタとは何か。三説を挙げる。

①ナガバタとは字面の通りで「長く斜面に沿って延びている焼畑があった土地」か。

②ナガは動詞ナガル（流）の語幹で、「傾斜地」をいい（語源辞典）、ハタ（端）は「川端」を意味するか。すなわち、ナガバタとは「川端の傾斜地」をいうか。

③ナガ←ナギ（崩）と転じて「崩壊地形」をいい、バタは「焼畑」のこと（語源辞典）。従って、ナガバタとは「崩崖のある焼畑」か。しかし、イ段→ア段の母韻交替は多くはないようだ。

2.5万分の1の全国地図には、ナガバタ地名は5ヶ所、ナガハタ地名は中・大字として21ヶ所に記載があり、うち24ヶ所が「長畑」になっている。

【中山】

ナカヤマ。

程野の上村川左岸にあり、氾濫原のすぐ上の斜面となっている。

ナカヤマ地名は全国的にも多く、中・大字として295ヶ所に挙げられている。しかも287ヶ所で「中山」の字が宛てられている。

ナカヤマとは「山に入った中」を意味する例が多いという。この程野のナカヤマもそれであろう。すなわち、ナカヤマとは「河原から山に入ったところ」をいうのであろう。

【流宮】

ナガレミヤ。

中郷の上村川右岸にある。

むかし、ここに大きな岩があってそこに諏訪明神を祀ってあったが、大洪水があって流され、現在、諏訪宮といわれているところに流れ着いたという言い伝えがある。諏訪宮というのは、本市場小字の対岸にある新道小字の所か。

以上から、ナガレミヤとは「大洪水で流されてしまった諏訪宮のあったところ」をいうのであろうか。

全国地図には、ナガレミヤ地名は無い。

【崩中】

ナギナカ。

中郷と下栗にある。中郷は上村左岸の氾濫原から急傾斜地にかけての場所で大きな崩壊地がある。下栗は本村から遠山川へ下る傾斜地にある比較的大きな小字である。中を崩中沢が落ちている。

ナギナカとは「崩壊地のある急傾斜地」を意味するのであろうか。

全国地図には、ナギナカ地名は記載されていない。

【ナシクボ】

下栗の津島牛頭天王の東方傾斜地にある。ボッタ沢の最上流部になる。

ナシクボとは何をいうのであろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ナシはナラシ（平）から転じた語で「緩傾斜地」をいう。ナシクボとは「（急傾斜地からみて）緩傾斜地になっていて窪地になっているところ」をいうか。

②ナシルは動詞ナスル（擦）の語幹で「こすられたような地形」をいう。すな

わち、ナシクボとは「崩壊地のある窪地で谷になっているところ」を意味するか。

全国地図にはナシクボ地名が6ヶ所に中・大字として挙げられている。

【梨平】

ナシノタイラ。

中郷の東部山地の尾根筋にある。

ナシは前述のように、動詞ナスル（擦）の語幹で「こすられたような地形」をいう。従って、ナシノタイラとは「尾根がこすられたように平になっているところ」をいうのであろうか。

全国地図には、ナシノタイラ地名は載っていない。

【ヒドヤマ】

下栗の大野から遠山川に向かう傾斜地にある。

ヒドは「山腹のくぼんだ所」をいう（国語大辞典）。新潟の方言だという。従って、ヒドヤマとは「山地の傾斜地で傾斜角が緩んだところ」を意味するものと思われる。

ヒドヤマ地名は全国地図には載っていない。

【縄打場】

ナワウチバ。

程野の上村川右岸の氾濫原から急傾斜地へ上る土地にある。

ナワウチ（縄打）といえば検地であるが、ここでは当てはまりそうにない。

そこで語源辞典に依りながらナワウチバとは何を意味するのか考えたい。ナワ←ナバ（斜）と転じた語で「傾斜地」をいい、ウチは動詞ウツ（打）の連用形で「切り取られたような地形」をいう。

以上から、ナワウチバとは「（上村川に）切り取られたような傾斜地」を意味するのであろう。今でも崩落の跡がはっきりしているような地形になっている。

全国地図には、ナワウチバ地名は無い。

【ニウキガ久保】

ニュウキガクボ。

上町の西部山地にあり、林道伊藤線が通っている。

ニュウギとはオニギ（鬼木）のことであろう。川路付近ではオニギと呼んでいた。長野県南部から愛知県にかけてはオニギ、愛知県から静岡県にかけてはニュウギと呼んでいたらしい（民俗大辞典）。これを上村ではニュウギという。

小正月の行事で、大正月のオヤスと同じ場所に供えた。ニュウギの材料はクルミヤクリ・マツなどが多かったという（遠山谷の民俗）。

ニュウキガクボとは「初山でニュウギの木を取りに入った緩傾斜地」を指しているものと思われる。恐らくは私有地では無く、村共有の入会地であったのではないだろうか。

ニュウキガクボ地名は、もちろん全国地図には載っていない。

【二軒小屋】

ニケンゴヤ。

下栗の遠山川沿岸にある細長い小字である。

ニケンゴヤとは何か。二説をあげる。

①ニケンゴヤとは字面の通りで「二軒の小屋があったところ」であろうか。むろん小字発生時の状態であったと思われる。

②ニケン←ヌケと転訛した語で、ヌケは動詞ヌケル（抜）の連用形が名詞化し、さらに撥音便化した語で「崩崖」をいう（語源辞典）。ウ段→イ段の母音交替は「かなり見られる例」（国語学大辞典）という。以上から、ニケンゴヤとは「崩崖地に小屋のあるところ」とも考えられる。

ニケンゴヤ地名は全国地図に中・大字として2ヶ所にあり、二つとも「二軒小屋」の字が宛てられている。

【濁川】

ニゴリガワ。

程野の上村川左岸の氾濫原～山地にあり、ニゴリ沢の上流部と重なる。

ニゴリガワとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げておく。

①ニゴリガワは字面の通りに解すれば、「濁った水の流れている川のある土地」をいうのであろう。しかし、常時濁っているとは思えないが、他の支流より濁っている時間でも長いのであろうか。

②ニゴリは「湿地」にも通じ、ニゴリガワとは「湿地もある谷川が流れている土地」ともいえそうだ。支流が合流する地点は湿地になっていると思われる。

全国地図にはニゴリガワ地名が中・大字として31ヶ所に記載があり、うち30ヶ所が「濁川」となっている。

【西ノ島】

ニシノシマ。

程野の上村川右岸で、程野城址の対岸にある。

ニシノシマとは何か。二説を挙げる。

①ニシノシマとは、文字通り「西方にある島」をいう。程野城址から見ての“西”をいう。

②ニシは動詞ニジム（滲）の語幹で、「湿地」をいう。従って、ニシノシマとは「湿地にある島」をいうか。もっと丁寧にいえば、「島のある湿地付近の土地」か。

ニシノシマ地名は全国地図に10ヶ所、中・大字として記載があり、うち「西ノ島」は1ヶ所ある。これは、ここ程野の「西ノ島」中字である。

【西ノ宮・西之宮】

ニシノミヤ。

中郷、上村川の沿岸の「西ノ宮」小字と支流の馬老沢左岸にある「西之宮」小字の二ヶ所にある。

ニシノミヤとは何を意味しているのであろうか。これも二説を挙げておく。

①ニシノミヤとは「西方にお宮のあるところ」であろうか。基準点になってい

るのは中郷の正八幡宮か馬老沢対岸の愛宕地藏堂になるが、「西之宮」小字は正八幡宮の西ではなくて北側になってしまう。地藏堂が基準であれば、二ヶ所とも“西方”になるが、どう考えればいいのだろうか。

②ニシには「湿地」の意もあった。ニシノミヤとは「湿地にあるお宮」を意味することになる。

全国地図には、ニシノミヤ地名は中・大字として11ヶ所に記録されている。

【西ノ山】

ニシノヤマ。

上町の西部山地にある。

ニシノヤマとは何か。これも二説を挙げておきたい。

①ニシノヤマとは、字面の通りで「西方にある山地」を意味するが、“西”の基準になっているのは上村川と思われるが、あるいは上町の中心部かもしれない。

②ニシノヤマを「湿地のある山地」とする可能性もなではない。この小字の中心部を谷川が流れ下っている。

全国地図には、中・大字としてニシノヤマ地名は12ヶ所に記載がある。

【西山】

ニシヤマ。

程野の上村川右岸の「西」中字にあり、薬師如来堂付近からほぼ等高線に沿って南にのびる細長い小字になっていて、集落や山地のある土地になっている。

ニシヤマとは「(上村川の)西方にある土地」をいうのであろう。

全国地図には、ニシヤマ地名は中・大字として170ヶ所に記載されている。

【沼ノ平】

ヌマノタイラ。

程野の上村川左岸にあり、程野の正八幡宮の北側の平坦地となっている。

ヌマノタイラとは、文字通り「湧水のある山間の平地」を意味する。

全国地図には、中・大字として6ヶ所にあり、いずれも「沼」と「平」の字が宛てられている。

【根ノ神】

ネノカミ。

程野の上村川左岸の小沢合流点の南東方にある。山地の麓になる。天照皇大神に近い。

根ノ神は大連嶺の鎮めとなる山の神であろうといわれている。その数は遠山谷でもごく少ないとも(遠山谷の民俗)。

ネノカミとは「尾根の山の神である根ノ神を祀っているところ」を意味するのであろう。

ネノカミ地名は、全国地図に5ヶ所が中・大字として挙げられている。

【野尻】

ノジリ。

中郷の西部山地にあり、神燈沢にも接し、上中郷の浄水池もある。

ノジリとは何か。ノ(野)は「草刈地もある広い山地」をいうのであろうか。入会地でもあったのだろう。ノジリとは何を意味するのか。語源辞典によりながら二説を挙げる。

①ジリは形容詞ジルイの略で「水気の多い状態」をいうか。ノジリとは「草刈地もある広い山地で湿地もあるところ」か。

②ジリは副詞ジリジリからきた語で「少しずつ」の意から「緩傾斜地」をいう。従って、ノジリとは「草刈場もあり比較的緩い傾斜地になっている山地」をいうか。この小字の南側には傾斜の急な山地がある。

全国地図には、ノジリ地名は6ヶ所に中・大字として載っており、うち6ヶ所に「野尻」の字が宛てられている。

【ノタバ】

程野の東部山地、「蟹久保」中字にある。

ノタバは「猪の好む湿地」をいう。遠州・三河境の山地では「ノタバニハノタガミがいるとして不浄を戒める。新たにノタバ場を発見したときは、注連縄を張り幣をきりかけ、ノタバミを祭れば霊験があるという(総合日本民俗語彙)。

以上から、ノタバは「猪の好む湿地があるところ」を意味する。

全国地図には、ノタバ地名は記載がない。

【ハイデン】

下栗の拾五社大明神の南西側に二ヶ所ある。

ハイデンとは何か。二説を挙げる。

①ハイデンが「拝殿」であれば、「礼拝をおこなうために本殿の前に設けた神社の前殿があったところ」となる。神社が現在の拾五社大明神であれば、少し離れすぎているようにも思えるがどうであろうか。

②ハイは「山腹のやや平らな地形」をいい(語源辞典)、デン(田)には「はたけ」の意もある(国語大辞典)。よって、ハイデンとは「緩傾斜地に畑があった土地」をいうのかもしれない。

全国地図にはハイデン地名は載っていない。

【橋の上】

ハシノウエ。

中郷のミョウガ沢が上村川に注ぐ対岸の左岸にある。

ハシノウエとは文字通り、「(上村川に架かる)橋のすぐ上の土地」をいうのであろう。

全国地図には、ハシノウエ地名は2ヶ所に中・大字として記載がある。

【橋向】

ハシムコウ。

上町の上村川左岸に二ヶ所ある。かつては繋がっていたものであろう。上村橋の近くにある。

ハシムコウとは文字通り「橋の向こう側の土地」をいう。基準になっている

のは、上町の中心部か、あるいはそこにある多宝院とか浅間神社と思われるが、一ヶ所に特定するのは難しい。

ハシムコウ地名も、全国地図には3ヶ所の中・大字として挙げられている。

【橋本】

ハシモト。

程野の東部山地にある。

ハシモトとは何を意味しているのでしょうか。上村川からは、かなり離れており、地名になりそうな橋が架かるような川は流れていない。

しかし、語源辞典によれば、ハシモトはハシ（端）・モト（下）で「台地の端（崖）の下」をいうこともあるという。このハシモト小字も「八平」の台地から少し下ったところにある。

以上から、この小字のハシモトとは「台地の縁から少し下ったところ」を意味するものと思われる。

【蜂ノ尻】

ハチノシリ。

程野の東部山地にあり、中を支流の谷川が流れている。

ハチノシリとは何か。

①ハチはハチ（鉢）で奥にある池を鉢に見立てたもので、シリは「後方部」をいう。従って、ハチノシリとは「池の後方部にある土地」をいうか。この池は標高 1132mの程野山にあり、そこから下流側にある谷川がハチノシリ小字を流れている。

②ハチは「山の側稜と側稜との間の沢」をいう（国語大辞典）。鹿児島の方言だというのが気になるが、状況はぴったりと合う。すなわち、ハチノシリとは「側稜と側稜の間を流れる沢の流れ出すところ」を意味するか。

国土地理院の全国地図には、ハチノシリ地名は2ヶ所が中・大字として挙げられている。

【八幡坂】

ハチマンザカ。

程野の樋久保にあり、上村川の氾濫原と左岸の傾斜地に続いている。この小字の中に程野の正八幡宮がある。

ハチマンザカとは「程野の正八幡宮に通じる坂道のある傾斜地」を意味するのであろうか。

全国地図には、なぜかハチマンザカ地名もヤワタザカ地名も記載がない。

【八丁坂】

ハッチョウザカ。

下栗の大野から遠山川へ下る傾斜地にある。

ハッチョウザカといえば「8丁ほど続く坂道」になるが、この小字内にはそんなに長い坂道も傾斜地もない。そこで、ハッチョウザカとは何を意味していたのか、三説を挙げておく。

①ハッチョウザカとは、かつて大野集落から遠山川まで下る坂道があつて、「遠山川まで下る八丁も続いた坂道があつたところ」をいうのであろうか。

②あるいは、ほぼ等高線沿いに登り下る坂道があつて、「八丁も続く隣の集落と通じる上り下りする坂道のあつたところ」か。この小字を横断している道路は八丁の一部ということになる。

③ハッチョウザカとは、単に「長い坂道のあつた所」かもしれない。

2. 5万分の1の全国地図には、ハッチョウザカ地名は6ヶ所が中・大字として挙げられている。

【原伊塚】

ハライツカ。長野縣町村字地名大鑑では原伊沢（ハライサワ）になっている小字であらうか。

ハライツカとは「大きな石が所々で集まって小高くなっている祓沢の流れているところ」をいうか。大きな石が集まっているところをツカと呼んだと思われる。

ハライツカ地名は全国地図には載っていない。

【ハライザワ】

下栗の祓沢の最上流部にある。

ハライザワとは「神事がとり行われる谷川」を意味するのであろう。

下栗の拾五社大明神の霜月祭の神事が祓沢で行われる。霜月祭の本祭の水迎えである。お宮から行列を組んで囃しながら祓沢まで往復する。祓沢では“祓沢の式”が執り行われるのである。

全国地図には、ハライザワ地名が3ヶ所に中・大字として挙げられており、全てに「払沢」の字が宛てられているが、ハライサワ地名は1ヶ所で「祓沢」となっている。

【場老沢】

バロウサワ。

程野と中郷にある。程野のバロウサワは上村川右岸の氾濫原から傾斜地にかけて、中郷のバロウサワは上村川左岸の山地で馬老沢の両岸にあり、愛宕地藏堂がある。

バロウサワとは何か。

①バロとは「険しいところ」をいう（民俗地名語彙事典）。バラが生えていて利用価値のないところで、高知県や愛知・長野の境にあるらしい。従って、バロウサワとは「険しい山地を谷川が流れている土地」をいうのであろうか。

②バロはバロ（馬路）で「馬の通る路」をいい、日葡辞書にもあるらしい（国語大辞典）。バロウサワとは「馬道が通っているところで谷川が流れている土地」をいうか。

全国地図には、バロウサワ地名は記載がない。

【ハシノ手】

ハシノテ。

下栗大野の北東方の山地にある。

ハシノテとは何を意味しているのか。二説を挙げておきたい。

①ハシ（端）は「台地の縁辺」を、ノテは「人家のないところ」をいう（語源辞典）。合わせて、ハシノテとは「尾根の縁辺部の土地で集落から外れた人家のないところ」をいうか。

②ハシは動詞ハシル（奔）の語幹から「湧出する泉」をいい（語源辞典）、ノテには「猪や鹿など獣類の通れる山中の道」の意もある（国語大辞典）。そこで、ハシノテは「自然の湧水がある獣道のあるところ」か。大きな崩壊地があり、湧き出る泉のあることも考えられる。

全国地図にはハシノテ地名は記載がない。

【ハンシャ栗山】

ハンシャクリヤマ。

下栗村境で木澤須沢の北方の山地にある。

ハンシャクリヤマとは何か。

①ハン（榛）で「榛の木」で、シャは動詞シャル（曝）の語幹で「崩壊地」をいう（語源辞典）。クリは動詞クル（刳）の連用形で「崩落地」をいうのである。従って、ハンシャクリヤマとは「榛の木のある焼畑で、崩崖もある山地」をいうか。シャとクリで崩壊地名用語を重ねているのであろうか。

②ハンは動詞ハム（食）の連用形ハミが撥音便化した語で「山などの険しいところ」をいう（語源辞典）。ハンシャクリヤマとは「きつい傾斜地で崩崖もある栗の自生地」かもしれない。これも入会地の可能性が高い。

全国地図には、ハンシャクリヤマ地名は載っていない。

【半場】

ハンバ。

上町の上村川の沿岸と下栗の高原ロッジの東の尾根の峰部分にある。

ハンバとは何か。二説を挙げる。いずれもハバが撥音便化した語であろうか。

①ハンバとは「山上の平地」を意味する（国語大辞典）。静岡県榛原郡の方言だという。下栗のハンバ小字はこれであろう。

②ハンバには「川べりの緩傾斜地」をいう（国語大辞典）。上町のハンバ小字に適応した解釈と思われる。

全国地図には、ハンバ地名は10ヶ所に中・大字として挙げられており、うち6ヶ所には「半場」の字が宛てられている。

【ヒカゲ・ヒカケ・日影】

ヒカゲ。

程野に三ヶ所、中郷と下栗に一ヶ所ずつある。

ヒカゲには「日当たりのいいところ」と「日当たりの悪いところ」という相反する意味がある。

上村にある五ヶ所のヒカゲ小字は、いずれも「日当たりの良くない日蔭地」をいうものと思われる。

全国地図には、ヒカゲ・ヒカケ地名は81ヶ所が中・大字として挙げられている。

【日影庵】

ヒカゲアン。

程野の上村川への合流点に近い蛇洞沢左岸にある。

ヒカゲンアンとは何か。三説を挙げる。

①アン←ハナと転訛した語で「先端」をいう（語源辞典）。ヒカゲアンとは「側稜先端の麓にある日蔭地」をいうか。

②アンはアの促音化した語で「湿地」の意（語源辞典）。すなわち、ヒカゲアンとは「日蔭地にある湿地」を意味することも考えられる。

③漢字にこだわることは避けなければならないが、ここに「いほり（庵）」がなかったとは言い切れない。ヒカゲアンとは「日蔭地にあった庵」の解釈も入れておきたい。

全国地図には、ヒカゲアン地名は記録されていない。

【日掛沢】

ヒカケザワ。

下栗北部の赤崩沢の沿岸にある。

ヒカケザワとは「日蔭地を流れる谷川があるところ」を意味するのであろう。

全国地図には、ヒカケザワ地名は4ヶ所が中・大字として挙げられている。宛てられている文字は「日蔭沢」2ヶ所、「日影沢」「日陰沢」が1ヶ所ずつとなっている。

【ヒカゲド】

程野の蛇洞沢左岸に二ヶ所あり、ヒカゲアン小字を挟んでいる。

ヒカゲドとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ド（渡）は「沢の合流点」をいう。水音の擬音ではないかという。従って、ヒカゲドは「合流点に近い日蔭地」をいうか。

②ドートと転じた語で「場所」を示す接尾語。ヒカゲドは単に「日蔭地」を意味するのかもしれない。

全国地図には、ヒカゲド地名は記載がない。

【東ガンドヲ】

ヒガシガンドウ。

程野の上村川上流の左岸にある比較的大きな小字である。

語源辞典には、ガンドウ（巖洞）＝ガンドで「崖。斜面（坂）。堤防。洞穴」系の用語と思われる」とある。

従って、ヒガシガンドウとは「（上村川の）東側にある崖地」であろうか。

【東平】

ヒガシダイラ。

中郷の東部山地の奥にある。

ダイラ（平）には「山中の平らなところ」の意がある。この小字には平らな

ところはないが、緩い傾斜地はあるので、このことを指しているのであろう。

ヒガシダイラとは「(中郷の) 東部の山地にある比較的傾斜の緩んだところ」をいうのであろうか。

全国地図にもヒガシダイラ地名は中・大字として14ヶ所が挙げられており、その全てが「東平」となっている。

【東ツガ岩】

ヒガシツガイワ。

下栗の北部、津島牛頭天王神社の北東方にある。

ツガはツカ(塚)の濁音化した語で「土が盛り上がって高くなった所」(国語大辞典)をいうか。

従って、ヒガシツガイワとは「(下栗の中心部の) 東方にある尾根が張り出していて石の多い土地」を意味するのであろうか。

【東畑】

ヒガシハタ。

程野の東部山地にあり、小沢砂防堰堤の南になる。小さめの小字である。

ヒガシハタとは「(程野の) 東部にある焼畑」であろうか。

全国地図には、ヒガシハタ地名は中・大字として16ヶ所にあり、いずれも「東畑」となっている。

【ヒガラキ】

ヒカラキ。

中郷の東部に大小二つの小字がある。大きなヒガラキ小字は細長く延びている。

ヒガラキとは何を意味するのか。分かりにくい地名である。それでも主に語源辞典に依りながら三説を挙げておきたい。

①ヒカラは動詞ヒカラブ(干涸)の語幹ヒカラで「乾燥してかさかさになる」ことをいう(国語大辞典)。キは「場所」を示す接尾語。以上から、ヒカラキとは「乾燥しやすい土地」をいうか。

②ヒはヒマ(隙)の古形で「谷筋の空間」をいい、カラは「小石」の意。すなわち、ヒカラキとは「小石の多い谷のある土地」か。語のつながりが不自然か。

③ヒカはヒガシ(東)の略で、ラキは「場所」を示す接尾語を二重に重ねた形か。従って、ヒカラキとは「(中郷の) 東部の土地」をいうか。

ヒカラキ地名は全国地図には載っていない。

【樋口】

ヒグチ。

下栗の上村川右岸にあり、曾山沢が合流している。

ヒグチとは「谷川の河口がある土地」であろうか。

全国地図にはヒグチ地名が28ヶ所に中・大字として挙げられており、うち25ヶ所で「樋口」の字が宛てられている。

【ヒコツドフ】

ヒコツドウ。

下栗の本村に二ヶ所ある。

ヒコツドウが何を意味するのか、よく分からないが、二説を挙げる。

①ヒコのヒは「神聖な」の意で、コは「男」をいう（大野晋）。ツは助詞ノと同義。ドウはドウ（堂）か。以上から、ヒトツドウとは「男神を祀る小祠のあったところ」をいうのかもしれない。

②ヒコ←ヒク（低）と転じたもので「低地」をいう（語源辞典）。すなわち、ヒコツドウとは「お堂のある低い土地」を意味するか。

全国地図には、ヒコツドウ地名もヒコツドフ地名も載っていない。

【ヒジクリ】

下栗の拾五社明神の背後にある。

ヒジクリとは何か。ヒジはヒジ（泥）で「水分のまじった土」をいい、クリは動詞クル（割）の連用形で「えぐられたような地形」の意（語源辞典）。従って、ヒジクリとは「湧水があり、崩れ地もある土地」をいうのであろうか。

全国地図には、ヒジクリ地名は記載が無い。

【ヒツ島】

ヒツシマ。

中郷の上村川左岸にあり、川に沿った長い小字になっている。

ヒツシマはシツシマ（湿島）が伊那谷南部様に方言化した語であろうか。従って、ヒツシマとは「じめじめとした島」をいうのであろうか。

全国地図には、シツシマ地名は2ヶ所で中・大字で記載があり、いずれも「櫃島」の字が宛てられている。

【ヒナタ・日向】

ヒナタ。

程野・中郷・下栗の各地にある。

ヒナタとはいうまでもなく、「日当たりのいい土地」をいう。

全国地図にもヒナタ地名は多く、141ヶ所に中・大字として挙げられている。

【ヒナタ坂】

ヒナタザカ。

中郷の左岸の段丘上にある。

ヒナタザカは、字面の通りで「日当たりのいい坂道のあるところ」を意味するのであろう。

ヒナタザカ地名は、全国地図には無い。

【ヒナツチバ】

下栗の半場から本村に下る傾斜地にある。

語源辞典はヒナツチとは「粘土」のことで、愛知県北設楽郡の方言であり「ヒネル（捻）ためのツチ（土）」の意ではないかという。

従って、ここ下栗のヒナツチバとは「粘土があったところ」を意味するもの

ではないだろうか。建物の壁に使われていた土壁の材料であったと思われる。

全国地図には、ヒナツチバ地名は記載がない。

【フカセ (ゼ)】

フカセ。

上町に四ヶ所あるが、いずれも上村川左右両岸の沿岸にある。

フカセはフカ(深)・セ(瀬)で「川の深い場所がある土地」を意味していると思われる。上村川が曲流している地点で深くなっている場所があったのであろうか。

国土地理院の全国地図には、フカセ地名が15ヶ所、フカゼ地名は7ヶ所で、合計22ヶ所に記載されており、うち21ヶ所が「深瀬」となっている。

【フゴ】

下中郷の上村川左岸にあり、氾濫原から傾斜地まで延びている。現在は一部に水田もある。

フゴといえば社寺にまで拡大されたというフゴ(封戸)になりそうだが、シンデン(神田)やジデン(寺田)などの地名になることが多かった時代であったので、未練を感じながらもここでは仮説から除くことにした。

フゴはフケ(沮)・ゴ(処)で「湿地」を意味するという(語源辞典)。フケは動詞フケル(更)の連用形の名詞化した語で「低い湿地」をいう(国語大辞典)。

以上から、フゴは「低い所が湿地になっている土地」をいうのであろう。この小字の隣地は「ヒツ島」小字になっている。

全国地図には、フゴ地名は記載されていない。

【ブツソフ】

ブツソウ。

程野の上村川峡谷の右岸にある。

ブツソウとは何か。主に語源辞典に依りながら、三説を挙げたい。

①ブツはブツ←フシ(節)と転じたもので「高所」をいい、ソウはサハ(沢)の転訛した語。以上から、ブツソウとは「高い尾根もあり谷川に囲まれた土地」をいうのであろうか。三方を上村川と二本の支流に囲まれた側稜の尾根になっている。

②ブツは動詞フタゲ(塞)の語幹が濁音化した語で「塞がれたような地形」を指す。すなわち、ブツソウとは「峡谷で塞がれているようになっている川の流れているところ」かもしれない。

③ブチは「山の急に峻しくなった所」をいい、ソウは動詞ソフ(添)の連用形ソヒが転じた語。つなげて、ブツソウとは「山が急に峻しくなっている崖に添った土地」を意味しているか。ブチの意味が吉野で使われている方言だというのが気になる解釈ではある。

全国地図にはブツソウ地名は記録されていない。

【舟久保】

フナクボ。

程野の小沢沿岸に二ヶ所ある。

フナクボ（舟久保）は「信濃、越後地方。小断層によって生じた窪地」（民俗地名語彙事典）とあるが、必ずしも断層とはかぎらないと思われる。

フナクボは、もともとは「舟形のように細長い窪地」を指したのであろうが、単に「斜面にできた窪地」であろうか。三方は壁になっていても一方は開けているような窪地が多いのではないだろうか。

全国地図には、フナクボ地名は載っていない。伊那谷南部の特徴的な小字名であろうか。

【ボッタサハ】

ボッタサワ。

下栗の大野と屋敷の間にあり、同名の谷川が流れている。

ボッタサワとは何か。三説を挙げる。

①ボッタとは茨城・千葉の方言で「ぐしよりぬれること」の意か（国語大辞典）。従って、ボッタサワとは「あちこちに湧水があって湿った土地で谷川があるところ」をいうか。

②ボッタはホリ（堀）・タ（処）の濁音化、促音便化した語で「えぐられたような地形」をいう。すなわち、ボッタ沢とは、「えぐられたような地形で谷川が流れている所」であろうか。

③ボッタはホキ（歩危）・タ（処）で、「山腹の峻しいところ」をいう。類似語のホッキは天竜川沿いにある。以上から、ボッタサワとは「峻しい山腹を流れる谷川のあるところ」かもしれない。

全国地図には、ボッタサワ地名は記載されていない。

【ボッタ沢入】

ボッタサワイリ。上村史には「ボック沢入」とあり、長野縣町村字地名大鑑には記載がないが、ボッタサワ小字の上流側にあることから、「ボッタ沢入」とした。

下栗の北部にあり、ボッタ沢の奥の山地にある、広大な小字になっている。

ボッタサワイリとは「ボッタサワの最上流部の土地」を意味するものと思われる。

【ホソソレ】

長野縣町村字地名大鑑ニハホソソフレとある。

中郷の東部山地で神燈沢に近いところにある。

ホソソレとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ホソ（細）は「小さい」の意で、ソレは「焼畑」をいう。すなわち、ホソソレとは「小規模の焼畑のあるところ」をいうか。

②ソレはズレと同じで「崩崖」をいう。従って、ホソソレとは「小さな崩れ地のあるところ」をいうのかもしれない。

全国地図には、ホソソレ地名は載っていない。

【ホソナギ】

下栗の北部にあり、西側には祓沢が流れている。

ホソナギとは文字通り、「細長い崩崖のあるところ」を意味する。

全国地図にはホソナギ地名は載っていない。

【細畑】

ホソバタ。

中郷の栗山口にある。

ホソバタとは「小さな焼畑があったところ」と思われる。あるいは常畑になっていたこともあるかもしれない。

全国地図には、ホソバタ地名は4ヶ所にあり、うち3ヶ所が「細畑」となっている。

【程野】

ホドノ。

程野のあちこちに分布しており、そのほとんどは上村川の河原で、その近くの傾斜地などを含んでいる。

ホドノとは何をいうのであろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ホドは動詞ホトブ（潤）の語幹ホトが濁音化した語で、「湿地」をいう。従って、ホドノとは「湿地になっている河原がある土地」をいうのかもしれない。

②ホドは動詞ホドク（解）の語幹で、「崩壊地形」をいう。すなわち、ホドノとは「崩崖もある河原の平地」をいうのであろうか。

全国地図には、ホドノ地名は中・大字として19ヶ所、挙げられており、うち17ヶ所には「程野」の字が宛てられている。

【程野山】

ホドノヤマ。

程野の山地にある広大な小字である。

ホドノヤマとは、「ホドノ小字の山地側の土地」をいう。

全国地図にはホドノヤマは載っていない。

【マイリドウ】

下栗の本村から延びて遠山川に達する尾根筋にある。

マイリドウとは何をいうのであろうか。意外と難解な小字名である。いくつか挙げてみたい。

①マイリドウといえば「参り道」かと思ってしまう。「道」を音読みすることがあったのかどうか、疑問であるが、あったとすれば、「人物に詣でる道」ということになる。怪しげながら挙げておきたい。

②マイリドウは「参り堂」か。そこに籠もって神仏に願うというお堂があった場所とも思えない。

③マは「意味のない接頭語」で、イリは「出入口」か。ドウは擬音語で「川とのするところ」。まとめると、マイリドウとは「(下栗への) 出入口になっている川音の響くところ」となりそうだが、どうであらうか。

④ドウはド（処）の長音化した語で、マイリドウとは「神仏にお参りする所」となるが、果たして遙拝をするようなことがあったのかどうか。

どの解釈も危ういところがあって、もっとすっきりした考えがあるのではないか、という気がしてならない。

【マギキ】

中郷の西部山地の奥にある。

マギキとは何か。はっきりしないが、取り敢えず二説を挙げておく。

①マギはマキの濁音化した語で、マキは「牧場」で、キは「処。従って、マギキとは「牧場のあった所」だろうか。

②マギはマキの濁音化した語。動詞マク（撒）の連用形で「散らし落とす」の意（語源辞典）。よって、マギキとは「崩落した崖のあるところ」であろうか。

全国地図には、マギキ地名は載っていない。

【マギキ浦】

マギキウラ。

中郷の西部山地にある。

マギキウラとは「マギキ小字の下方の土地」を意味するものと思われる。小川沢の下流の土地をいうのであろう。

マギキウラ地名も全国地図には記載されていない。

【マキダ】

この小字も中郷の西部山地にある。マギキ小字ともとなりあっている。

マキダとは何か。これも二説を挙げておきたい。

①マキダはマキ（牧）・ダ（処）で、「牧場であったところ」かもしれない。

②マキダハマキ（撒）・ダ（処）で、「崩落した崖のあったところ」であろうか。

槇（マキ）のつく地名の所は、地滑り、土石流、泥流のいずれかが起こる土地のようであるという（民俗地名語彙事典）。

マギキ小字とマキダ小字は一体の土地であったがなんらかの理由で分けざるをえなくなって、新たな小字名が生まれたのであろう。

全国地図には、マキダ地名は記載がない。

【松場】

マツバ。

中郷の上村川右岸の神燈沢が合流する所と対岸の左岸にある。

マツバとは何か。語源辞典に依りながら三説を挙げておきたい。

①マツはマツリ（祭）の略で、マツバとは「祭場」で、「お祭りが行われたところ」をいうか。左岸のマツバには三峯神社があり、近くには池大明神があり、不動堂もあった。右岸にはお宮はないが、左岸のお宮のお祭りに参加していた可能性はある。

②マツ←マチ（町）と転じたもので、「市場」をいう。マツバとは「市が開かれた場所」であろうか。川端であり、お宮も近い。山の民と里の民が交流した所でもあったと思える。

③マチには「川の分岐点」の意もあるという。マチバとは「川が合流する場所」をいうのかもしれない。ここでは上村川に神燈沢が合流している。

全国地図には、マツバ地名は40ヶ所に中・大字として挙げられており、「松場」の字は7ヶ所に、「松葉」は31ヶ所に宛てられている。

【松原】

マツバラ。

中郷の西部山地で上村川に近いところにある。

マツバラとは何を意味するのか。三説を挙げる。

①バラ←ハラと濁音化した語で、畑などに利用されていない緩傾斜地で採集や狩猟の場になっていると思われる（民俗大辞典）。マツは動詞マツハル（纏）から「巻いたような地形」をいうか（語源辞典）。以上から、マツバラとは「（等高線が）巻いているようになっている入会の草刈地」か。

②マツバラは字面の通りで、「アカマツが自生している入会地」か。

③マツ←マチで「猪の通り道」だという（語源辞典）。三重の方言。従って、マツバラとは「猪の獣道のある入会地」であろうか。

全国地図には、マツバラ地名は中・大字として159ヶ所が挙げられている。うち157ヶ所が「松原」になっている。

【的場】

マトバ。

下栗の大野北部の傾斜地にある。

マトバとは何か。語源辞典に依りながら二説をあげる。

①マトバとは「弓を射る場所があったところ」か。上町の的場には口碑が残るが、このマトバについてはどうであろうか。神事があったことも考えられるが、不明。

②マトバには「狩場」の意味もある。鹿や猪か、あるいは雉の狩場であったか、はっきりはしていない。

全国地図には、マトバ地名は58ヶ所が挙げられていて、うち57ヶ所が「的場」になっている。

【マ下】

ママシタ。

下栗の本村西部にある小さな小字である。

ママとは「崖」のことで、三遠南信地方はもちろん全国的にも共通している語である。

従って、ママシタとは、「崖地の麓で傾斜の緩んでいる土地」を意味するのであろう。

全国地図には1カ所だけ、ママシタ地名が中・大字として挙げられており、「壙下」の字が宛てられている。

【マツメ】

ママヅメ。

中郷の東部山地で土室沢の北方にある。

ママは「崖」をいい、ツメは動詞ツム（詰）の連用形で「奥」の意で「沢の上流部」を指すことが多い（語源辞典）。

以上から、ママツメとは「谷川の上流部で崖になっている所」をいうのであろう。

全国地図にはママツメ地名もママヅメ地名も載っていない。

【豆ソラ】

マメソラ。長野縣町村字地名大鑑にはマメソウとなっている。

中郷の上村川の左岸にあり、馬老沢の北側にある支流の下流部にある。

マメソラとは何か。二説を挙げたい。

①マメはママ、マミと同じく「斜面」のこと（語源辞典）、ソラは「木材を山から川に落とす道。シュラに同じ」（民俗地名語彙事典）という。以上から、マメソラとは「伐採した材木を落とす斜面のあるところ」をいうのであろうか。上村川の支流へ落としていた所であろう。ソラはアラシの同義語として用いられていたのであろうか。

②マメは「豆のように小さい地域」をいい、ソラは動詞ソラス（反）の語幹で「傾斜地」のこと（語源辞典）。以上から、マメソラとは「小さな傾斜地」のことか。

マメソラ地名もマメソウ地名も全国地図には記載がない。

【丸畑山】

マルバタヤマ。

下栗大野の北部山地にある。

マルバタヤマとは何か。

マルは「等高線が円状になっている地形」で、ハタは「焼畑」、ヤマは「山地」をういのであろう。

以上から、マルバタヤマとは「円弧のように丸くなった山地で焼畑になっている土地」をいうか。

全国地図には、マルバタヤマ地名は載っていない。

【丸仮下】

マルガリシタ。

下栗の赤崩沢の東方にある。

マルガリシタとは何か。二説をあげておく。

①マルは「円弧のような等高線」をいい、カリは「草木を刈り払ったところ」で「焼畑」のこと。以上から、マルガリシタとは「円形をした山地で焼畑の下方の土地」を指すのであろうか。

②あるいは、ガリ←カリと濁音化した語で、動詞カル（刈）の連用形で「刈り払われたような地形」をいう（語源辞典）。従って、マルガリシタとは「円形の山地で崩崖地の下方にある土地」を意味するか。

全国地図には、マルガリシタ地名も載っていない。

【丸山】

マルノヤマ。

程野の東部山地にあり、漆平沢の中流域にある。

マルノヤマとは「峰が丸くなっている山」をいうが、伊那谷南部では、こうした峰があるところやくおした峰が見える所に名づけられていることが多い。

マルノヤマもマルヤマも単に「丸い山」をいうのではなく、山神などが祀られていたり、行者が関わるような崇拝の対象ではなかったとも思われる。

全国地図には、マルノヤマ地名が2カ所の中・大字として記載があり、どちらも「丸野山」となっている。

【丸松下】

マルマツシモ。

下栗の本村から大野へ向かう途中の山地にある。

マルマツシモとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①マツは動詞マツハル（纏）から「巻いたような地形」をいう。従って、マルマツシモとは「山麓が円弧のように巻いているところの下方の土地」をいうか。道路も円弧になっている。

②マルは動詞マルグ（転）の語幹で「崩壊地形」を示す。マツはマチの転で「猪の通り道」をいうか。以上から、マルマツシモとは「崩崖があり獣道が走っているところの下方の土地」の意か。

全国地図には、マルマツシタ地名もマルマツシモ地名も載っていない。

【マワタ】

中郷の上村川右岸の氾濫原とそれに続く山地までを含む小字である。

マワタとは何を意味しているのか。二説を挙げておきたい。

①マは「真」の意味の接頭語で「一時的でなく恒久的な」の意であり、ワタは動詞ワタル（渡）の語幹で「徒渉点」をいう。以上から、マワタとは「恒久的な徒渉点」で「橋の架かっている所」を意味するか。現在、黒川橋が架かっている所は、少し下流側になる。

②マワタはマワ（廻）・タ（処）で、マワタとは「川の曲流しているところ」をいうのであろう。子どものころ、「曲がる」ことを「まわる」とっていた記憶がある。伊那谷南部の方言でもあったか。

全国地図には、マワタ地名は1カ所にだけ中・大字として挙げられており、「真渡」となっている。

【万場】

マンバ。

上町の上村川左岸にある風折沢に沿って二ヶ所ほどある。中流域のマンバ小字には的場稻荷神社がある。

マンバとは、語源辞典にあるように、ママ、ハバ、ババなどと同じで「崩壊地形、浸食地形」をいうのであろう。

従って、マンバとは「崩壊地のあるところ」を意味する。

国土地理院の全国地図には、マンバ地名は17ヶ所に中・大字として記録されており、うち15カ所は「万場」となっている。

【ミコシ・ミコヲシ】

ミコシ。

ミコシ→ミコヲシと転じた語であろうか。ミコオシ小字とミコシ小字は接している。

これらの小字は、程野の城址周辺にある。

ミコシとは何か。わかりにくい地名であるが、二説を挙げておきたい

①ミはカミ（神）の上略（語源辞典）で「お宮」をいう。コシは「神社を祀った山の中腹」ではないかという（泰阜村誌）。以上から、ミコシとは「お宮のある山の中腹部付近の土地」をいうのであろうか。山頂には城山三社神が祀られている。

②ミコシとはミコ（皇子）・シ（下）か。シはシタ（下）の語根という（語源辞典）。ミコシとは「皇子を祀っているお宮の下方の土地をいうのであろうか。「皇子」は応神天皇

すなわち八幡神で、山頂にある城山三社神をいうか。

全国地図には、ミコシ地名は3ヶ所に中・大字として挙げられているが、ミコオシ地名はない。

【水ノ口】

ミズノクチ。

程野の上村川左岸の小沢沿岸にある。

ミズノクチとは何か。語源辞典に依りながら二説をあげる。

①クチは「入口」で、ミズノクチとは「井水の取り入れ口」をいうか。

②クチ←フチ（縁）と転じたもので、ミズノクチとは「川べりの土地」をいうか。

2.5万分の1の全国地図には、ミズノクチ地名は5ヶ所が中・大字として記載されている。

【水見沢】

ミズミザワ。

下栗の西部にあり、そこを流れる谷川が水見沢で南の遠山川に注いでいる。

ミズミサワとは何を意味しているのか。二説をあげたい。

①ミズミはミズ（水）・ミ（廻）で、「水路が屈曲しているところ」をいうか。従って、ミズミサワとは「水路が屈曲して流れている谷川のあるところ」をいうか。

②ミズミ←ミズ（水）・スミ（澄）と転じた語で、スミはスム（澄）の連用形が名詞化した語。以上から、ミズミサワとは「水が澄んでいる谷川」を意味するか。

全国地図には、ミズミザワ地名もミズミサワ地名も記載はない。

【水元】

ミズモト。

中郷の東部山地にあり、神燈沢の上流で上中郷浄水場がすぐそばにある。

ミズモトは「(神燈沢の) 水源のひとつがある所」をいうのであろう。

全国地図には、ミズモト地名は中・大字として3ヶ所が挙げられている。

【溝ケイト】

ミゾガイト。

中郷の上村川右岸の氾濫原とその上の段丘面にある。熊ノ川であろうか、小さな谷川が流れ込んでいる。

ミゾは人工の水路をいうが、「細長く流れる川」もいうことがある(語源辞典)。この場合は後者か。

従って、ミゾガイトとは「細い谷川が流れている集落地」をいうのであろうか。

全国地図には、ミゾガイト地名は載っていない。

【道下】

ミチシタ。

程野の上村川右岸に二ヶ所ある。一つは唐沢の南に、もう一つはさらに南方の大渡沢右岸にある。

ミチシタとは、字面の通りで「道路の下方の土地」をいうのであろう。

唐沢の南にあるミチシタはその通りになっているが、大渡沢のミチシタは現在をあてはまりそうにない。小字発生時には、この小字の上の方に道があったのであろうか。

ミチシタ地名は全国地図には21ヶ所で中・大字に挙げられている。

【三峯】

ミツミネ。

程野の正八幡宮の上村川対岸の高台にある。上村川右岸になる。薬師如来堂が近くにあり、独立峰になっている。

ミツミネとは「三峯信仰に関わる小字名」ではないだろうか。口碑も残っていないようで、具体的にはよくわからない。

中郷には三峯神社がある。埼玉県秩父郡大滝村の三峯神社から勧請したのであろう。上町や中郷では水窪にある山住神社への代参講が行われていたという。三峯神社も山住神社も山犬(狼)を神使としており、その絵札をもらってきて田畑に立てて猪除けにあいたという(遠山谷の民俗)。

程野の、このミツミネ小字でもシシ除けの神事が行われていたのではないだろうか。

全国地図には、ミツミネ地名は10ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「三」と「峰」の字が宛てられている。

【南】

ミナミ。

程野のミツミネ小字や薬師如来堂がある段丘面から四方の山地へ上る傾斜地

にある。

ミナミとは何か。二説。

①ミナミとは「南の方にある土地」と思われるが、基準になっているのは何であろうか。ミツミネ小字の独立峰か薬師如来堂か、それとも上村川の対岸にある程野の正八幡宮であろうか。いずれも南というより南西方向になる。

②ミナミはミ（美称の接頭語）・ナミ（緩傾斜地）か（語源辞典）。であれば、ミナミとは「緩い傾斜の土地」になるが、どうであろうか。

【峰の平】

ミネノタイラ。

程野の神燈沢の中流域にある。側稜と側稜の間の谷間になる。

ミネノタイラとは何か。苦しまぎれながら二説を挙げる。

①タイラはタ（語調を整える接頭語）・イ（井）・ラ（「場所」接尾語）か。すなわち、ミネノタイラとは「尾根と尾根の間で流水のあるところ」をいうのであろうか。

②タイはアイヌ語で「傾斜地」を意味するという（金田一京助）。であれば、ミネノタイラとは「峰まで続く傾斜地になっているところ」か。アイヌ語をもちださざるを得ないところに無理があるか。

全国地図には、ミネノタイラ地名は載っていない。

【ミヤクジ】

下栗の津島牛頭天王神社の北方にある。

ミヤクジは御左口神のことであろうか。漏矢神ともいう。諏訪の先住民が祀っていた神で、縄文文化が稲作に接したときに生まれた神だという。呼称は200種を越える。今井野菊によれば、このシャクジ系の社祠、神座は長野県780、愛知県229、静岡県233、山梨県160、三重県140、岐阜県116を数えるという。三遠南信を中心に広がっている神である。

上村ではオシャグリサマと、オシャモリサマ、オシャゴリサマ、オシャモジサマなどと呼んでいる。なくし物があると拝み、なくし物が出てくるとオシャモジを奉納したという（遠山谷北部の民俗）。

ミヤクジとは、この「オシャグリサマが祀られていた場所」をいうのではないだろうか。

全校地図には、ミヤクジ地名は見当たらない。

【宮ノ久保】

ミヤノクボ。

下栗の木澤須沢境にある。

ミヤノクボとは「お宮があった窪地」であろうか。かつて、ここにお宮が祀られていたと思われるがどうであろうか。

全国地図には、ミヤノクボ地名は9ヶ所が中・大字として挙げられており、その全てに「宮」の字が宛てられている。

【宮ノコシ】

ミヤノコシ。

上町の上村川右岸にあり、上町の正八幡宮の下流側にある小さな小字である。コシは「付近。そば」の意（国語大辞典）。岐阜や三重の方言であるという。すなわち、ミヤノコシとは「お宮付近の土地」をいうのであろう。正八幡宮の傍にある土地である。

全国地図には、ミヤノコシ地名は5ヶ所中で・大字として記載されている。

【宮（ノ）下】

ミヤノシタ。

程野の上村川左岸の程野正八幡宮の近くに四ヶ所にある、小さな小字であるが、かつては一つながりになっていたと思われる。

ミヤノシタとは、字面の通りで「お宮の下側にある土地」をいう。

全国地図には、ミヤノシタ地名は中・大字として65ヶ所が記載されている。ミヤノコシ地名やミヤノタイラ地名より、かなり多い。

【宮ノ平】

ミヤノタイラ。

中郷の正八幡宮の近くと下栗の子安神社を祀るところに一ヶ所ずつある。

ミヤノタイラとは何を意味しているのだろうか。二説を挙げざるをえない。

①タイラは「山中にある平らな所」をいう（国語大辞典）。従って、ミヤノタイラとは文字通り「お宮のある平地」をいう。中郷のミヤノタイラはこれであろう。

②平らでないところ、緩傾斜地でもないところにタイラ地名がついている場所がある。下栗の大野のタイラがそれ。比較の問題で、近くの急傾斜地に比べれば少しは斜角が緩んでいるようにもみえるので、それをタイラと表現した、ということも考えられないこともない。そうなれば①となるが、やはり疑問の方が大きい。そこでアイヌ語説を挙げておきたい。タイはアイヌ語で「傾斜地」を意味する。このアイヌ語に「場所」を示す接尾語がついてタイラとなったということも考えられる。そこで、ミヤノタイラとは「お宮のある傾斜地」をいうのであろうか。

全国地図には、ミヤノタイラ地名は9ヶ所に中・大字として挙げられており、そのすべてに「宮」と「平」の字が宛てられている。

【明ガ】

ミョウガ。

中郷の上村川右岸の川縁から尾根を越えて広がっている。

ミョウガとは何か。三説を挙げる。

①ミョウガはミヨ・ガ（処）が転じた語で、ミヨは「大水で削られて埋まらない所」をいう（語源辞典）。従って、ミョウガとは「大水で削られたままになっていた場所がある土地」をいうか。

②ミョウガはミ（接頭語）・ヲ（峰）・ガ（処）で、「側稜の尾根が続いている所」を意味するか。（語源辞典）

③「茗荷は、不思議に木地屋と関係があるらしいが、その理由はわからない」（民俗地名語彙事典）という。従って、ミョウガとは「木地師が住んでいたところ」をいうのかもしれない。今でも木地師がいたところに茗荷が残っていることもあるという。

2.5万分の1の全国地図には、ミョウガ地名が中・大字として28ヶ所にある。宛てられている文字はいろいろで、11種類にもなる。

【明神下】

ミョウジンシタ。

上町の上村川右岸にあり、「明神平」小字と上村川の間挟まれている。

ミョウジンシタとは字面の通りで「諏訪明神社の下の麓の方にある土地」を意味する。

全国地図には、ミョウジンシタ地名が1ヶ所だけ中・大字として挙げられており、「明神下」の字になっている。

【明神平】

ミョウジンダイラ。

上町の上村川右岸の諏訪明神社の周りに四ヶ所ある。この小字発生時には、繋がっていたものと思われる。

ミョウジンダイラとは「諏訪明神が祀られていて小平地もある土地」をいうのであろうか。四つの中には平地のないところもあるが、かつて一つながりになっていたときには、平地もあったといえる。

全国地図には、ミョウジンダイラ地名は、中・大字として2ヶ所に記載され、いずれも「明神平」の字が宛てられている。

【向井】

ムカイ。

上町の上村川左岸にある。

ムカイはムカヒから転じた語で「あちらの側。むこう」をいう（広辞苑）。従って、小字のムカイは「(正八幡宮の)川を越えた向かい側にある土地」をいう。

国土地理院の全国地図には、ムカイ地名が中・大字として94ヶ所に挙げられており、いずれにも「向」の字が入っている。

【向】

ムコウ。

上町の「向井」小字に接し、その下流側にある。

ムコウはムカヒの音便化した語で、その意味は「向井」と全く同じで「上村川を越えた向側にある土地」をいう。基準になっているのは上村自治振興センターではなくて、上町の正八幡宮であろう。

全国地図には、ムコウ地名は5カ所が中・大字として挙げられている。

【村木】

ムラキ。

下栗の屋敷にある。

ムラキとは何をいうのであろうか。難しい地名である。よくわからないので、三説を挙げておきたい。

①中国筋の踏鞴吹きをムラゲというが、これはムラギミから転じた語という。ムラキ（村木）も、このムラギミ（村君）から転じた語と考えることはできないだろうか。ムラギミは漁村に残っている語であるのが、少しブレーキになるかもしれない。しかし、このムラキ小字は「屋敷」中宇にあるし、下栗の本村には「君ヶ屋敷」小字が残っている。以上から、ムラキとは「（屋敷集落の）有力者の屋敷があったところ」かもしれない。木地師には砂鉄から鉄を精錬した形跡もあるらしいので、ムラゲという語が木地師集団のなかでは生きていたとも思われるが、どうであろうか。

②ムラキ←ムラキザと転じた可能性もないわけではない。村キザというのは樽木を流すときにどこの村の木材なのか出所を明らかにするために、木材に鉋目を刻んだことがあったという（分類山村語彙）。下栗でこうしたことが行われていたという資料はないが、可能性がないわけではない。このことから、ムラキとは「材木に鉋目を刻んだところ」をいうのかもしれない。

③ムラはムラ（斑）と関連して、「凹凸の多い土地」をいうか（語源辞典）。キは「場所」を指す接尾語。以上から、ムラキとは「凹凸の多い山地になっているところ」をいうか。

全国地図には、ムラキ地名が中・大字として4カ所に挙げられており、うち3ヶ所は「村木」となっている。

【メイカゲ】

程野の東部山地にある小さな谷で、ヤダイラ（八平）小字の南端に接している。

メイカゲとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①メイカゲは、メ（接頭語）・イ（井）・カゲ（蔭）。メは「小さい」意、イ（井）は「流水」、カゲはカケ（欠）の濁音化した語で「崩壊地形」をいう。以上から、メイカゲとは「小さな谷で流水もあり崩崖もあるところ」を意味するか。

②メイは動詞メイル（滅入）の語幹で「崩壊地形」といい、カゲは「日蔭地」をいう。すなわち、メイカゲとは「崩崖もあり日蔭地になっている土地」をいうか。

メイカゲ地名は全校地図には載っていない。

【ソウギボウ】

ソウギボウ。

下栗の屋敷から大野へ向かう山地にある。

ソウギボウとは何か。全く見当もつかなかったが、改訂総合日本民俗語彙でようやく見つけることができた。ゾウキボウである。「長野県上伊那郡あたりで、厠の尻ふきに用いるもの。粟、麻、楮などの稈、また萱などを押切で長さ4寸ぐらいに切って使う。壺の中に落とすと下肥を使うときに邪魔になるので、使用後別にしておく」とある。

従って、ソウギボウとはソウキボウのことで、「ソウギボウを集めてきた山地」をいうのであろうか。ソウギボウは「雑木棒」であろうか。

上村では、ステンボーといい、全国的には「籌木（ちゅうぎ）」という所が多かったという。上村では榎（さわら）を長さ 20cm 前後、幅は 2cm ほどに切って使い、ためておいてドラム缶や畑で焼いたという（遠山谷北部の民俗）。

チュウギといえは、1957 年ころ、岩手県お開拓地で見たことはあるが、どうしても使えなかったことを覚えている。

ソウギボウ地名は、全国地図には無い。

【茂シトデ】

モシトデ。

程野の上村川左岸の氾濫原から低位段丘面を越えて次の段丘面に向かう傾斜地までを含む広い小字になっている。

モシトデとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①モシトデはモ（最）・シト（湿）・デ（出）で、「河原で水に漬かり、湧水も流れ出している湿地で、新たに人手が入った土地」をいうか。

②モはモ←モモ←ママ（壙）と転じた語で、「崖地」をいう。つまり、モシトデとは「崩崖のある湿地で新たに人手が入った土地」を意味するか。

全国地図には、モシトデ地名は 1ヶ所だけであるが、中・大字として挙げられている。

【モツソウ】

モツソウ。

中郷の西部山地にある。

モツソウ（物相）とは「ふつう円筒形の曲物で、これに飯を押し込んで過多に抜き供する。多く寺院などで用いられる」という（国語大辞典）。形は円筒形とあるが、物相頭という語もあって、こちらは「飯を盛る物相のように丸い頭」とあるので、モツソウには球形もあり得たと思われる。思い出せば、祖母が亡くなった時に、母が御飯を二つの御飯茶碗に挟んで球形にして仏壇に供えたことがあった。いま考えれば、それは茶碗をモツソウにしていたのであろう。球形のモツソウである。

以上から、モツソウとは「物相のような側稜の峰があるところ」をいうのであろう。モツソウ小字は側稜の先端部が急傾斜地になっていて、その上にある峰をモツソウに見立てたのであろう。

モツソウ地名は全国地図には載っていない。

【本市場】

モトイチバ。

上町の上村川左岸の風折沢が合流するところにある。

モトイチバとは、字面の通りで「以前に市がたった所」をいうのであろう。市が立つ場所は河原が多く、権力が及ばないアジュールになっていたというが、この上町の市はどうであったか。

全国地図にはモトイチバ地名は3カ所の中・大字として挙げられており、いずれも「本市場」となっている。

【桃木沢】

モモノキザワ。

上町の東部山地の奥に二ヶ所ある。

モモノキサワとは何か、語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①モモノキザワとは「桃の木が自生している谷川のあるところ」か。桃は中国から渡来したが古くから野生化していたという（牧野植物図鑑）。

②モモはモモ←ママ（壺）と転訛した語で「崖」をいい、ノキはヌキ（抜）の転で「崩壊地形」をいう。従って、モモノキサワとは「崖が崩れている谷川のある土地」を意味するか。

全国地図には、モモノキザワ地名は載っていない。

【森】

モリ。

中郷の東部山地の奥にある。

全国地図にはモリ地名が多く、中・大字として128ヶ所にも挙げられており、うち124ヶ所が「森」となっている。単に「樹木が多くこんもりと茂った所」（国語大辞典）だけではないからであろう。

モリとは何か。モリは「神霊の寄りつく樹林が高く群がり立った所」をいうのであろう（国語大辞典）。この小字にお宮があったということは聞いていないので、おそらくは山神が祀られていた場所ではないだろうか。

【森下】

モリシタ。

程野の上村川左岸で小沢が合流する地点にある。

モリシタとは「神聖な樹林が群がり立っている所の麓の土地」を意味する。少し上の方に天照皇大神のお宮や「根ノ神」小字がある。

全国地図にはモリシタ地名は35ヶ所に挙げられている。因みにモリウエ地名は3ヶ所と少ない。地名として採るのに遠慮があったのだろうか。

【休石】

ヤスミイシ。

程野の上村川に注ぐ蛇洞沢の下流域に二ヶ所ある。かつては繋がっていたかもしれない。

国語大辞典には「歴史上の著名人がその石に腰かけて休んだなどの伝説をもつ石」とあるが、日本民俗大辞典には「もとはその石の上に神輿を乗せて休ませ、祭を行う所であったと推定される。ところが休み石という名称だけが残って、その意味が忘れられた結果、英雄や高僧などが通りかかりに休んだと解されるようになったと思われる」とある。また別書には「伝説は伴っているが、かつては神を勧請して祭を行う場であったことはほぼ疑いない」（改訂総合日本民俗語彙）とある。

以上から、ヤスミイシとは「神を招き、祭が行われた場所」をいうのであろう。

どんな神を招いたのかは不明である。近くの上村川の対岸には山神三社があるが、もっと離れている正八幡宮の諏訪大明神だったかもしれない。

全国地図には、ヤスミイシ地名は中・大字として6ヶ所にあり、その全てが「休石」となっている。

【ヤスミ所】

ヤスミジョ。

下栗の本村の台地の東端から祓沢に下る斜面にある。台地の東端には道路が通っている。

ヤスミジョとは、休場と同じで「見晴らしのよい、水の湧くような所に腰の高さくらいの石を置き、荷担ぎの者の休憩の便にしてあり、小祠などもある」ところをいうのであろうか（改訂総合日本民俗語彙）。

【八平】

ヤダイラ。

程野の東部山地にあり、平地になっている。

ヤダイラとはヤ（菴）・ダイラ（平）で「湿地もある山間の平地」をいうのであろう。

全国地図には、ヤダイラ地名が中・大字として6カ所に挙げられている。

【柳沢・柳木沢】

ヤナギサワ・ヤナギザワ。

下栗の「屋敷」中字の西部にあり、二つは接しており、ボッタ沢の上・中流域と重なる。

ヤナギサ（ザ）ワとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①ヤナギサワとは、文字通り「柳が自生している谷川」をいうか。

②ヤナは「斜面」をいい、ギはキ（処）の濁音化した語で「場所」をいう。以上から、ヤナギサワとは「傾斜地にある谷川」を意味するか。

全国地図には、ヤナギサワ地名が中・大字として83カ所にあり、うち80ヶ所が「柳沢」で、1ヶ所が「柳木沢」となっている。またヤナギザワ小字は15ヶ所に記載があり、いずれも「柳沢」の字が宛てられている。

【柳沢】

ヤナザワ。

程野と中郷に一ヶ所ずつある。程野のヤナザワ小字は上村川右岸の支流の柳沢沿いにあり、中郷のヤナザワ小字は上村川左岸の神燈沢の近くにある。

ヤナザワとは何か。これも先のヤナギサワと同じ由来と考えられるので、繰り返しは省くが、もう一説を付け加えたい。

③ヤナザワはヤナ（築）・ザワ（沢）かもしれない。すなわち、ヤナザワとは「築を仕掛けることが多い谷川のあるところ」をいうか。程野のヤナザワについては、この解釈が当てはまるかもしれない。

ヤナザワ地名は、全国地図に4ヶ所が中・大字として挙げられており、宛てられている文字は「築沢」が3ヶ所、「柳沢」が1ヶ所となっている。

【紋沢】

モンザワ。

程野の西部山地にあり、上村川支流の柳沢のさらに支流の谷川にある小さな小字である。

モンザワとは何か。モンザワ←モミサワと撥音便化しさらに濁音化した語であろうか。モミは動詞モム（揉）の連用形で「動揺させる」意で「崩崖」のこと（語源辞典）。従って、モンザワとは「崩崖のある谷川」を指すのであろう。上村には崩壊地形をいう小字名が豊富にある。

全校地図にはモンザワ地名は記載されていない。

【藪上】

ヤブウエ。

中郷の東部山地の七久保にある小さな小字である。

ヤブウエとは何か。二説を挙げる。

①ヤブは「低木・草・竹などが手入れもせず乱雑に生い茂っている所」をいう（国語大辞典）。従って、ヤブウエとは「おどろの上方の土地」をいうか。

②あるいは、ヤブには「山を焼いて畑に作った土地」をいう（改訂総合民俗語彙）。静岡県の大井川上流地方で使われていたという。ヤブウエとは「焼畑の上の方の土地」をいうのであろうか。

全国地図には、ヤブウエ地名は載っていない。

【山ノ神】

ヤマノカミ。

中郷の東部山地にあり、神燈沢とその南側にある上村川支流に挟まれている。

ヤマノカミとは、「山ノ神を祀っているところ」をいうのであるが、ここ中郷の山神は、傾斜地にある山神で、水神とは対になっていないと思われるが、確認はしてない。

全国地図には、ヤマノカミ地名が中・大字として70ヶ所に記載されている。

68ヶ所で「山」と「神」の字が宛てられている。

【山部】

ヤマベ。

上町の上村川左岸の国道からその東側の斜面に延びている。「明神平」小字の対岸付近になる。

ヤマベとは何か。分かりにくい地名である。ヤマベとは「林になっているあたり」か。

全国地図には、ヤマベ地名が16ヶ所で中・大字として記載がある。

【ヤノ小屋】

ヤヤコヤ。

程野の東部山地の小沢の北側斜面にある小さな小字。

ヤヤコヤとは何を意味しているのか。これも分かりにくい地名である。

ヤヤケルという方言が下伊那にはある。「慌てふためく」の意であるが、崖が崩れる様をいうと解することもできるので、ヤヤコヤ←ヤヤケ・ヤ（菴）の転訛を考えたが、エ段→オ段の母音交替はあまり見られないようなので、この解釈は放棄せざるをえなかった。

ではヤヤコヤとは何か。怪しげな仮説であるが、二説を挙げておきたい。

①ヤヤは下伊那地方の方言で「赤ん坊」をいう（国語大辞典）。従って、ヤヤコヤとは「出産するとき一ヶ月ほど母子ともに起臥飲食した小屋があった所」であろうか。他の地域ではタヤという。上村にこうした小屋があったかどうか。

②ヤヤは「女の子」の意で、上伊那南部の方言であるという（国語大辞典）。ヤヤコヤとは「月ごとの女性の忌小屋のあった所」かもしれない。しかし、上村では、「ヒマヤ小屋」と呼んでいたというので（遠山谷の民俗）、「ヤヤ小屋」とはいわなかったのか、それとも特別な家で使われていた語である可能性も否定できない。

全国地図には、ヤヤコヤ地名は載っていない。

【卯林】

ヤナギバヤシ。

程野の東部山地の奥にある。

ヤナギバヤシとは何か。二説を挙げる。

①ヤナギバヤシとは、字面の通りで「柳も自生している、樹木の茂っている所」をいうか。

②ヤナギはヤナ（斜面）・ギ（処）で、「傾斜地」を意味するという（語源辞典）。従って、ヤナギバヤシとは「樹木の茂っている傾斜地」を指すか。

全国地図には、ヤナギバヤシ地名は記載されていない。

【ヨウテ場】

ヨウテバ。

上町の西部山地にあり、林道伊藤線が屈曲しながら通っている。

ヨウテとは何だろうか。二説をあげておきたい。

①ヨウテは「傾斜地」をいう（改訂総合民俗語彙）。千葉県で使われていたという。これが上村まで伝えられているとすれば、ヨウテバとは「傾斜地」を意味することになる。

②ヨウテ←ヨウチと転じた語かもしれない。イ段→エ段の母韻交替は「きわめて多く、中世ごろに目立って多い」という（国語学大辞典）。ヨウチとは下伊那郡で焼畑の第四年目をいう（改訂総合民俗語彙）。以上から、ヨウテバとは「焼畑が行われていた土地」であろうか。

全国地図には、ヨウテバ地名は載っていない。

【横ガラ】

ヨコガラ。

上町の南西部山地にある。

ガラは「小石混じりの地」をいう（語源辞典）。すなわち、ヨコガラとは「横に広がっている小石混じりの土地」となるが、どうであろうか。

ヨコガラ地名は全国地図には載っていない。

【横栗山】

ヨコグリヤマ。

下栗の半場に三ヶ所あるが、小字名発生時には一つなかりになっていたのであろう。上平公園も含まれている。

ヨコグリヤマとは何か。国語大辞典に依りながら二説を挙げる。

①ヨコは「上下の方向に対して、水平の方向」をいい、グリはクリの濁音化した語で「石ころ」のこと。以上から、ヨコグリヤマとは「ほぼ水平方向に延びている礫の多い尾根」を意味するか。

②クリはクリ（涅）で「湿地」をいう。すなわち、ヨコグリヤマとは「水平方向に延びている側稜の泉のあるところ」をいう。

全国地図には、ヨコグリヤマ地名は記載されていない。

【横畑】

ヨコハタ。

下栗の遠山川に下る傾斜地にある大きな小字である。

ヨコハタとは、「水平に広がっている焼畑」をいうのでであろうか。

全国地図には、ヨコハタ地名は7ヶ所が中・大字として挙げられており、うち5ヶ所が「横畑」になっている。

【シオノクキ】

シオノクキ。

程野の上村川左岸の漆平沢が合流する地点に二ヶ所あるが、当初は繋がっていたものであろう。

シオノクキとは何を意味するのか。三説を挙げておく。

①シオは動詞シボル（搾）の語幹で「楔形の谷の奥」をいい（語源辞典）、クキ（岫）は「山の斜面やがけにあるほらあな」のこと（国語大辞典）。以上から、シオノクキとは「（漆平沢の）楔形の谷に抉られた穴のあるところ」をいうのであろうか。

②シオは動詞シホル（霑）の語幹で「湿地」のこと（語源辞典）、クキは「山の斜面にあるほらあな」か（国語大辞典）。従って、シオノクキとは「自然の湧水のある傾斜地でほらあながある所」か。果たして洞穴があるかどうかは未確認。

③クキには「山中の細道」の意もある（国語大辞典）。福島の方言であるといっているので、この解釈が成立する可能性は小さいか。これだと、シオノクキとは「泉がわきでている山中の細道が通っている所」をいうのかもしれない。現在は国道が通っているが、かつては細い道であったと思われる。

シオノクキ地名は全国地図には無い。

【ロウジ】

中郷の西部山地の小川沢の流域にある細長い小字である。

ロウジはロジが長音化した語であろうか。ではロジとは何か。二説を挙げる。
①ロジは「餅などを入れる浅い箱」をいう（国語大辞典）。佐久や愛知県北設楽郡の方言だという。ロジとは「餅などをいれる浅い箱のような地形」をいうか。小川沢の谷を浅い箱に見立てたのであろうか。
②ロジ（露地）には「おおうものの何もないむきだしの土地」の意もある（国語大辞典）。ロジとは「樹木の無いむきだしの土地」をいうか。土石流などの流れた跡で、樹木の無い谷を示したものか。

全国地図にはロウジ地名は記録されていない。

【山葵沢】

ワサビザワ。

中郷の東部山地にあり、馬老沢が流れている。

ワサビザワは何を意味するか。二説を挙げる。

- ①ワサビザワとは、文字通りで「ワサビが自生している谷川」をいうか。ワサビを栽培していたことも考えられないわけではない。
②ワサは動詞ワザク（裂）の語幹が清音化した語で「崩壊地形」をいい、ビはべ（辺）が母韻交替した語（語源辞典）。以上から、ワサビザワとは「崩壊地周辺で谷川が流れている所」か。

2.5万分の1の全国地図には、ワサビザワ地名は7ヶ所に中・大字として挙げられており、うち1ヶ所が「山葵沢」、6ヶ所が「ワサビ沢」となっている。